神に気に入られし人間

新城真宵

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

普通に生きていた主人公は神に気に入られた。

その後に神に「君は別の世界で生きるべきだ」と言われ、新しい世界で生きる事になる。

目次

君が気に入った　1
執事　8
人妖大戦　20
土着神，諏訪子　29
諏訪大戦　42
神社の巫女，八雲の幻想　49
神無月，稗田家　56
紫と浦島と月の都　64
鬼退治　74
宵闇の妖怪，輝夜姫　89
蓬莱の薬と富士の山　98
独り立ち　114
命蓮寺＝妖怪寺，花　123
妖怪の山　134
白玉楼の庭師と主と桜　141
第一次幻想郷大戦　152
終戦　164
門番＆魔女　176
狂気の吸血鬼　184
プリズムリバー四姉妹　191
弾幕ごっこ　197
幽閉　203
間違った思い込み　208
紅霧異変の解決者　213

異変解決？ ―― 218
紅月異変 ―― 223
執事と死神と主人公 ―― 228
宴会 ―― 233
文々。新聞 ―― 243
紫の頼み ―― 248
霊夢の在るべき姿 ―― 254

君が気に入った

意識が覚醒する。だがそれは有り得ない事の筈。
なぜなら私は病気……それも世に出ていない新種の病気に掛かり死んだ筈だ。
だが、あれは本当に『死』だったのか？
怖い…という感情も痛いという事も感じなかった。
それよりも此処は…？一面が白くて明るい……天国の様な場所だ。
「起きたのかい？」
ふと、後ろから声を掛けられる。
私は咄嗟に振り返る。其処には２０歳後半ぐらいの男性が立っていた。
「…？…混乱しているのかい？まぁ、無理もないか。聞きたい事とかある？」
「貴方は？」
「僕かい？僕は星月。人間でいう神様をやっているよ」
「神様？」
「そう、神様」
もう一度、目の前にいる人物の姿を確認する。
格好は着物を着て狐のお面をして如何にも日本という感じを出している。
だが、翼が生えていたり神々しかったりは殆どしない。
「いや、まぁ、神様全員がそんな感じじゃないからね」
……心を読んで来る辺り本物の神様の様だ。
「それで神様が何の様ですか？」
「う～ん、そうだね。適当な理由を述べるとすれば……
君が気に入った」
「……え？」
何故か神に気に入られた。

私の名前は星羅芽衣（せいらめい）。現在進行形で神様に気に入られた普通？の人間です。
というか、どうして私が神様に気に入られたのか。それが不思議だった。
「それはもう単純に気に入ったとしか……」
「また心を……まぁ、神様だから仕方ないか。それは良いとして私は死んだ？筈だけど何で此処にいるんですか？天国とか地獄とかあるんじゃないんですか？」
「君を此処に呼んだ理由はさっき言ったよね、それとは別にもう一つ！君はね、何事にも縛られず自由に生きるべきなんだよ！それは僕が一番理解している」
「え…？話が飛躍している気がしますけど……要するにもっと生きろって事ですか？」
「大体合ってる。というか敬語なんて使わなくて大丈夫だよ、僕と芽衣は切っても切れない縁だからね！」
切っても切れない縁てどういう事なんだろ。でも、まぁ、堅苦しい事は苦手だし普通に接しよう。
本人が良いって言ってるし良いよね。
「というか勘違いしてるかもしれないから言っておくけど芽衣は別に死んでないよ。僕がそう見せかけただけだから。転生って言い方は違うかな、生まれ変わる訳じゃないし」
「じゃあ星月。私はどうすれば良いの？元の世界じゃあ私は死んだ事になってるんでしょ？」
「ああ、心配しなくても大丈夫だよ。芽衣は別の世界、東方ｐｒｏｊｅｃｔの世界に行けばいいから」

「東方?東方ってあの弾幕シューティングゲームの?」
あのゲームは大分やり込んだし二次創作とかでも色々と楽しんでたから嬉しいんだけど……
どう考えても私みたいな普通の人間が行ってどうこう出来るもんじゃないよね。
「そんな事無いよ、芽衣は元から能力を持っているしね。じゃあ良い夢を」
「へ?私が能力って……あれ……なんか…急に眠く……」
意識が朦朧として地面に倒れる。
私が最後に見た光景は星月がまるで子を送り出す親の様な顔だった。
そして私の意識は途切れた。

う〜ん、頭がガンガンする。吐き気はないけど少しだるい。
って此処は何処?周りが森なんだけど……見た事ない植物が多く生えてる……。
(やぁ、聞こえるかい?芽衣)
「え、星月?何処にいるの……」
突然、頭の奥底から星月の声が聞こえてくる。
(芽衣の頭に直接言葉を送っているからね、頭で伝えたい事を思えば芽衣も伝えられるよ)
(こ、こんな感じ?)
(そうそう、良く出来てるよ。それじゃ本題だ。君は今、八意永琳が生まれる数年前だよ。場所はそう遠くないけど、森の中だから向こうからは見つけれないだろうね。暇だったら行ってみるのもいいかもね)
(へぇー、永琳が生まれる前……って、え!?という事は、霊夢たちが生まれるまで数億年かかるの!?)

（それは……心配ないよ君の能力を使えば問題無いから、君の能力は『全てを操る程度の能力』だよ。それがあれば君の寿命や力、全てを操る事が出来る）

……チート過ぎない？私の元々の能力がこれってどんな遺伝子なんだろ……。

でもこの能力があれば十分にこの世界を楽しめそう！

（あはは、芽衣らしいね。じゃ、僕は仕事が有るから頑張ってね！）

そう言って星月の言葉が途絶える。

「……永琳が生まれるまで、此処に家でも作って住もうかな」

そんな事を誰も居ない森の中で呟いた。

「まぁ、言ってもしょうがないし行動しよう」

……う～ん、家を作ろうにもどうすれば良いか分からないんだけど……。

私の能力だと周りにある木でも操って家でも建てればいいのかな？

有言実行！じゃあ、頑張りますか！

――１０分後――

出来たのは洞窟の様なものでそのままの意味で開放感がある家だった。

「何か……違うよね。そうだ、もっと能力をフルに使って……」

――１時間後――

「で、出来た～！やっと完成した～！疲れた～！能力を使うのにこんなに体力を使うんだなんて聞いてないよ……。あ、でも能力使って体力を回復すればいいのか。本当に便利だね」

それはともかく、私は早速自分で作った家に入った。中は私が家の設定を操つり思い通りに和で統一されてる。なんとなくで自分が作った物を家と認識してその設定を操つってみたら出来た。
念の為に自分の設定も操る事が出来た。
この能力……本当に便利過ぎる……。まぁ、今は眠いから明日やろう。
お休みなさい。
そうして私は都合良く有った布団を敷いて睡眠を取った。

――――次の日――――

『キシャアアアアアアアアッッ!!!』
「え!?何々!?」
いきなり外から大きな虫のような声が聞えて来た。
そう言えば東方の世界には妖怪が居たんだっけ……この頃も居るんだ……。
（まずは外を見て何が起こっているのか確認しなきゃ）
そうして窓から外を覗いてみたら大きな蜘蛛がいた。明らかにこの家を壊そうと近づいて来る。
あの大蜘蛛の縄張りに入ってたのかな?でも折角、作った家を壊されるのは……。
い、一応、言葉が分かるか話しかけてみよう。説得だよね。説得。
私は家から出て蜘蛛に話しかけてみる事にした。
「あ、あの蜘蛛……さん?私の言葉が分かりますか?」
『キシャアアアアアアアアッッ!!!』
なんか凄い駄目な感じがする。
「と、とりあえず。お、落ち着いて話し合いましょうよ。ね?」
そういうと、蜘蛛はいきなり私に向かって糸を吐いてきた。
「え!?えーと。木で防ぐ!」
私が周りの木を操ると周りにある木が私を守るようにして囲んだ。

吐かれた糸は木に遮られ芽衣には届かない。
それにしても、どうやってあの蜘蛛を落ち着かせればいいんだろう？
心を落ち着かせる……心を……そうだ！心を操って私は敵じゃない事を分かって貰えば良いんだ！
って色々と無理がある様な気がするけど…この方法しか無いか。
「えーと、まずは木で蜘蛛の動きを止めて」
木がすぐに蜘蛛を押さえつけるように囲み最初は抵抗していた蜘蛛も諦めたのか大人しくなった。
「次に心を操り……って何これ!?心が欲望しかないってどういうこと!?と、とりあえずは、心を操って新しい心……というか感情を作ろう。まずは……一通りの感情を……」
最初はこんなもんで大丈夫かな。人の感情をありったけ詰め込んだけど。
今、蜘蛛は疲れて寝てるので先に自分の設定を変えてみよう。
私の設定は……う～ん。人間とかを変えたらどうなるのかな？
結果、天狗，天使だと羽が生え、河童とかはあまり変化無し。
その他にも色々試したけど……まぁ、普通に人間でいいかな。
次に私は不老不死という設定に変えた。痛みは感じるけど傷が一瞬で治った。
その後に、色々と設定を変えて歳をいじくってみたりした。
けど、まぁ、不老不死なので変わらない。なんか体から霊力だっけ？みたいなのが込み上げてきた。
……あ、忘れてた。食べ物探しに行かないと。

――少女収穫中――

「良かった～、近くに色々な果物やら野菜があって」
『キシャー』

「あ、起きたんだね。……名前を付けよう。何がいい？」
『キシー』
「キシでいいの？」
『キシャー』
どうやらそれで良いみたいだ。
「じゃあ、キシ一緒にご飯食べよう！」
『キシャー』
その日は色々あったのでキシの上で寝てしまった。
ふかふかで気持ち良く暖かった。

執事

朝、私はいつも通り、寝室から水場に行き髪を整えていた
其処にとある人物が声を掛けてきた。
「お嬢様、おはようございます。朝食の準備は既に出来ております」
「うん、おはよう。キシ。いつも朝早くから悪いね」
其処には長身で少し細い銀髪の男性が執事服の様な物を着て立っていた。
「いえ、お嬢様は私という存在を創って頂いたのですから当然の事です」
「そんな、大袈裟な……」
話からも予想出来る通りこの男性はキシ。大蜘蛛から人間の姿に変わっている。
何でも私の身の回りの手伝いをしたいらしい。理由は上の通り。
何故、急にそんな事になったか。それは私がキシの年齢を操っちゃったんだよね。
そしたら知恵をが付いて自立しました。まぁ、それも数年前の話だけど。
私としては色々な事が出来るし、頼もしい存在だね！
あ、そうそう。キシによると人間が急激に進歩しているって言ってたね。
一回私が何かしたのかと聞かれたけど私は能力開発であんまり森から出ていない。
なので考えられるとすれば原作キャラの永琳が居るんじゃないかな。
「だから今日は～」
と言いながら横目でキシを見る。
「どうされましたか？何か御用ですか？」
「ＹＥＳ！人間の所に行こう！」
「人間の所……ですか。分かりました。準備をしますのでその間

に朝食を」
「は～い」
キシは奥の部屋に行き何かを探している様だ。
その間に私はご飯を頂くけどね。
今日の朝食は……魚だね。うん、美味しい！

そして数十分。私がご飯を食べ終えた頃、キシが奥の部屋から戻ってきた。
「何を探してたの？」
「金ですね。それともしもの為の物です」
「それ、どうするの？」
金は換金でもするのかな？それにもしもの為の物とは…？
「金は普通に人間に売買出来るでしょう。もしもの為の物は一昨日、お嬢様が作った物です。金もお嬢様が作ったじゃないですか」
「そうだっけ？」
……ああ、この前私が「石を他の物質に錬金してやるー」って言って金にしたあれかな？
それと一昨日は……再生爆弾だよね。広範囲で大爆発して被害が大変な事になるけど5分で壊れた地面や木が再生するっていう画期的な爆弾。この前森で使ったら妖怪が逃げちゃったんだよね。
探してみたら森の手前まで逃げてた……。悪い事しちゃったな～。
仲が良いという訳でも無いけど今度ちゃんと謝ろう。
「まぁ、これはもしもの為…ですから」
「いらないと思うけどな～……あ、そういえば此処から人間達の所までどれ位掛かるの？一回も森から出た事無いから分かんないけど」
「飛んで往復一時間程度です」
「じゃ、早速行こう」
さらっと流したけど私とキシは普通に飛べる。能力は使っていな

い。
私は普通に浮けるかなと思ったら普通に浮いて飛べた。
キシは妖怪だからかな？普通に飛べるみたい。
「ですが街中にそのまま降りる訳には行きませんよ」
「わかってるよ～」
街中に降りたら絶対に面倒な事になるしね。
……というか今更だけど私の家って森の中だから外から見えないんだよね。
数回、この森に人が迷い込んで来た程度でもこの家は見つかんなかったみたいだし（キシ情報）
人間も来ないし妖怪も近寄って来ない。平和って言葉がピッタリの数年だった。
まぁ、それもキシが妖怪の時に此処が縄張りだったからだと思うけど。

約、三十分後。無事に人間の街に着いた。
勿論、入る手前の所で人に見つからない様に慎重に降りた。
大きな門の前には兵士の様な門番が数人立っていた。
その一人が私たちを見ると直ぐに声を掛けてきた。
「お前達、何者だ？」
……正直に答えようかな～と私が迷っているとキシが答えてくれた。
「私達は森に住んでいる狩人の様な者です。今日はこちらに食材を調達しに来たのです」
「ふむ……いいだろう。妖怪じゃあ無さそうだしな。通って良いぞ」

「ありがとうございます」
キシと私は軽くお辞儀をして中に入る。
「……狩人ねぇ」
「間違ってはいないでしょう。実際、獣を狩る時だって有るのですから」
「まぁ、そうだね。じゃあ此処からは自由行動で、集合は此処で」
「分かりました。お嬢様、くれぐれもお気を付けて…」
「大丈夫、大丈夫」
そうして私とキシは別々に行動を始めた。
私は適当に街を歩き永琳に会えれば良いな～みたいな感じで探索していた。
まぁ、都合良く会える筈も無く集合場所に戻る。永琳は研究でもしていて忙しいのかな？
集合場所に行くとキシが多くの食料を持ち待っていた。
折角なので食事をして帰った。まぁ、食事と言っても今は二時過ぎだけど。
私とキシは大分、この街を探索してたのだろう。
「それじゃ、帰ろうか。キシ」
「はい、お嬢様」

―――帰り道―――

「それにしても、今日は疲れたね～」
「そうですね。まさか、あそこまで人間が多いとは思いもしませんでした」
「いやいや、そうじゃなくて」

「？」
周りの人達に多大な霊力やらを隠すのが疲れたんだよね、私はいつも出しっぱなしだし。
能力使えば良かった……というか私の霊力が多過ぎでしょ。
よくキシは妖力を隠すの疲れないよね～。
……そういえば、街中を見た感じまだ都市というより街だったんだよね。
て事は、まだ永琳は成人一歩手前ぐらいだって事だよね。
まだ、少しかかるかな。都市になるには。
私がそんな事を考えていると……
『きゃあああああぁぁぁぁぁぁ!!!』
森の奥から微かに女性の悲鳴が聞こえた。
「女の人の声？」
「どうやら、そうみたいですね。ですがこれと言って珍しい物でもないでしょう。妖怪も少なからず居ますし、森に入れば人間は格好の餌食ですよ」
まぁ、だからといって悲鳴を聞いても助けに行かないなんて事は無い。
……でも、森に入る人なんて限られてくる。それに女性となれば尚おかしい。
「キシ、急いで助けに向かうよ」
「はい、お嬢様がそう仰るのなら」

なんなのよ!?此処には薬草を取りに来ただけなのに、どうしてこんな目に遭わなきゃならないのよ!?此処はまだ妖怪が居ない所だってのに……何でいつも奥の方にいる妖怪がこんな近くに…。
周りには腹を空かせたであろう妖怪が数十匹……囲まれた。逃げれる筈も無かった。
「だ、誰か……!……助けて……!」
こんな森の中に誰がいる訳もないのに必死に声を上げる。
此処で人生を終えるのかと思ったその時……
「大丈夫?怪我とかしてない?」
その時、空から誰かが降りてきた。
私は何故か安心感を感じそれと共に其処で気を失った。

「あれ?助けに来たら、気絶しちゃった……」
その子はまだ19程度の女の子だった。
というかこの子…永琳?かな……髪色こそ違えど顔が似ている。
それにしてもこんな所に女の子を一人で行かせるなんておかしいよね。
護衛も無しに……。
「お嬢様」
「あ、キシ。……この子を襲っていた妖怪は?」
「人間達の所で買った食材を半分ほど渡したら帰って行きましたよ」
「そう。この子を一回、私の家に連れて行くよ。今日はもう遅いし」
現在は日も落ちかけていて暗くなろうとしていた。

「分かりました」
どうやってこの子に説明するかな……狩り人って言っても私飛んでる所見られたし……。
まぁ、何とかなるかな？

「……あなた達、誰？」
案の定、敵意剥き出しで睨まれました。デスヨネー。
「人に名前を聞く時は自分からとか言われなかった？」
「私は……八意永琳……一応科学者よ」
やっぱり永琳だった。
というかこの年齢で科学者って頭良すぎでしょ。まだ成人もしてないのに。
「私は星羅芽衣。……普通の人間だよ。ほらキシも」
「……私はキシ。お嬢様にお仕えする妖怪だ。これから食事を用意しなくてはいけないから失礼する」
「ちょ、キシ……」
そんなこと言ったら怪しまれるか敵と見なされるかもしれないでしょうよ。
「……私に何の……用……よ」
言い方は強気だけど声が震えてる。
そりゃあ、さっきまで死ぬかも知れない体験をしたら普通は誰だってこうなる。
それとも妖怪が怖いのかな？
「まぁ、取り敢えず。これでも飲んで落ち着いて。大丈夫、大丈夫。何もしないから」

私はそう言ってお茶を永琳に渡す。
「……」
何かを警戒しているのか口をしない。デスヨネー（二回目）
……知らない人から何か貰っても普通は飲まないよね……。
「本当に何もしないから。……あー、したと言えばさっき妖怪から助けた事ぐらいだけど……」
「え？……あ、そうだ。私、妖怪に襲われて……って貴方！空から飛んで来なかった!?」
「……能力を使ったんだよ。それと今日はもう遅いから明日に家に送るね」
「あ、ありがとう御座います。そ、それと助けてくれてありがとう御座います」
そう私に言うと頭を下げて永琳は渡されたお茶を飲み始めた。
……一応、信じてくれたみたいだね。良かった。というか普通に嬉しい。
「あ、そうだ。キシがそろそろご飯を作り終えると思うから一緒に食べよう」
「え？……あ、有り難く頂きます」
その日の夜は一緒に永琳とキシと私でご飯を食べた。
最初は少しキシの作ったご飯を疑っていた永琳だけど一口食べたら疑わずにどんどん食べ進んでいった。全部食べ終わった時に、
「……とっても美味しいです」
ってキシに言っていた。キシの誤解が解けたのなら嬉しいけど。

翌朝

「此処でいい？」

私は朝早くに街の少し手前の所に永琳を運んで飛んで来た。
途中、空なので妖怪に襲われる事も無かった。
「はい、大丈夫です。今回は本当にありがとう御座いました。いつでも私達の街に来て下さい。いつでも来れるように警備の人に私の知り合いって言えば通しておく様に言っておきます」
「ありがとう。それじゃあ、またね」
「ええ、それでは」

「ただいま～」
「お帰りなさいませ、お嬢様。朝ご飯が出来ていますので先にそちらに」
「ありがと。後キシ、これから妖怪が多分何かするから変化が現れたら報告宜しくね」
妖怪の巣は大きく分けて三つある。
まずは此処の森。キシが縄張りにしていた事もあって妖怪は少ないが多少はいる。
次は少し遠くにある山。何か鬼とか色々いるみたい。
最後にその山を超えた辺りにある森。此処はキシみたいなのが居ないから多く妖怪が住んでいる。
まぁ、全部キシに教えて貰ったんだけどね。
「？…何か……とは？」
まぁ、別にキシに言ってもいいよね。
「多分、戦争だよ。これから近い内に人間と妖怪の大戦争が起こる。まぁ、多分だけど」
「……了解しました」
キシはそう言うと早速、調べる為に出かけて行った。
恐らく、この森の妖怪達にでも手伝わせに行ったのだろう。
行動が早くて確実だからキシは頼りになる。

数年後

時は進んで数年後の昼。
「お嬢様、妖怪の方で動きがありました」
「妖怪が集まって何かをするとか？」
「……その通りでございます。数日後に人間の街を一斉に攻撃するそうです。向こうの山にいる鬼を筆頭に向こうの森の妖怪全員が参加の様です。此処の森の妖怪達は乗り気では無いようです」
「分かった、この数年間調べるのご苦労様。永琳に伝えに行くから留守はお願いね」
「仰せのままに」
さてと、永琳も多分知っていると思うけど一応伝えに行かないとね。
人と妖怪の戦争が始まるって事を……。

いつも通り、街……いや都市の手前で飛ぶのをやめて門の方へ向かう。
其処では前とは違く、張り詰めた空気が流れていた。
門番の人数も多くなっていて数回程度来ていただけの私は殆どの人の顔を知らない。
そして門に近づくと、声を掛けられた。
「誰だっ！貴様は！」

そう言って私に銃？の様な物を向けてくる。
今、この都市は私が知っている時代より数世紀先の技術を完成させている。
「私は永琳の知り合いだよ」
「！……失礼しました。今現在、警戒態勢で警備を行っておる所存ですので無礼をお許し下さい。それて知っておられると思いますが数日後にロケットが発射されます」
「ありがとね、それとお仕事頑張ってね」
「ありがとうございます。八意様の家はここから真っ直ぐ行った所にあります」

……この前見た時より永琳の家が大きくなってる。
というか全体的にまた文明が進歩してるね掃除ロボットとかいるし。
さてと、永琳でも呼んでみよう。
「えーいーりーんー」
暫くすると中から一人の女性が出てくる。
「……いったい誰よ、こんな忙しい時に」
「やぁ、永琳。久しぶり」
「星羅さん！」
「芽衣で良いよ」
「なら芽衣さんで」
三年振り位に会ったけど……大きくなったね……胸とか胸とか。
もう22歳ちょいだっけ？
「あ、それよりも、もうすぐ妖怪が一斉に攻めてくる事は知ってる？」
「……やっぱりですか」
「やっぱりって？」
「ここ最近、妖怪の攻撃が無くなったと知らせを受けていたんです。何か企んでいると思っていましたが……」
一応、伝えていと良かった。推測の判断と確実の判断は違うからね。

「そうだ芽衣さん。芽衣さんとあの執事はロケットに乗りますよね？」
「私は……この地球に残るよ。私が残るからキシも残ると思うけど」
「……理由を聞かせてもらってもいいかしら？」
「理由は至極単純。月は此処（地球）から見るからこそあんなに綺麗なんだよ。だから月に行くなんて……勿体無いでしょ？」
まぁ、実際。別に言っても良いんだけどね。暇な時に遊びにでも行こう。
「……あはは！面白い理由ですね。それじゃ芽衣さんに良い事教えてあげますね」
「え？何々？」
「私達が月に行くときに此処を消し去る為に核を打ち込むんです。妖怪に知識を与えない様にですね。ですが妖怪を全て死滅させようとする訳ではないのでこの都市を全て消し去る程度の核です。ですから森にいればまず被害を受けないと思いますよ。あ、でも核を打ち込んだ都市には近づかないで下さいね。体に毒ですから」
まぁ、要するに森にいれば安全だって事なのね。
でもこの大きな都市を消し去る程度って……本当に技術が進んでいるね。
「ありがとう、永琳！ロケットはいつ出発するの？」
「二日後よ」
「分かった、じゃあ二日後にまた来るよ！」
「え？」
私はそう言ってその場から飛んで帰った。

人妖大戦

〜二日後〜

さてと今日が永琳が月に行く日だ。その前に妖怪が一斉に攻めたら守り切れるだろうか？

まぁ、その時は私が防ぐしかないか。それとこの森の妖怪達も防衛を手伝ってくれるらしい。

一応、死なない様に能力掛けとこうお守りみたいな感じかな？

「お嬢様、妖怪達の準備が整いました。いつでも出発できます」

「分かった、じゃあ行こうか」

朝早く出たおかげで妖怪はまだ居なく、ロケットも発射していなかった。

私達側の妖怪は人間と警備に当たっている。警備の人に事情を説明したら承諾してくれた。

都市を守ってくれるなら大歓迎だそうだ。あの隊長さん、疑う事を知らないみたい。

「やっほー永琳」

「芽衣さん！どうしたんですか？」

「いや、別にただお別れを言いに来ただけだよ」

「……です……よね。考えは変わりませんよね」

「じゃあ、また会おうね」

「はい……さようなら」

別れの挨拶が済むと永琳はロケットに入っていった。

数時間後、警備の人達もロケットに乗り込んでいる。
私達の妖怪が守ってくれているので早く乗れた様だ。
そしてロケットが発射するまで見守っていると……
『ゴアアアアアアアアアアッッ!!!!』
そんな雄叫びが聞こえたと思ったら、妖怪が街の城壁を壊して二方向から侵入して来た様だ。
仲間の妖怪さんは……生きてるけど皆、動けないみたい。お疲れ様。
そして侵入して来た数は見た感じ数千程度、頑張れば行けると思う。
「キシ、向こう半分はお願いね。あんまり殺さないであげてね」
「……お任せ下さい」

〜人妖大戦開始〜

全く下級妖怪程度が……煩わしい。
「さて、時間が勿体無い。一人ずつは面倒だ。全員で掛かって来い」
そういうと、妖怪は一斉にキシに襲いかかってきた。
数は五百程度。はっきり言ってしまえば下級妖怪では相手にもならない。
キシは能力持ちなのだから。
「ひれ伏せろ」
キシが能力を使った瞬間に周りにいた妖怪は全員、何かに押さえ付けられたかのように地面に倒れる。
もちろん、最後まで抵抗していた妖怪も最後には体が地に着く。

「聞け、妖怪達。我が主は殺傷を好んでいない。故に選択させよう。今、この場で爆ぜるか。それとも此処で逃げ生き永らえるか。……どっちだ？」
キシは能力を解く。その瞬間、襲いかかろうとした妖怪が一人弾け散った。
その光景を見て妖怪達は互いに目配せをして一目散に散っていく。
「……死んだのは一匹か。……お嬢様なら一人も殺さずに逃がす事が出来るんだろうな」
キシは直ぐ様、芽衣の所へと向かう。

キシの能力、『圧を操る程度の能力』が在れば危険な目に会う事は多分、無いかな。
あの能力って使い方によれば色々な事が出来るよね。私が言えた事じゃないけど。
そんな事を考えていると妖怪達が芽衣の前にいた。
「あ、妖怪さん達。これ以上先に進まないでくれると嬉しいんだけど……駄目？」
「ソ、ソンなコト。シらン、オれタちは、にンげんが、タベたイだケだ。ダカら、シね」
……う～ん、全員を気絶させてから安全な所にでも移動させようかな。
「警告はしたよ、さて、私も能力を使おうかな～と考えたけどいいや、素手でやってあげる」
「ナメるな！にンげん！」
さて本気で動くとしようかな。
そして妖怪が一斉に飛びかかる、なので私は全力で動く。すると

……
「え？何これ？妖怪達がスローモーションに見えるんだけど」
芽衣はその速さを活かして自分が動ける限りのスピードで妖怪達を気絶させていく。
「……これで最後っと……ふぅ、終わった」
予想以上に早く動けて自分でもビックリしたよ。力も強いし。
後は……この妖怪達を避難させないとね此処、危ないし。此処から地球の裏側等辺でいいかな？
私はこの妖怪達の今居る場所を操り此処から反対の地球の裏側に送った。詳細はスキマ。
……さてと、以外に早く終わったな～。
さてと後はキシと合流して「お嬢様、ご無事で何よりです」……合流完了。
「じゃ、キシ。防衛を頑張ってくれた妖怪達を拾って帰ろうか」
「拾うんですか？」
「勿論、ちゃんと働いてくれた子にはご褒美がないとね！鰯でいいかな？」
「お嬢様も相変わらずのお人好しで、それと褒美は鰯で十分かと」
「いや、鰯は冗談だよ流石に…」
そうして私は都市を防衛してくれていた妖怪の場所を操り森に移動させた。
そうこうしている間にロケットから落ちてきた核が爆発して大変だった。
まぁ、私は核に当たっても普通に大丈夫だったんだけどキシが庇ってくれた。
お陰でキシが満身創痍の大打撃。勿論、一瞬で治したけどね。本当に無茶するよ。
森に移動させた妖怪達はキシと同じく年齢を上げて強化しました。
各自、それぞれ世界を旅するみたい。キシがそうさせたんだけど……情報を集める為だって。
まぁ、そんな事もあって無事？に家に帰宅。

「お嬢様、本当に怪我は無いですか？」
「大丈夫だって、私、不老不死だし。それよりもキシが無茶し過ぎ」
「私はいいのです。……それよりもお嬢様、時たまに不死を辞めてますよね？」
「……（目線を逸らす）」
「お嬢様に万が一の事が……」
「その時はキシが守ってくれるでしょ？」
「当然です」
　やっぱりキシは頼りになるなぁ～。凄く無茶するけど。
「それはそうとキシ。これから長い間さ多分暇だから、組手とかしようよ」
　人間が生まれるまで時間が掛かるのは仕方ないしね。
「私にお嬢様の相手は務まりませんよ」
「またまた～そんなに謙虚にならなくても」
「それはお嬢様の方です」
「ええ～？」
　まぁ、でも組手には付き合ってくれるらしい。

　あれからキシと過ごして数千年……まだ人間が生まれない。
　変わった事と言えばたまに旅をして来た妖怪（人型）達が帰ってきた。
　何でも此処から地球の反対で妖怪達が何故か怯えて暮らしていたので近々ここら辺に帰ってくるそうだ。多分だけど大体、キシの所為。

「あ～あ、人間はまだ生まれないな～。妖精はたまに見かけるんだけどな～。キシも食料を探しに行ったし。暇だな～」
久しぶりに能力の応用でも考えてみようかな？
でも、もう能力は完全に使いこなしたし霊力とか魔力とかそこら辺もやった。
応用って言っても私の能力ってその場その場で出来ちゃうから意味ないかな。

「ただいま、戻りました……って何をしておられるのですか？」
「ん？瞑想。何か思いつかないかな～って」
「そうですか、それよりお嬢様、帰る途中でこれを見つけたんですが」
そういうと、後ろに隠していた物が目に映る。
それは、小さく人間に近い形をした羽が付いた生き物だった。
「……妖精？」
「はい、そうです」
「……まさか……キシ……」
ゆ、誘拐なんて事は……
「お嬢様が思っている事は多分違います」
「そうだよね、でもなんでそんなに傷だらけなの？」
「私も分かりません。傷だらけで落ちてたのを拾っただけですから」
そんな野良犬とかじゃないんだから、落ちてたから拾ったって……。
まぁ、とりあえず傷を操って治したからすぐに目を覚ますでしょ。
「う～ん、此処は……何処？」
「こんにちは、此処は私の家だよ」
「え？貴方誰？」
「私は、星羅芽衣」

「私はキシだ」
「私はパウだよ。なんで私は此処にいるの？」

～少女説明中～

「あ～それはね、仲間に追い出されたの」
「仲間に？」
「うん、そう。私達は自然から生まれたのに、私以外の妖精たちはみんな自然に悪戯をするの、それを止めただけで、追い出されて今に至るの」
　妖精が自然を悪戯とか……何をどう悪戯するんだろう？
「それで、帰る所はあるの？」
「無いよ」
「じゃあ、私達と一緒に住む？」
「……え？いいの？」
「うん、別に一人二人増えても問題ないよ。ね、キシ？」
「まぁ、食料は調達できるので問題ないですね」
「という事で、よろしくパウ」
「うん、よろしくね、メイ、キシ！」
　家族にパウが加わって更ににぎやかになりました。
　パウは見た目、子供の様だが考たりしている事は人間の大人以上だ。
　見た目以上に生きているのだろう。きっと。例に挙げるなら私とキシ。

～ある日食料調達している風景～
「あはは～、待て待て～」

「おい、パウ遊んでないで、食料を探すのを手伝え」
「え～、これで十分じゃんよ～」
「お・ま・え・が・一番、食べるから足りないんだよ！」
キシがキャラ崩壊してる…。
「でもパウって本当によく食べるよね～育ち盛りかな？」
「全くです。どれだけ私が毎週、何回食料を取ってくると思うのやら……」
そう、パウは私達の二倍三倍ご飯を食べる。
それとは別に食料が時々無くなっている事があるけど犯人は一人しか居ない。
「私は何も知らない～！」
「あっ！こらっ！逃げるな!!」
「楽しそうだな～（棒）」
「お嬢様もパウを捕まえるの手伝って下さいよ……」
「それよりも食料を集めないといけないでしょ」
「くっ……そうですね」
相変わらず賑やかで楽しい毎日で私は満足。

食料探し完了
「そうだ、パウって能力あるの？」
「能力？」
「そう、自分で思い浮かべてごらん」
「能力……能力……『化ける程度の能力』？」
「『化ける程度の能力』ね～。何ができるの？」
「分かんない」
「化けるだから……こんなの？」
グニャア
芽衣は自分の顔を操りキシそっくりの顔になる。
「す、凄い……というかそれって化けると言うより……」
「うん、本人と同じ顔を再現したからね。声もキシに似せたし化ける

というよりその人その者に変わっているからね」
「芽衣って凄いな～」
「パウも能力を使えば出来るんじゃない？」
「……むむむ、出来ない」
「まぁ、時間はいっぱいあるし、ゆっくり頑張れば良いよ」
その後、パウは能力の練習をした所、芽衣程ではないが本人と成り代わりが出来るぐらいに成長した。

土着神，諏訪子

こんにちは、芽衣です。
あれから数千年待ちましたよ。うん、本当に。
まぁ、そのおかげで色々な技を試せたんだけどね。
そういえば、パウは妖精たちを説得してくると言って旅に出て行った。
パウは初めて会った頃は子供の姿だったけど今では大人の女性ぐらいな風貌になった。
妖精でも長く生きるとちゃんと大人になるんだなって分かった。
また何処かで会えると良いな。
処で私の家は現在大きな高台に建っており、見た目は神社で一応私が神様という事になっている。
家は私がそのまま森から移動させて改築しました。
それも有ってか、この私が住んでいる家も建ててから数千年。随分長く頑張ってくれている。
何故、私がいきなり神様（一応）になったかというと大体、キシの所為。
私を神格化して私の存在を知らしめるという壮大な計画らしい。無理があると思うんだけど……。
この神社で参拝するのは精々近くの妖怪や妖精だしね。
まぁ、はっきり言うとなんで信仰されてるのか分かんないけど……。
やっている事と言えばたまに外でヴァイオリンに似せた楽器等で音楽を弾いてるからかな？
この時代だと珍しい物かどうかは分からないけど多分、これが原因（信仰）。
それに歌も歌った。人前……いや、妖怪前？で歌うのは恥ずかしいね。
そのせいで何故か新しい能力増えたけどね。

私がこれまでの事を軽く振り返っていると、台所の方から歩いて来る足音が聞こえてきた。
「お嬢様、同業者の情報が入りましたよ」
「同業者？同業者って……もしかして神様の事？」
「はい、此処から数千キロ離れた所に人間が暮らし始め其処に祟り神と呼ばれる神が居るそうです」
「それって、キシが世界各地に旅をさせてる。キシのお気に入りの妖怪達からの情報？」
「……ええ、まぁ、そうです。その中の一人が先程、帰って来ました。ですがこれは大分、昔の情報の様で今はどうなっているか分からない様です」
私の執事のキシは現在では数万という数の妖怪を従えている。
世界全ての妖怪のまとめ役と言っても過言では無い。
キシもあれから能力が一つ増えたみたいだけど中々教えてくれない。まぁ、言いたくないなら別にいいんだけど……キシが言いたくない程の事は少し気になる……でも我慢。
そしてキシはその妖怪達に世界を旅をさせ知識を付けさせながら情報を得ているのだ。
これが……情報社会。
「じゃあ、ちょっと数年ぐらい出かけてくるね、留守番お願い」
「了解しました。お気をつけて」
さてと新しい能力でも使って行くかな。
新しい能力は……まぁ、言わずとも私が曲を弾いたり歌ったりして信仰される。そう能力は……
『音を司る程度の能力』
本当に私の能力は少し一歩抜けて強い物ばかりなんだろ。
まぁ、この能力を使って行こう。私を音速の速さにすれば直ぐに着くでしょ。
え？その速さに耐えられるのかって？勿論、余裕ですよ余裕。そして数分後。
「到着！」

やっぱり音速は速いね。数千キロがすぐだよ。
適当な神社に来てみたけど……此処に諏訪子がいるのかな？
祟り神って事は多分、諏訪子だと思うけど……。
神社にいるかな？一応、私からは神力出してるけど。
と私が神社の主を探そうとすると……
「貴様！此処が誰の土地か分かって入っているのか？」
声のする方を見ると小さくて可愛い子供……いや諏訪子が居た。
「貴様！今、小さいとか思っただろ」
「いや、小さくて可愛い神様だな～って」
「貴様……覚悟は出来ているのか？貴様程度の神が私を愚弄する事は許さない！何処の神かは知らないが……この私の国に無断で入り私を愚弄したからにはただでは帰さん！」
「えーと……神様の見た目は意味を成さないって言うし、それに愚弄した訳じゃ……」
「問答無用！」
何でこうなるの～？いや、まぁ、許可無しで勝手に入って来た事は謝るけど……
「洩矢を舐めるなよっ！」
諏訪子がそういうと目前から巨大な鉄の輪が向かってくる。
この感じだと……
「おおっと！下からは危ないねぇ」
私は下から出てきた鉄の輪を紙一重で避け前から来ていた巨大な鉄の輪も紙一重で避ける。
「……ふむ、少しは出来る様だな。だが残念ながら此処は私の信仰領域内だ」
すると、諏訪子は先程まで出していた神力とは比べ物にならない程の神力を出した。
そして諏訪子が何かを呟いた瞬間に無数の巨大な蛇が地中から姿を現した。
どれくらい大きいかと言うと……まさかの１００ｍ以上はある。
それも数百匹以上。

諏訪子が凄い強い。遊んでると本気で死ぬかも知れない。
「祟を纏った蛇だ。貴様程度の神なぞ当たれば終わりだ。もう二度と洩矢を愚弄するとは思うなよ？行け」
その命令と共に全ての巨大な蛇は私に向けて突撃して来る。
「この大きさでこの数だと音速でも避けられるかどうか。仕方ないけど……」
私は神力を全力で開放する。
私は信仰されてまだ時が経っていない。それもたった数百年程度だ。
私の神力なんて諏訪子の全力の二割も満たないだろう。
「全力で行く」
「……ほう？」
だが、この程度の神力でも諏訪子の祟り蛇を全て受け止められるとは思わない。
なのでその力を逆に利用する。
手に全ての神力を集中させて最初に真正面から来た蛇を受け止め、
「受け止めると言うのか？だが後ろや上からも来ているぞ？」
分かっている。だからこの受け止めた祟り蛇を出来るだけそのままで受け流す。
「！」
すると後ろから来ていた祟り蛇と正面衝突して両方消える。
同じ力が同じ方向でぶつかったんだ。当然、こうなる。
そして、そのまま上から来た蛇を一度躱すがそのまま地中を潜り下から私を飲み込もうと来る。
勿論、私はそれを利用してまた同じ様に受け流し少し方向を変え他の祟り蛇にぶつける。
それを幾度とも繰り返し。そして、
「これでっ！……終わり」
そして最後の祟り蛇二匹を衝突させて全滅させる。
これが偶数では無くて奇数だったら最後の一匹は私がそのまま全ての神力を出して潰していた。

そして何故かその現状を見ているだけで何も邪魔をして来ない諏訪子に疑問を感じた。
「あっはっはっは！面白い面白い！まさかそれだけの神力で私のミシャクジを全て消滅させるなんて！気に入ったよ！名前は？」
「星羅芽衣。一応、神様だよ。それとさっきみたく威厳が在った感じじゃなくて気の抜けた調子になってるけどそれが素？」
「まあね、名も知らない神や人間の前ではあんな風だけど普通はこれが素だね。それにしても芽衣は何の神なの？それだけ強いなら神の間でも噂になると思うけど、まさか生まれたばかりとか言わないよね？」
「う～ん、噂と言えば……妖怪に信仰されてる神って聞いた事ある？」
「あるよ？……えっ？まさか芽衣が？」
「うん、それ私だよ」
「へぇ～、妖怪に信仰されてる神って普通にちゃんとした神なんだね」
……てことは噂では普通じゃなくちゃんとしていない神だって思われてたんだ。
キシが知ったら神狩り始めそうだから言わないで置こう。
「そうだ、暫く此処に止めて貰えない？」
「良いよ！神様の一人や二人、どうって事無いよ！それに芽衣みたいな面白い神が居てくれるなんて願ったり叶ったりだしね！あ、まだ私の名前言ってなかったね。知ってると思うけど洩矢諏訪子。自分でも土着神の頂点だと思うよ」
「あはは、それ自分で言うの？これから宜しく諏訪子」
「うん、これから宜しく芽衣」
私は諏訪子と仲直り？して諏訪子の所に泊めて貰う事になった。
それにしても……
「この惨状、どうするの？」
「あ」
私と諏訪子が戦った事により周りの木等は倒れ土は盛り返して大変な事になっている。

「……う～ん、これぐらいなら何とかなるかな。はっ！」
諏訪子が地面に手を付き神力を放出させる。すると盛り返していた土等は元に戻り木は急激に成長し最初に来た時と同じ状態に戻った。
「おお、凄いね」
「でしょ？私の『坤を創造する程度の能力』芽衣は能力とか持ってるの？」
「私は……『音を司る程度の能力』を持ってるね」
「え？でもさっきそんな能力使ってなかったよね？」
「最初から戦う気じゃ無かったんだよ」
「あー……ごめんね」
「いや、気にしなくて良いよ。済んだ事だし、それより……あそこに居る巫女さんは？」
「はうっ！」
私が目を向けた方向には白装束を来た巫女さんが居る。まぁ、隠れちゃったけど。
「おーい！愛華！ちゃんと挨拶しなきゃ駄目でしょ？」
「は、はい……」
諏訪子が呼ぶと恥ずかしい……というか恐れられてる？みたいな感じで物陰から愛華と呼ばれる巫女さんが出てきた。
「ほら、自己紹介」
「わ、私は洩矢愛華です。宜しくお願いします……」
「私は星羅芽衣。宜しくね愛華ちゃん」
私は握手しようと手を差し出すが、
「「え？」」
「あ」
私の手は先程、無理な神力の集中やミシャクジの所為も会ってボロボロになり皮も剥がれ血も出ている。はっきり言って見ているだけでも痛い。いや、実際に痛いんだけどね。
まぁ、直ぐに治すけど。こんな手だと握手も出来ないからね。
すると私の手が白く光を放ち光が止まるといつもの綺麗な手が見

える。
「わぁ……凄い……」
「芽衣って普通に凄い神様なんじゃ……」
「さて、改めてこれから宜しくね、愛華ちゃん」
「は、はい！」
そうして私と愛華ちゃんは握手を交わす。
「（あったかい……）」
「？」
さっきみたく恐れられてる様な感じじゃなくなったし良かった。
「さて、今日は芽衣の歓迎会だね！」
「はい、そうですね！」
「え？別に其処まで」
「いいからいいから、今日はいっぱい飲むぞー！」
「おー！」
「お、おー？」
そうして朝までお酒を飲んで愛華ちゃんと諏訪子は酔い潰れた。
私はお酒を飲んでもあんまり酔わないから二人が酔いつぶれた後は歓迎会の後片付けを始めた……。
二人共、布団に勝手に寝かせて置いたけど良いよね？あのままだと風邪でも引きそうだったし。
そんなこんなで私は諏訪子の神社に暖かく迎え入れられた。

～ある朝～
私が諏訪子の神社で居候してから約数十年。

諏訪子は私の分社の様な物を立ててくれた。
他の神社に他の神様の分社を立てる事は良くあるらしい。仲が良い神限定で。
私は最初、人が住んでいる村に降りた所、普通に恐れられた。ですよねー。
まぁ、此処数十年で誤解を解いて私は普通の神様だって事を解って貰えた。凄い苦労したけどね。
そして朝……
「諏訪子～。起～き～て～よ～」
「あと五年……」
「じゃあ朝ご飯は無しね」
「ごめんなさい！すぐ起きます！」
諏訪子は朝だといつもこんな調子だ。
「朝ごはん作ったから早く来てよ～」
「は～い……」
私の日課は朝、神社の掃除をしたり夜に演奏会を開いたりしている。これが日課となっている。
え？愛華ちゃん？勿論、一緒に掃除したりしているよ。
本当は諏訪子や愛花ちゃんにやらなくても大丈夫と言われてるけど居候だし多少は、ね？
諏訪子は私に修業を付けてくれるらしいけど基本的な体術や運動神経なら普通に私の方が上だ。
なのでどちらかと言うと私が諏訪子の修行に付き合っている様な感じになっている。
というか、演奏会で意外に人間と妖怪が一緒に聴きに来るんだよね。
村の人が何故一緒に妖怪と一緒に来ているのか聞いた所、何故か途中で会ったとか。
酒を飲んで一緒に意気投合したとか。人と妖怪の関係が凄い事になっている。
まぁ、その妖怪、殆どが昔からのお得意様の妖怪が多数、何処から

噂を聞きつけたのか普通に私の演奏を聴きに来ている。多分だけどキシだよね教えたの。
……本当に平和な日々だった。これが本当の人間と妖怪の姿なんじゃないかって思えてきたしね。
……だが、ある日。
「大変だよ～芽衣～！」
「どうしたの？そんなに慌てて」
「芽衣は大和の方で神が勢力を伸ばしている神達って聞いた事ある？まぁ、厳密に言うと侵略戦争だけど」
「ん、まぁ知ってる」
「其処から、協定を結びたいって手紙が来たんだよ」
あ～、ついに来ちゃったか～、諏訪大戦。
「どうしよう？私は此処を離れる訳にはいかないし……」
「……私が行こうか？」
「本当に？ありがとう！じゃあ、私の鉄の輪を持ってって。これが私からの使者だって証明してくれると思うから」
「分かった。じゃ、行って来る」
「え？今から」
「そう、今から」
「うわっ！……あれ？芽衣？」
私は音速で大和の多く神力が集まっている場所へと向かった。

「へ～此処が大和か～」
見る限り大きい神社って感じだね。諏訪子の3～4倍ぐらい。
私の所より小さいけど……。いや、あれは大き過ぎるんだよね。
「其処のお前！何しに来た！」
「えーと、これの話に来ました」
と言い、私は諏訪子の鉄の輪と手紙を出す。

「……鉄の輪に協定の手紙か。ふんっ、なら通れ」
「はいはい、通りますよ～」
中に入ると待っていたかの様に巫女がその神たちの所に通してくれた。
そこには、八坂神奈子とその他数名の神が座っていた。
「貴様が土着神か？」
「いえ、代理ですよ」
と私が言うと周りから蔑む様な見下す様な声が聞こえて来る。
『洩矢は人手不足か……』
『こんな、弱そうな神を寄越すなんてな……』
『所詮、雑魚は雑魚なのだ……』
と其処で一人の神が咳払いをして黙らせる。
当然、その人物は……
「私は軍神，八坂神奈子だ。早速、協定に移ろうか。それに目を通せ。中々そちらに有利な条件だぞ？」
とドヤ顔で言い、近くの神が協定書を渡して来る。
嫌な予感しかしないけど……
えーと、何々……

【第一　諏訪は抵抗なく軍に下ること
第二　諏訪の信仰はこちらに寄越すこと
第三　諏訪の領土をこちらに寄越すことｅｔｃ……】

……こ、これはひどい。
いや、本当にひどい。完全に戦争する気が満々じゃないですかーやだー。
何これ？これで有利とかどういうことなの？
有利って言葉の法則が乱れる……。
「こんな条件、呑めるわけないですよ。ふざけてるんですか？協定は破棄させていただきます」
そういい、私は協定が書かれた紙を神奈子に返した。

「む？こ、これは……」
　え？何？どういう事？こんなの自分は知りませんでしたーってことなの？軍神さん。
「ちょ、ちょっと待て。もう一度」
「駄目です。自分の従えている者達の事も分からない人とは取引に応じません」
「……いいのか？戦争だぞ？」
「ええ、覚悟の上です。それでは……」
　私が帰ろうとすると数人の神が私に近づいてきた。
「へっ、このまま帰らせると思うのか？」
「そっちが宣戦布告して来たんだ。此処でやられても文句は無いだろう？」
「見せしめとして皮を剥いで洩矢に送り付けてやろうぜ」
　と何とも程度の低い言葉で私に喧嘩？を売ってくる。
　まぁ、この程度で怒る様な私じゃないから、気にしな「洩矢って奴は相当の馬鹿なんだろうな！」
「今、何て言った？」
「聞こえなかったのか？ならもう一回言ってやるよ！」
「おい、やめろ！」
「洩矢は相当の馬鹿なんだろうなってよ！」
『ギャハハハハハハ!!』
　その発言に対して大声で笑う神が5人、その他の神は下を向いていたり顔を背けていたりする。
　神奈子はそれをやめさせようと声を出しているが届いていない。
「すまない、洩矢の使い」
　そう言って頭を伏せる神奈子。……危ない、もう少しでキレて霊力他すべてを解放する所だった。
　神奈子が謝る事じゃないのに……。
「大丈夫です。私は何と言われても大丈夫ですから」
「そうか……」
「ですが……」

「？」
「諏訪子の事を馬鹿にしたのは許しません」
瞬間、芽衣が発言した瞬間に笑っていた神は全て壁に埋まった。
これが本当の　壁　の　中　に　い　る　！
「え？」
「神様は信仰があれば、何度でも復活出来ますよね。まぁ、本当に信仰されているのか怪しい神でしたがね。それでは、戦場で」
私はそのままその場は後にした。
さて、戦争になるけど諏訪子はどんな反応するかな。

「……うん、分かってた」
「あれ？此処は慌てふためく所じゃないの？ムニムニするよ？」
「ちょ、やめてって……」
私は諏訪子のホッペを触ってムニムニする。
まぁ、直ぐやめるけど。
「それで諏訪子は慌てないの？」
「そんな事しないよ……侵略戦争なのに協定を結ぶなんて何か怪しいと思ってたし」
「ちゃんと考えてるんだね……そうだ、戦争の時は力を貸してあげるよ」
「どうして？芽衣は関わらなくても良いのに……」
「良いって、この状況を作った私が悪いしね。その代わりと言っちゃ何だけど諏訪子はあっちのボスと一騎打ちでいいかな？私は他の神を抑えててあげるから」

「え？いくら芽衣でも、無茶じゃ……」
「大丈夫大丈夫。諏訪子は自分の心配をしてれば良いって」
「そうだね、芽衣が普通の神なんかに負ける筈ないもんね」
「あはは、信頼されてるな～」
「当然だよ」
諏訪大戦まで残り一ヶ月。
諏訪子はより一層、修行に励み成長していった。

諏訪大戦

私が協定を破棄して一ヶ月後。
私との修行を味わって来た諏訪子は確実に強くなっただろう。多分。
しかし……
「遂に戦争……」
「どうしたの？怖いの？」
「怖い訳じゃないよ……けど……」
「そんな深く考え込まないで諏訪子は大将とだけ戦って勝てばいいんだから私と初めて会った時みたいにやれば良いんだって」
「あ～う～だからあの時は……芽衣こそ無茶しないでよ？」
「はいはい、分かったよ」
相手には神奈子より強い神様が混ざっていると思うんだよね。
何かそんな気配が感じられるし。会った事は無いけど絶対に強いよね。
まぁ、神様は信仰が有れば死なないって言うし本気出しても大丈夫でしょ。
あんまり、殺すっていう行為はしたくないんだけどね。例外はあるけど。
でも神様相手に手を抜いたら逆にやられちゃうかもしれないからね。
だったら敬意も合わせて本気で行った方が良いよね。
……そろそろ行こうかな。

「こんにちは、数日ぶりかな？」
「そうだな、小さき神よ。私の神力を受けて平然と受けてられるのは敬意に評すぞ」
「洩矢様に散々浴びせられましたから。それと洩矢様は貴方と一対一の勝負を望んでおります。他の神の方は私が相手します、どうでしょうか？」
「くくくっ、面白い奴だな。いいだろう、その提案を受けよう。……また会えるのを楽しみにしてるぞ」
本当は私が諏訪子をしごいていたんだけどね。
後、神奈子が最後に何か言った様な気がするけどまぁいいや。
「それよりも……」
『なんだ？お前？もしかしてこの相手を前にして勝負になると思ってんのか？』
『わはははは、無理無理お前みたいな弱い神が勝負になんねぇよ』
「「「ぎゃはははは」」」
神様って色んなのがいるんだなー（棒）前にもこんな神様（笑）を相手にした様な気がする。
こんな神様は絶対に信仰したくないね。
神奈子の侵略に便乗しただけの神様かな？ハイエナの類かな？
まぁ、それより……
「いいから、まとめてかかって来て下さいよ。時間の無駄です」
私は極めて笑顔で言葉を放つ。諏訪子と神奈子の戦いを見たいしね。
「ああ、そうだな。じゃあ、さっさとくたばｒ……がっ!?」
「「!?」」
一人突っ込んで来た神は見えない衝撃破で吹っ飛んだ。うん、数百メートルは飛んだかな。ただ単に物体に影響が出るほど音を圧縮して放っただけだけどね。
これで一名リタイヤ。

「私は言ったよ？まとめてかかって来てと……じゃないと……
お話になりませんよ？」
そう言う私の渾身のキメ顔。ちょっと恥ずかしい。
『くそっ！お前らぁ！いくぞぉおお』
「「「「「おおおおおおおおおおっ!!!!」」」」」
……計画通り。……今、私絶対に悪い顔してる。
まぁ、簡単にかかってくれた神様に感謝感謝。
『ぎゃあああ』
『お前!?何をしている!?』
『なっ……違っ……身体が……勝手に……』
『ぎぁやあああ』
『な、何がどうなっ……ぐはっ！』
私に襲いかかって来た神様は何者かに操られたかのように仲間割れを起こし始めた。
近くいた仲間を殴ったり蹴ったり、はたまた持っていた武器で攻撃したりと多くの神は仲間を仲間と思わない殺し合いの仲間割れを始めた。
そして一人対多数な筈なのに其処は戦場に変わった。
だが唯一の救いは神は仮に死んだとしても信仰があれば復活すること。
一応、死なない様にはしているけどね。
勿論その操った何者かは、言うまでもなく私である。
そんな状況下で私の事を気にかける物など居らず……
「どうしたんですか～。仲間割れはいけませんね～？」
「しまっ……」
ドゴぉ！
容赦の無い拳。
今度は敵のど真ん中で吹っ飛ばしたせいか周りを巻き込んで吹っ飛んで行く。
私も追撃をやめない。最初にちゃんと戦うと決めたから。
本当にちゃんと戦っているのかは不明。だって全部倒すのに時間

かかると思うし。
私が自分の手で倒した相手は三分の一もいないんじゃないかな。
そして、私が無双している最中、膨大な神力が発せられそこから操られない神が三人……
「よくもやってくれたのう」
「本当、私たち以外皆操られてる」
「それもすぐ解けます。あの神を倒せば」
「貴方達は……月夜見（ツクヨミ）、天照（アマテラス）、須佐之男（スサノオ）さん達ですか？どうも初めまして。新米神様、芽衣と申します。どうぞ宜しくお願いします」
ラスボスの様な何かが来ちゃったよ……。強いぞーオーラがビンビン出てるね。
というか、天照さんと須佐之男さんが居るのは別におかしいとは思わないけど……月夜見さんって月に移住したんじゃなかったっけ？なんで居るの？
「ふん、下らん雑談なんかするつもりはない」
「さっさとこの術を解いてくれないかしら？私達一人一人は神奈子より相当強いわよ？それでも戦うと言うの？」
「ええ、是非。本気で一度は戦ってみたいですからね。手加減無しで」
「あら、残念。そんな事したら貴方は反応出来ずに終わってしまいますわ」
「本人が手加減無用と言ってるんだ要らないだろう」
「……そうですね。せめて痛みを感じさせずに殺りますか」
そう呟くと同時に月夜見は極太のレーザーを撃ってきた。
それに続き、天照は太陽と自分を重ねる様にして其処から火炎の様な物を放ってきた。
そして、須佐之男はそのレーザー等を掻い潜り私に近づき接近攻撃をしてきた。
須佐之男の近接攻撃を受けた私は後方に転がり追撃と言わんばかりに私の体にレーザー等が当たる。
反応する時間等は無かったと言っても言いぐらい。それはたったの一秒弱ので出来事。

その全ての攻撃を受けて私は立っていた場所から数十メートル程後ろに吹っ飛ぶ。
ずどおおおおん!!
周りに凄まじい音が響く。
私は砂塵にうもれて周りが良く見えない。
「……呆気無かったな」
「能力に頼り過ぎね。身体がまるで子供ね」
「こんな神に手こずらされたのね、私達の軍は」
三人が警戒を解いた、その時……
「ん？なんだ。この頭に響く音は……」
「須佐之男！……っ！……私にも……何か……頭に……」
「須佐之男！天照！な、何が」
須佐之男と天照は地面に倒れ伏せる。
当然、そんな事を出来る人物はこの場で一人しか居ない。
「そうです。私です」
爆発した所から無傷の私が登場。
あの攻撃はとっても痛かったからね！今更になって避ければ良かったと思うよ！
霊力を限界まで薄めて高めた障壁を体に貼ってたけど衝撃は来るからね！
「あ、貴方、生きていたのですか？それに、いつそんな仕掛けをしたのですか？全く身に覚えがありませんが……？それに加え私達は貴方の能力に細心の警戒を張っていた……」
「ふふ、私が攻撃を受けた直後にですね、音を飛ばしただけですよ。大丈夫です、脳に音を飛ばして機関を麻痺させただけですから。あ、後遺症とか残らないでご安心を。……月夜見さんもそろそろ限界じゃないですか？」
「くっ……」
限界が来たのか月夜見も地面に倒れる。
そして歴史在る神達は一人の神に倒された。
私は周りを見渡す。既に操られていた神や仲違いしていた神は全

て倒れていた。
これで終わりかな。予想以上に簡単だったね。
まともにあの三人とその他大勢を相手にしたら絶対に無事じゃ済まないと思うからね！
あれぐらいはしないと時間もかかるしね！仕方ないよね！
それに強者の一番の弱点はやっぱり慢心と油断だね。
私はそうならない様に気を付けようっと。
……さてと、結構早く終わらせたつもりだけど向こうも終わっちゃったみたいだね。
残念ながら二人の戦いは見れなかったけどさてはて諏訪子は勝てたのか負けたのか、どっちだろ？

「……降参」
「ふっ、中々強かったぞ洩矢の神よ」
あ、諏訪子が負けちゃったのか～。
見る限り善戦はしたみたいだけど駄目だったみたいだね
「やぁ二人共。殴り合って友情を深めた様な目をしちゃって、青春だね～」
「め、芽衣!?」
「ん？何故お前が此処にいるのだ？我が軍はどうした？」
「ちゃんと全員倒して来たけど？」
「「……え？」」
あれ？聞こえなかったのかな？
「全滅したよ？」

「なっ……！月夜見とか須佐之男はどうしたっ！」
「倒したよ？」
「「」」
何故か神奈子と諏訪子は絶句している。
何でだろう？そこまで凄い事なのかな……。まぁ、新米神様だしね！私！
「あ、そうだ。私から神奈子に提案があるんだけど」
「て、提案？」
「八坂は洩矢に勝った。だけど信仰を奪うのは非常に難しいよ？」
「ど、どうしてだ？」
「それは、諏訪子が祟り神だからだよ。村人達は復讐で祟られるのを恐れて信仰は変えられない」
「じゃあ、どうしろと……」
「八坂と洩矢を合わせた新しい神様を信仰させれば良いんじゃないかな？そうすれば信仰を得られるでしょ？勿論、諏訪子もだけど」
「……なるほど、それなら私も信仰を洩矢も信仰を……か」
まぁ、決めるのは勝者の神奈子だしこれ以上は口出ししないかな。
「……良し、その提案は賛成だ。文句は無いな諏訪子」
「文句は無いけどなんで名前で呼んだの？」
「これから、一緒に住むんだし気楽に行こうかなと」
「……じゃあ、神社の新しい名前は守矢でいいかな？」
「ああ、良いと思うぞ」
「決まり～」
諏訪大戦終了。
いや～めでたしめでたしかな？
あれ？そう言えば何か忘れてるような……。

神社の巫女，八雲の幻想

「もう行くのかい？」
「そうだよ～もう少しゆっくりしていっても……」
「駄～目、前から決めてた事なの。少しは自分の神社に帰らないと心配だからね」
　諏訪大戦が終わってから数週間、あれから信仰の事は問題にならず大丈夫のようだ。
　問題が有ったとすれば私が夜に人や妖怪を集めて演奏会を開いていた事。
　諏訪子は慣れてるとして神奈子は妖怪に慣れている筈も無く最初は大変だった。
　そして私にも問題がある。神様が自分の神社に数百年帰らないのは流石に不味いと思う。
　なので一度、家に帰る事にした。
「まぁ、気が向いたら神社に寄るよ」
「うん、絶対だよ！」
「ふふふ、待っているぞ」
「じゃ、またいつか」
「ばいば～い」
「じゃあな」
　諏訪子と神奈子に見送られながら私は自分の神社に帰る。
　……一瞬、自分の神社の場所を忘れてしまったと思って焦った。
　覚えるのは得意だけど……数百年も経った景色とは確実に変わってしまう。
　そんな情景を見ながら悲しい顔を浮かべる自分に私は気づかなかっただろう。

なんやかんやあって無事に自分の神社周辺まで戻ってこれた私。
「さ～て、自分の神社に到着……あれ？」
帰るなり早々奇妙な事があった。
自分の神社に巫女？さんがいるのだ。
私の神社に巫女は居ない筈だ。……少なくとも数百年前までは。
一応、神力は隠して霊力だけ出して階段から上がろう。
諏訪子の所に居た所為で日常的に神力を出していたからね、今後は注意しよう。神だけど。
（……それにしてもあの子、誰なんだろう？見た事も無かった顔だし……まぁ、話しかけてみれば分かるよね）
私が階段を上り終えて例の巫女？さんに近づく、
「あの～」
「あ！参拝客ですか？どうも、此処の神社の巫女です」
「いや、参拝じゃないんだけど、キシいる？」
「え？キシさんですか？……居ますけど貴方は誰ですか？」
「私？私は――――――」
丁度、その時。神社の中から見覚えのある人影が見えた。
「お嬢様、お帰りなさいませ」
「え？お嬢様？て事は……えええーーー!?」
「え？何？どういうこと？」

～～～青年？説明中～～～

「なるほどね、そういう事だったんだ」
「はい、勝手ながら申し訳ありません」
「いや、別にいいよ。巫女が居ない神社ってのも寂しいからね」
「ほえ～」
説明の内容はキシが神社には巫女が必要だと感じて毎回此処に参拝に来る妖怪に力を与えて此処の巫女にさせたらしい。本人も嫌じゃないらしい。（実は半妖だったらしいが）
名前は星羅詩音（せいらしおん）年齢は見た目２０歳ぐらいだそうだ。
実年齢は以外にいっているらしい。
基本的に霊力で戦うが危なくなったら、妖力，神力を使うらしい。
（神力は私の力を少し借りれるらからだとか）
攻撃をする時は殆どが口寄せ……というか召喚らしい。
能力は『口寄せを操る程度の能力』らしい。
「じゃあ、これからもよろしくね、詩音？」
「は、はいっ！よ、よろしくお願いします!!」
「そんな緊張しなくてもいいのに～」
「で、でも……」
（か、可愛い～）
そんな事をしていると、
「キシ～お腹空いた～」
と神社の中から聞こえて来た声は私は聞き覚えのある懐かしい声だったのですぐに分かった。
「キシ。もしかしてパウが来てるの？」
「……はい、昨年ぐらいに帰って来ました」
すると、待ちきれなかったのかパウが境内に出てきた。
「あれ？芽衣じゃん。久しぶり！」
「うん、久しぶり。元気だった？」
「勿論、毎日元気だよ！それでさ、あれから皆の所に帰ってね色々頑張ったりしたの。そしたら妖精のリーダーにされちゃった」

「良かったじゃん。それだけ皆に認められたってことで」
「良くないよ～だって、数十万もの妖精のリーダーだよ？疲れるったらもう（ぐちぐち）」
「あはは……」
自分の神社はいつまで経っても楽しいなと思う芽衣だった。

芽衣は今日の夜に自分で楽器を演奏しながら歌っていた。
久しぶりに自分の神社でやる演奏だったので人や妖怪が居るかなと思ったけれど諏訪子の所でやった演奏会に出ていた妖怪，それと人も居たので私が此処に帰って来たという情報でも回ったのだろう。
そして演奏が終わり……
「……今日も皆ありがとね～」
『今日も最高でしたー』
『惚れ惚れするっす！』
『また今度も来ます！』
今日もいつも通り演奏会は大成功だった。
それとなく観客を見渡してみると気になる人物が一人いた。
姿は人間の少女と特に変わりはない。
けれど髪は金髪ロング。毛先をいくつか束にしてリボンで結んでいる。
瞳の色はによって金色にの様だ。
そう、私の知っている知識の中に一人該当する人物がいる。
八雲紫（やくもゆかり）
「あの……ちょっとよろしいですか？」
私がこっちから声をかけようかなと思っていると向こうから声を

かけてきた。
「はい、なんでしょうか？」
「さっきの演奏とても良かったです、聴いてて心に響いた感じがしました」
「それはそれは、ありがとうございます」
「私の名前は八雲紫、たった一人の隙間妖怪です」
「私は芽衣。普通の人間だよ」
　やっぱり紫だった。まだ幼い感じがある、という事は最近生まれたばかりなのかも知れない。
「……少し……私の話を聞いてくれますか？」
「良いよ、聞かせて」
「私は生まれてから間もない妖怪です。最初にこの世界に生を受けた時、私は一人でした。人間には『妖怪は悪』と言われ妖怪にも相手にされず誰に頼れる事も無く一日一日を生きるのに必死でした」
　と事は紫は生まれてまだ何も分からない時から一人だったんだ……。
「それは……また酷いね」
「はい……その繰り返しの時に誤って強い妖怪の食料を盗んでしまったのです。私は必死に逃げました。無事に逃げ切れたとしてもまだあの妖怪が追って来るようで怖くて仕方が無かったとき、通りかかった二人が声をかけてくれました」
「その二人って？」
「その二人は人間と妖怪でした。その二人は、私の事を気遣ってくれてとても不思議な気持ちでした。人間と妖怪が一緒に暮らせれば凄く平和になるなと思いました。私は何故二人にそんなに仲が良いのかと尋ねました。そしたら『ある人の演奏を一緒に聴いて気が合ったから』と答えました。『種族なんて関係無い』とも言ってました。私は決意しました。人間と妖怪が一緒に暮らせる場所を作ろうと、そして今日、その二人に勧められて此処に来ました。」
　イイハナシダナー……種族なんて関係無い……とても良い響きだね。

私の歌で仲が良くなるのなら私は声が枯れるまで歌おうとも思えちゃうね。
「……それで、そのある人が私だったと」
「はい、そうです。長い話をしてしまい申し訳ありません。それで貴方の意見を聞きたくて此処に来ました」
「何の意見を？」
「……人間と妖怪が一緒に暮らせるかどうかです」
……難しい話だな～人は妖怪を恐れる。その力の違いの所為でね。妖怪も人を襲う。
まぁ、キシと暮らしている私が言える事じゃないんだけどね。
でも、どっちかって言うと……
「普通に出来るんじゃない？」
「ほ、本当ですかっ!?」
「本当、本当。さっき紫が話してくれた話とかこの演奏会とか見ればきっかけが在れば誰だって仲良く出来るよ。例に挙げるなら酒好きで宴と喧嘩が大好きな人間、鬼と気が合うでしょ？」
「……は、はい」
紫は何となく分かったのか頷く。
「妖怪には人間を食べ物としか見ない輩もいる。人間にも妖怪を恐怖でしか無いと見ている者もいる。だけどその逆もいる。だから私は紫の夢を無理だと言わないし笑わない、紫が諦めなければきっとその夢は叶うと思うよ」
「……ありがとう！芽衣さん！」
「どういたしまして」
「じゃ、暇な時はまた演奏を聴きに来てね？」
「はい！ありがとうございました！」
「じゃあね～」
そう言って紫は先程、話に出していたと思う人と妖怪の組と一緒に帰って行った。
それにしても、紫……凄い幼かったね。普通に別人かと思ったよ。

……でもあんなに堂々と宣言しちゃったけど大丈夫かな？

まぁ、大丈夫だよね。さてと家に帰って寝ようっと。明日も良い一日になります様に。

神無月，稗田家

～9月終わり～

「母上～何か使い魔みたいなのが来てますよ～潰しますか？」

「使い魔？今、行くよ。潰さないでね」

母上と呼ぶこの人物は巫女の詩音である。

理由は「名字が同じなので母上です！」という事らしい。

まぁ、「星羅様」とか「芽衣様」よりは幾分マシである。

そもそも私が畏まらなくてもいいって言ったし問題ない。

キシは……もう癖だって言ってた。前世は執事でもやってたんじゃないだろうか。

そして、今来た使い魔？は一体何処の使い魔だろ。

私が詩音の言う使い魔が来ている縁側に行くと其処には、

『あ！久しぶり、芽衣。元気してた？』

「その声は……諏訪子？」

『当たり～』

其処に居たのは言葉を伝える使い魔、というより使役された蛙の様だ。

「で、どうしたの？何か用？」

『そうそう、それで来たんだよ。芽衣さ、神無月って知ってる？』

確か神達が出雲神社に集まるヤツだっけ？

「……まぁ、大体は」

『それでさ、芽衣って一回も出席して無いよね。別に来ない神様もいるから良いんだけど一回ぐらいは来ても良いんだよ？来る？』

「まぁ、面白そうだし良いよ」

まぁ、一日泊まってそのまま旅にでもまた出ようかな。

『それじゃあ、明日の朝から始まるからね』

「分かった、神奈子にも宜しくって言っといて」

『分かったよ、それじゃばいば～い』

そう言うと、蛙はぴょこぴょこ帰って行った。

さてと、それじゃ……
「キシ～」
「はい、如何されましたか？」
「明日、一日泊まって一度此処に帰って旅に出るから、神社の裏の水やりとか宜しくね」
「畏まりました」
さて、明日は誰が居るのか楽しみだね。

～翌日，出雲神社～
昼近くに来たけど……結構神様が来てるね。まぁ、神無月だしね。
そして出雲の巫女さんに案内されて神様達が話したり飲んだりしている所に着いた。
その案内してくれた出雲の巫女さんが普通の神様以上に神力を持っていたのは少し驚いた。
神々が集まる出雲の巫女だからかな？
案内された所ではお昼なのに既に宴会の様なものが開かれていた。
「あ！芽衣！こっちこっち」
その中に私を指名して呼ぶ神様が一人。
「や、久しぶり、諏訪子」
「そうだね、数か月ぶりかな」
周りを見てみると雑談している神、既に酔いつぶれてる神……ん？
「諏訪子……神奈子は？」
「あ～見ての通り酔い潰れてるよ」

「なんで、昼間から……」
　すると、近くの席から見たことある神が近づいて来た。
「おや、諏訪大戦以来ですね。あの時はちゃんと挨拶してませんでしたね。私は月夜見、夜を統べる神です。まぁ、月の神として認識して下さい」
「こんにちは。月夜見さん。私は星羅芽衣で普通の神です。それよりも、諏訪大戦で消滅した神様達は大丈夫でしたか？」
「ええ、それは大丈夫です。神は死んでも信仰がある限り自分の神社で復活しますから」
　まぁ、知ってた。
　それにしても、色々な人……いや神様が集まってるね。
　山神，海神，風神，天神，産土神，現人神，付喪神、色んな神様が居る。
　そして明かりが消えて一箇所に明かりが集中する。催しでもあるのかな？
『お！キタキタ！』
『おお～ゼウス様が出るぞ！』
『初めてお目にかかれる！』
　なんか、主役っぽいのが登場しそうだね。
「諏訪子、これ何なの？」
「うん、これね今年はゼウス様がお見えになるみたいなんだ」
「へぇ～」
　ゼウスかぁ～、全知全能って言われているけどどんな人なんだろう？
　宴会の小ステージに注目が集まる。
　そして、その人物が登場した。
「やぁ、皆こんにちは。僕がゼウスって言われている星月だよ」
「……え？何で星月？星月ってゼウスだったの？」
「久しぶりだね、芽衣。あ、それと、この前伝えたつもりだったんだけど聞こえて無かったみたいだし此処で言っちゃうね。芽衣は僕の娘だよ」

その一言で一気に会場が静まりそして、
『えええええええええええええっっ!!』
その場にいた全員が一気に声を出して響く。勿論、芽衣の声も合わさっている。

～少女?お話中～

「……本当に私のお父さんが星月なの?お母さんは何も教えてくれなかったけど」
「ああ、そうだよ。あの世界で君のお母さんと会って一目惚れしたんだ。あ、そのお母さんだけど僕と一緒に仕事してるよ」
「へぇ～そうなんだ」
「うん、芽衣も成長したね。僕より多くの大事な人を持って、嬉しい限りだよ」
「まぁ、色々とあったからね。それと星月はこの世界以外にも神とかやってるの?」
「ん?まぁ、やってるね。色々な世界の神様やってるよ。殆どがアニメやゲーム、小説とかの娯楽に関わる世界の神様だけどね。行きたい所があれば言ってね」
やっぱり星月は凄いんだな～。
今度その中の世界にでも連れて行って貰おう。
その後、芽衣は星月と飲み比べをする。
そして酒樽を数百以上も消費して芽衣の勝利が決まった。
星月は娘に負けて無念と呟いていた。勿論、お互い能力は使用していない。

飲んだ酒は何処へ消えたのかと疑問が残る他の神達。星月は外見が全く変わっていないが芽衣は大量の酒を摂取した所為で髪が数メートルも伸びるという不思議な事が起こった。
勿論、星月の暴露のせいで芽衣は他の神から質問を受けまくったりした。
芽衣は演奏を披露して皆を釘漬けにしたりとその日をとても楽しんだ。

～その頃のキシ～
「さて、お嬢様に頼まれた水やりを済ませなくては」
任された仕事を済まそうと神社の裏に行き花に水をやる。すると、
『お水ありがと～』
『いつもとは違う人だ～』
『けど、良い人～』
花が自ら喋ったのだ。
そんな事が出来るのはどう考えても芽衣ぐらいだろう。
「花が喋っている?……いやお嬢様が育てている花だ。別に不思議では無いな」
それだけで妙に納得がいくのは気のせいでは無いだろう。

神無月から一日で帰って来た昼下がり、芽衣は久しぶり神社の下に出来ていた人の居る村まで行こうと思った。
「詩音、今から村に行くけど一緒に行く？」
「あ、はい。行きます！」
神社の掃除をしていた詩音は掃除用具を仕舞いに行った。
そういえば、永琳達は元気かな～。いつか月にでも遊びに行こうっと。
「お待たせしました～」
「じゃあ、行こうか」

～少女移動中～

芽衣の住む神社の下にはまぁまぁな大きさの村が在る。
此処に住んでいる人々の半数が半妖であり妖怪である。勿論、純粋な妖怪や人間も住んでいる。
そして何故、妖怪が人間と一緒に住んでいるのかというと、殆どが芽衣の演奏会が聞きたいという理由で住み始めて、その時に人間に優しくされた事がきっかけだ。それからこの村は妖怪と人間が共存している。それで妖怪と恋をする人間が出てきて、半妖が多くなった訳だ。
芽衣の神社の周り数キロは絶対と言っていい程人間を襲う輩は居

ない。
理由は言うまでもなく其処は人間と妖怪が仲良く暮らすある意味、桃源郷と言われいている。
勿論、これを良いと思っていない妖怪や人間は居る。
そんな妖怪や人間はこの村の範囲数キロに近づけない様に結界が貼ってある。
そして、村の中をぶらぶら歩いていると、
「母上！甘味処がありますよ！一緒に食べましょうよ」
詩音が甘味処を発見した様だ。別に断る理由は無いし、良いかな。
「そうだね、お兄さん！団子６本お願い」
「これは、芽衣様。団子６本ですね。少々お待ちを」
そう言うと、若い男性は店の中に入っていった。
私の名前を知ってるって事は演奏会に来てた人かな？見た事ある顔だったし。
「……あの……貴方が……星羅様……ですか？」
すると、近くの席から声が少し小さい女の子が話しかけてきた。
「そうだよ、貴方は？」
「あ……自己紹介が遅れました……稗田阿礼…と申します」
稗田……というとあの一族だよね。この村で生まれてたんだ。
「私は星羅芽衣、普通の人間だよ」
「……そうなんですか？」
「そうだよ」
と丁度、団子屋のお兄さんが団子を持って来てくれた。
「はいよ、団子お持ちっと、おや？稗田の娘さんじゃないか」
「知ってるの？」
「ええ、記憶能力がずば抜けて高い一族だそうで有名ですよ」
「（ぱくぱく）へぇ～、そんな一族が居たんですね～」
詩音はあんまり興味無さそうに口に団子を放り込む。花より団子かな？
「はい……私の一族は……皆……記憶するのが……得意です」
「（ぱくぱく）」

記憶する事が得意ね～……まぁ、凄い事だよね。普通の人間からしてみたら。
「さてと、団子も食べ終わったし帰ろうか、詩音」
「えぇ～！まだ来たばかりじゃないですか～」
「神社の仕事が残っているでしょ、じゃ、阿礼ちゃん。ばいば～い」
「……さようなら」
私は団子を食べて村を後にする。
明日から私は旅に出るから詩音に色々と言っておかないとね。

紫と浦島と月の都

次の日、私は支度を整えて神社を後にした。
詩音には一応、能力の使い過ぎと神々の召喚を控えるように注意をしておいた。
あの能力は下手をすれば一瞬で世界を滅ぼせる様な神や人外を召喚しかねないからだ。
だから詩音には召喚をする時はキシに立ち会って貰いニャルちゃんの召喚だけに限定しておいた。
ニャルちゃんなら詩音に色々と教えてくれるだろうし、何よりお願いしといたから大丈夫だと思う。
まぁ、ＳＡＮ値が減るような姿じゃなく人間の姿だったから安心。
まぁ、この話は置いといて。
私は今、適当に日本の至る所を旅している……行く当ては無いけれど旅をするって事が私にとっての娯楽みたいなものだしね。歩いてる場所は砂浜。
それと、さっきから誰かが私を見ている。まぁ、誰かは分かるけど。
「紫、其処で何やってるの？」
「……あら、偶然ね芽衣」
私が声をかけた所から隙間を開き紫が顔を出す。
百年ぐらい見ない内に大きくなったな～と心の中で思う。
紫の能力は『境界を操る程度の能力』。
この能力を使い境界の隙間を作っているんだろうなと私は思っている。
「偶然……ね。約１００年ぐらいの久しぶりかな？」
「良く覚えてられるわね」
「そう言う紫も覚えてるじゃん」
「あ、あれは、私の色々な、決意の……一日……だったから……」
？…最後等辺は良く聞こえなかったな～。でも、何の用だろ？
「それで、紫。何か用なの？」

「本当に偶然に姿を見かけたら声をかけただけよ」
「へ～……でも用があるんでしょ？」
「……」
　この広い世界で偶然、旅をしている私を見つけるなんて確率が低すぎる。神出鬼没だし私。
「お見通しって事ね……単刀直入に言うわ芽衣。貴方、私の式にならない？」
「……急にどうしたの？」
「私の夢を実現するには、一人では色々と大変だからよ。だから芽衣みたいな人物が式になってくれると助かるわ」
「どうして私？」
「貴方の人脈を利用したいからよ。色々と強力なのを知ってると思って、例えば貴方の執事とか」
「断る理由はあんまし無いけど嫌だって言ったら？」
「……出来るだけ傷つけないで無理矢理にでも式にさせるわ」
　……強情過ぎるでしょ紫…。夢を叶えるのは良いけど人の都合も考えないと……。
　私は荷物を置いて紫の前に立つ。
「……手加減と優しく。どっちが良い？」
「ふっ！本気で来なさい！人間が私と戦えると思わない事ね！『四重結界！』」
　紫は私の周りを結界で包囲する。
「ふふふ、終わりよ。これで逃げられな――――――」
「薄い結界だね、強度が足りないし一点に集中して攻撃すれば簡単に割れる」
　パリーン！
　結界を一回ノックすると其処からひびが入り跡形もなく割れた。
「なっ……どういうこと!?」
「力量は間違えちゃ駄目だって事」
「それは、私が上の筈、っ！」
　ドンッ！

「かはっ……」
「あ」
「くっ、なんで、それほど……」
そう言いながら紫は倒れ伏した。
……お腹を殴る直前で止めた筈なんだけどそれでも紫には随分効いたらしく気絶した。
まぁ、直ぐに回復させるけど……

ゆかりん正座中……

「……貴方……一体何なの？力も普通の人間程度にしか感じないし」
「唯の長生きな人間だよ？それと式の件は無しでね～」
「で、でも式になれば私の能力も使えるのよ？」
「へ～どんな能力？」
「『境界を操る程度の能力』よ。移動が便利で物を入れたりも出来るわ」
「ふ～ん、それって如何やるの？」
「こうよ」
紫が何もない所で指をなぞると隙間が開いた。
その動きと私も同じ指の動きをする。
「……？」
「こう？」
私も見よう見真似で境界を操り隙間を開いた。
「ええっ!?どういう事!?」
「私の能力は『真似する程度の能力』だから、見たら出来るんだよ」
「」
紫は呆然として私の開いた隙間を見ている。
本当は前々から使っていたけどね。
「あ、そうだ。紫は妖怪と人間が一緒に住める所を考えてるんでしょ？なら、私が良い人材を探してあげるよ」

「ほ、本当に！」
「ただし！私の家族に手を出したら……」
そうして私は紫を威圧する。威圧なんてやった事ないけど。
だがその威圧に反応するかのように周りの景色が歪んでいく。完全にやり過ぎた。
「……」
「ありゃ、気絶しちゃった。悪い事しちゃったかな……まぁ、紫なら大丈夫かな」
少し反省して気絶した紫を砂浜から近くの岩場に寝かせておく。
「さてと、旅を続けようかな」

砂浜を歩いて数十分。芽衣はとある人物と会っていた。
「いや～まさか別の土地からこんな辺鄙な所まで良く来たもんだな！」
「あはは、辺鄙なんてそんな。良い海じゃないですか」
「そうか？いつもと変わらない普通の海に見えるがな！あっははは！」
このハイテンションで話しかけて来ている人物。名前は水江浦島子だそうだ。
そう、殆どの人物が知っていると思う。あのおとぎ話に出てくる浦島太郎の原型の人物。
丁度、年代も一致するけどまさか此処で会うなんて思いもしなかった。
彼は漁をしている最中だったが他の土地の人が珍しいのか適当に世間話をしている。
「お、そうだ！良かったら一緒に漁に行かないか？」
「え……まぁ、別に大丈夫ですけど」

「よっしゃ！なら直ぐ行こう！一応、これが仕事なもんでね」
そうして浦島さんの漁に付き添い魚を釣ったりして仕事を手伝った。
数時間はそんな事をしていたと思う。私がまたまた釣れた魚を浦島さんに渡そうとすると……
「なっ？何だあれ!?」
浦島さんは船の前の方を見て驚きの声を上げる。
私も同じく浦島さんが向いている方向へと目を向けると其処には背中が五色に彩られた亀が泳いでいた。
「うわ～……綺麗な亀ですね」
「……」
「どうしたんですか？」
「……あれを捕まえよう」
「え？」
「あの亀を捕まえよう！あんなに綺麗なら母も喜んでくれる筈だ！」
私としてはあれぐらい綺麗な亀なら見れただけで良いんだけど……。
「良し！早速、捕まえに行こう！」
「あっはい」
そして亀の後を追いながら捕まえる隙を狙う浦島さん。
そのせいで大分、沖の方に来ちゃったけど……大丈夫かな？主に鮫とか。
とそんな心配を横に浦島さんは亀を捕まえようと亀に向い船からジャンプした。
「浦島さん!?何やってるんですか！」
続いて私も亀の方にジャンプする。
私は完璧に亀の上に着地出来たけど浦島さんは亀を掴んではいるものの体半分は海の中だ。
「それで、これからどうするんです？」
「あ……」
「考えて無かったんですね、分かります」

私も亀の所に来た為、船は遠くって……あれ？
「船……何処に行ったんでしょうか？」
「……消えてるな」
そして二人は沈黙する。
「まぁ、運が良ければさっきまで漁をしていた所に亀が連れてってくれるでしょ」
「そうだといいがな……」
まぁ、駄目だったら私が飛んで連れて帰るけどね……。
それにしても亀に乗って海を彷徨うの結構楽しいな～。
私がそんな事を思っていると一瞬にして海の空気が感じが変わった。
「……」
「どうした？何かあったか？」
先程まで海からは多くの生物の……生きているという感じが一瞬にして生き物が住めない様な死の海に変わった。……あれ？死の海って……あっ。
「おお！陸が見えた！此処は……まさか！海の向こうの国、蓬莱国か!?」
いや、違う。私は断言出来る。
此処は日本でもないし地球でもない。ましてや蓬莱国とかいう場所でもない。
此処は……月。月の都だ。
砂浜の所に居る人物を見て私は確信する。
腰ほどもある長さの金髪をなびかせて立っている人物。綿月豊姫。

そして亀に乗り砂浜へとたどり着いた。先程から豊姫が私達の事

を見ている。
「此処が蓬莱国か～！俺の住んでいる所とまるで空気が違うな！あんたもそう思うだろ！」
「えぇ、まぁ……」
視線に気づかず、一人ハイテンションになり周囲を見渡す。
そして浦島さんも豊姫を見つける。
「おぉ！あんたは蓬莱国の人か？変わった服装をしているな！」
「それは違う。お前が今居る場所は蓬莱国などではなく海底に存在する『竜宮城』である。五色の亀は迷子になっていた私のペットであり、探していたら貴方が背中に捕まっていたのです」
「へぇー……竜宮城かぁ……」
そして豊姫は亀を連れてきた礼をしたいと言い私と浦島さんを屋敷へと連れて行く。
浦島さんは最初、「早く母にこの事を伝えたい」と言っていたが竜宮城……いや、栄華を極めた月の都を見ると故郷に帰る事を忘れて「もう少し此処に居たい」と言い始めた。
どう考えても私は巻き込まれてるけど私も私なりに月の都を楽しみたいので私も居たいと言った。
すると豊姫は少し考える素振りをして屋敷から出ないと決まりを付け居させて貰える事になった。浦島さんは歌って踊る兎達の楽しげな日常を見て、感動したり豊姫に「何故、海底の空はこんなに星が見えるのか？」という疑問をぶつけて「それは星ではなく、魚達が毎日躍っている姿だ」と幻想的な返しを浦島さんはそれを信じてまた感動していた。
そして三年程の月日が流れた。その間に私は綿月依姫に会った。最初に会った時は少し怪訝そうな感情を表していたが次第には興味深い目をして私と浦島さんに接して来た。豊姫もそうだった。一応不老で歳は取ってないけどバレてないからいいかな。
けれど、三年程の月日が経ったある日。浦島さんが「家が恋しい」と言い始めた。
その日をきっかけに豊姫と依姫の目が変わった。問題事をどうす

るかという目に変わった。
　そしてそれから数日後、私と浦島さんが寝に着くと……
「二人は眠った様ね」
「ええ、そうみたいですね」
　聞こえて来る声、豊姫と依姫の声だ。
「良く眠っているわね。流石、八意様の薬だわ。お酒に混ぜて飲ましたらイチコロだったわね」
「それじゃあ、二人を人工冬眠室（コールドスリープ）に移動させましょう」
　とそんな会話が聞こえて来たのですかさず起き上がる。
　私が起き上がったのが其処まで驚いたのか直様、一歩二歩と後退された。悲しい。
「貴方……起きていたのですか？それにその姿…」
「うん……まぁ、見て分かる通りかな」
「……八意様の睡眠薬を飲んだ筈では……」
「えーと……そういう薬は私には効かないんだ。体質だから。ま、それはそれとして永琳を呼んでくれるかな？」
「……何故、貴方は八意様のお名前を？私は貴方たちの前ではその名前を口にしていない筈」
「まぁ、呼んでくれれば分かるからさ。呼んで来てくれる？」
「依姫、私が呼んで来ますから貴方はその人間を」
「はい、お姉様」
　依姫は自分の腰に掛かっている刀を抜くと自分の手前の床へ刺した。
　すると私の周りに無数の刃が生えてきた。
「動くと祇園様の怒りを買うぞ」
「はいは～い」
　私は大人しく永琳が来るのを待った。時間は数分程度だろう。
　豊姫と一緒に来たのは昔と変わらない永琳だった。
「やぁ、永琳！久しぶり！」
「もしかして……芽衣さん!?」
　私は嬉しさで祇園を無視して永琳に近づく。

「動くとっ！」
依姫の忠告の前に周りの刃が私に襲いかかる。
そして私の体に突き刺さる……人間串刺しの完成だ。
……周りに居る永琳達が呆然としてるから茶番は止めて刃をすり抜けて永琳の前に行く。
傷？そもそも刃にすら当たって無かった無傷だけどね。
永琳の前に行くと永琳が私の手を握り、
「芽衣さん！お久しぶりです!!」
と先程まで串刺しだった私の事を無かった事にして感動の再会を果たす。
「いや～偶然来ちゃってね。三年ぐらい月の都を堪能してたよ」
「はは、芽衣さんらしいですね」
「えっ!?ちょ、ちょっと待って下さい！お、お知り合い!?この人間と!?それに何で普通に祇園様の力を無視して更に無傷!?」
私と永琳が感動の再会をしている時に完全に蚊帳の外だった依姫が質問を多く投げかけてきた。
まぁ、質問されたから永琳と一緒に一つずつ答えていく。
永琳が地球にいた頃に私と出会っていた事，それに祇園をスルーしたのは私の能力って事にしておいた詳細は秘密。
「芽衣さんが良ければ私が月の都を案内しますが……」
「う～ん、十分に月の都は堪能したから私は帰るね」
「そうですか……豊姫、芽衣さんを地球に送って上げなさい」
「……ですが月の都の事が…」
「彼女はそんな人じゃないから大丈夫よ。……処で芽衣さん。あの男性は？」
「ああ、浦島さんね。普通の人だよ。私と同じ。だからさっきやろうとした事をすれば良いんじゃない？本当は浦島さんには家に帰ってお母さんと一緒に過ごして欲しいけど」
「男の方は普通の人間として芽衣さんが普通の人ですか（笑）それでは、また何処かで」
「うん、じゃーねー永琳！それに依姫と豊姫もね！また会おうね！」

私は永琳達に別れを告げて豊姫の能力によって地球へと帰った。

「八意様……彼女は一体、何者なんでしょうか…？八意様より長く生きて祇園様の力を無効化する程の力を持つ人間なんて有り得ません…」

「彼女は彼女よ。昔と変わらない……」

「はぁ……あ、この男はどうします？」

「人工冬眠（コールドスリープ）しておきなさい」

「はい、分かりました」

「う～ん、久々の地球！いや～やっぱり地球の空気はいいね！月も悪くないけどやっぱり地球が一番かな！」

さてと、旅の続きでもしようかな……また当てもなくブラブラして日本を回ろっと！

鬼退治

時は竹取物語。芽衣が月から帰り２００年は経っていた。
芽衣は日本の隅から隅まで歩き見て回った。それに２００年を費やした。
能力の応用も芽衣は殆どを完成させた。
芽衣に出来ない事は無いと言っても過言ではない。まぁ、出来ない事は出来ないが。
そして芽衣は現在、遷都する前の平城京の団子屋に居る。
「(もぐもぐ) 何か最近変わった事無いですか?」
「いや～最近は面白い話が無いね～」
「……そうなんですか、ごちそう様。御代は置いとくね」
「はい!まいど!またいらして下さい」
「そうするよ」
さて、まだ輝夜は月から追放されてないみたいだね。
まだ時代で言えば飛鳥時代かな?というかこの時代に団子屋がある事に驚きだけどね。
まぁ、京になる所に家を建てて退魔士として働いてみようかな。面白そうだし。

～３０年後～

え?何?時が流れるのが早いって?
仕方ないでしょ、特に何も無かったんだから。
あったと言えば、最近私の家に妹紅ちゃんが遊びに来てくれています。

転んでいた所を魔法の様に傷を治したら懐かれました。
その時はまだ妹紅ちゃんだって事が分からなかったけどね（笑）
まだ、５歳だけど。親は此処に来ている事知っているみたい。
妹紅ちゃんが生まれてるということは、そろそろ来るね。（輝夜ちゃんが）
それと今は奈良時代、この町がようやく平城京になりました。
今日は朝廷からの依頼で鬼退治に行って欲しいんだって。
人気者は忙しいんだよ。流石に３０年以上も退魔師として働いているからね。
「さて、出発するかな」
ピーピー
「ん？ああ、今日は危ないからお留守番。分かった？」
ピー
「良し良し、それじゃ、行って来るね」
ピー
そう言えば最近、一匹の小鳥に懐かれました。
私が縁側で歌っていたらいつの間にかこの小鳥が私のリズムに合わせて囀っていました。
可愛いから飼う事にしたけど毎日、餌をあげてるだけで放し飼いなんだけどね。
てことでさっさと鬼退治に行きましょう！

とある山の目の前

「此処に鬼が住んでいるという事で来たんだけど……」
聞く人……いや、聞く妖怪間違えたか？
私は今、天狗とお話中。鬼が居る場所に案内して欲しいんだよね。

多分、というか頂上に居ると思うけどね。
「はっ？人間が鬼退治？無理無理、天狗の私たちでも鬼には頭が上がらないのに」
それにしても、此処って妖怪の山だよね、絶対に。
鬼って言うのも嫌な予感……というか鬼の四天王ですよね分かります。
「いいから、通してください」
「まぁ、いいだろう。鬼という奴がどういう奴か人間に知らしめるのも悪くない。良し通れ。鬼はこの山の頂上にいる」
「ありがとうございます！」
案外、あっさり通してくれた。ラッキー♪
さてと、後はこの山をハイキングするだけだね。
見た感じ歩いて登ると時間が掛かりそうだけど……別にいいよね。ゆっくりしたって。

妖怪の山，山頂
「ほう、人間が私たちを退治しに来たのか！久々の鬼退治って事か！」
「はい！今、現在こちらに向かっているという事……」
「いいだろう！アタシが相手になってやろう！」
「なっ……勇儀様、自らですかっ!?」
「ああ、その肝が据わった度胸ある人間と闘いたくてな」
『すいませ～ん』
「！……人間が来た様です」
「良し！じゃあ、行って来る！」

やっと、山の山頂にまで歩いて来た……それにしても……大きい洞窟だな～。
あ！洞窟の前でお酒を飲んでる鬼……というか、あれ萃香かな？
「すいませ～ん」
「おや？人間かい？こんな所まで何しに来たんだい？」
「いえ、少し鬼退治を」
「……あっはっはっは!!一人で鬼退治？それは無謀って奴だよ。私は伊吹萃香！鬼の四天王だよ！」
「（うん、知ってた）私は星羅芽衣。何処からどう見ても普通の人間です」
私の自己紹介が終わると、洞窟の中から一人の鬼が出てきた。
「良く来た！人間！私は四天王、星熊勇儀！私達、鬼を退治しに来たのかい？」
「そうですね」
「……ふむ、ただし！条件がある！」
「…どういう条件ですか？」
「五対五で勝負を受けよう、人間に鬼の圧倒的な力を目にしたいからね！」
五対五……キシ達を集めるとするなら……詩音にパウ…一人足りない……まぁ、キシが何とかしてくれるかな。
「じゃあ、三十分待ってください」
「いいだろう」
急いで呼びに行かないと……隙間を開いて行こうっと。

「ほう?…あの人間、能力持ちか……」
「おい!そこの鬼!」
「はい!」
「闘技場に観客を入れとけ、久しぶりに楽しい戦いができそうだ……萃香も油断していると負けるかも知れんぞ?」
「酔っ払っていても私に勝てる人間なんてそうそう居ないよ……」
「ふん、どうかな……」

～音妖神社～
「ふぅ、今日も肩が凝るな……」
「キシは働きすぎなんだよ～」
「黙れ、大飯食い。少しは食料調達でもしてこい」
「まぁまぁ、落ち着いて、キシさん」
居間で寛いでいる三人、其処に、
「久しぶり～皆～」
「お嬢様……何処から出てるんですか?」
「あ、芽衣だ!久しぶり!」
「母上!?何処から出てるんですか!?」
私が家の居間の上から登場すると暑い歓迎を受けた。
いつも通り平和そうで安心したかな。
「まぁ、ちょっと説明するから、実はあれから――――――――みたいな事があって人手が欲しいの」
まぁ、私が退魔師の仕事としてなんやかんやしている事を説明した。
「分かりました。もう一人は私が呼んで来ます、少々お待ちを」
そう言って、キシが部屋を出ていってから十分。

「お待たせしました、こいつは、アヤと言います。お嬢様の師団の一人です。実力は相当な物だと私が保証します」
「どうも！よろしくお願いします！芽衣様！」
……私の師団？まぁ、今はいいや。
「じゃあ、皆、この中に入って」
そうして皆が私の隙間に入り妖怪の山に移動する、丁度三十分だ。
「おや、来たか。人間、準備は済んだのか？」
「ええ、大丈夫ですよ」
「それじゃあ、闘技場に移動するか」
「闘技場？」
「ちゃんとした決闘場と観客は居た方が盛り上がるだろう？」
こうして、絶望（鬼側）の戦いが開幕された。

闘技場
「ほら、さっさと弱い順に戦いな。先に5勝した方が勝ちだよ！まずは一回戦！」
あえて、5勝の所は突っ込まないで置こう……。

一回戦　鬼1　ＶＳ　詩音

「頑張って～詩音～」
「お前の事だから負ける事は無いだろうが油断はするな」
「私の出番はまだか！」
「ちょっと落ち着いて下さい、パウ様!?」
パウがさっきから戦いたがってアヤちゃんに止められてる……パウってこんなに好戦的だっけ…？
「はい！頑張ります！」
「おいおい、お嬢ちゃんが相手か、でも勇義さんの命令だ。手加減は出

来ないよ？」
「望むところです！」
「それでは、一回戦！スタートッ！」
　まずは、一回戦が始まりの合図は勇儀が行った。相手は強いかどうかは分からない。
　でも、詩音は伊達や酔狂でニャルさんの教育を受けた訳ではない。
「え～っと、確か……ニャルさんが教えてくれた合言葉は……
『ふんぐるい　むぐるうなふ　くとぅぐあ　ふぉまるはうと　んがあ・ぐあ　なふるたぐん　いあ！　くとぅぐあ！クトゥグア！』出てきて下さい！」
「……呼ばれて来た」
　……まんま、ニャル子さんのクー子が来ちゃったよ。
「あの鬼さんを死なない程度に倒して下さい！」
「……了解」
「ごちゃ、ごちゃ、何をやってるか知らんが一人二人増えた処で相手にならないぞ！」
　すると、鬼1から火炎弾の様な物を吐き出しそれを拳に乗せクー子と詩音に殴りかかる。
　クー子に炎って……相性悪すぎでしょ。鬼1の方の。
「……そんな生ぬるい炎効かない」
　鬼1の炎は完全に消えクー子は拳を片手で押さえていた。
「どういう事だ……？」
「……お返し、本当の炎を見せてあげる。わたしの宇宙ＣＱＣ百式」
　ぽつりと呟くクー子の周囲を、１０個の小さな燐光が飛び交っていた。
　それを見て、クー子自身も驚いている様だ、詩音に召喚された人は皆ステータスが上がるからね。
　そして、予備動作なしで熱線が走る。
「くっ！」
　その熱戦を数発避けようとした瞬間、別の熱戦が足を貫く。
「ぐあっ！」

両手両足に一本ずつ熱戦が貫通し鬼1はその場に沈む。
「……気絶しただけ、また呼んでね」
「は、はい！ありがとうございました！」

一回戦終了

「ふっ、中々やるでは無いか、早く次の試合を始めよう」
そういえば、妖怪が殆どだけどいいのかな？このチーム。

二開戦　鬼2　VS　アヤ

「頑張って～アヤちゃ～ん」
「師団の力をお嬢様に見せるんだ」
「直ぐに終わらせて私の出番を！は・や・く！は・や・く！」
パウは待ちきれないのか何かのコールをしている。
って、あれ？詩音が居ない……。
「分かりました！」
「何か嫌な予感がする……」
「それではぁ、二開戦っ！スタァートッ!!」
って、詩音……居ないと思ったら何処に……勇儀のマイク奪って来てる……ま、楽しそうだしいいかな。
さて、アヤちゃんはどんな能力を持っているのかな？
「まぁいい！先手は貰うぜっ！おらっ！鬼の力にひれ伏せ！」
鬼2はアヤちゃんに向かって力のある限り拳を振り下ろす。スピードもかなりある。が、
「トロイんだよ、ゴミが」
アヤ……ちゃん？はその鬼2が攻撃をしている時、まるで世界の時間が遅くなったかの様に避けた。
「は？」
「終わりだ、抵抗してみろよカス」

アヤちゃん?は鬼2の頭上に飛び上がり鬼2の後ろに回り込むと鬼2の頭に数十という数の蹴りを与え鬼2を昏倒させた。
「凄い……一発の蹴りで鬼を沈めちゃった」
あれ、詩音。いつの間に戻ってきたんだろ。
「詩音、それは違うよ、アヤは数十の蹴りを一瞬で行ったんだ。それに見た所、アヤちゃんの能力は……短い時間を長い時間に変える能力とかだと思うよ。超スピードなら髪がなびく筈だけどなびいて無かった。……それと途中、アヤちゃんの性格が変わってた様な気がするんだけど…」
「その通りでございます。お嬢様。あの一瞬で其処まで見抜くとは恐れ入ります。お嬢様が仰った通り、アヤの能力は『一秒を十秒に変える能力』です。この時にアヤの攻撃力は約四倍になります。私の攻撃力の四分の一程度でしょうか。性格は能力を使うとああ、なるそうです」
「ほえ~凄いですね~」
あの鬼大丈夫なのかな?キシの四分の一の力を頭にって……

二開戦終了

「ふむ、何故妖怪が人間と闘っているのか知らんが、人間達を少し舐めすぎたようだ。萃香!」
「分かったよ、次は私だね。相手は?」
「パウ、待ちに待った出番だよ」
「やっと来たー!」
「ふん、妖精如きじゃあ、相手にならないけどいいのかい?」
萃香……それはさっきまでの試合を見て言ってるの…?更にそれフラグだよ……。
「……むか……芽衣!芽衣!少し本気出していい?」
「……死なせない程度なら良いよ」
「やったー!!久しぶりに少し本気出す!ぶっ倒す!!」
……パウが少し本気出しても大丈夫かな?この山。

「さぁ！さぁ！さぁ！第三回戦！開始ぃぃ!!」
　ノリノリの詩音の合図と共に両者がお互いに向かい駆け出した。
「そういえばさ、キシ。パウって何の妖精だったっけ？」
「聞かなかったにですか？パウは元素の妖精。つまり、全ての妖精その物です。後、新しい能力にも目覚めてましたよ」
「え？『化ける程度の能力』じゃないの？」
「それもパウの能力ですが、それは、パウ自信の能力です。もう一つの能力は妖精が為の能力です。能力名は『元素を操る程度の能力』だそうです」
「……全ての元素を操るって、強すぎるでしょ……」
「お嬢様がそれを言いますか（苦笑）」
　全ての妖精その物……パウって本当に妖精のリーダー何だなって改めて思い出すね。
「あれ？何処行った？あの鬼、それと何？この霧」
「ふふふ、私は此処だよ」
　試合の方を見ると萃香が能力使ったのかな。辺り一面に萃香の霧が待っている。
　すると、一瞬、パウの視角を狙い手だけが具現化してパウを殴り飛ばす。
　ドゴォッ！
　パウは数メートル吹き飛ばされるが空中で踏ん張る。
「いった～い……もう許さない！神に祈っても芽衣に祈ってももう終わりだ!!」
　何で其処に私が入るのか後でゆっくりパウとお話でもしよう。
「（本気で殴ったはずなのにどうして痛いで済むんだ!?）何をどう許さないって？」
　すると、またパウの視角から攻撃をする。だが、
　ガシッ！
「つ～か～ま～え～た～」
「しまった……（それに何なんだ、この妖力は……私の数十倍はあるぞ!!）」

「元素よ集まれ、そして害なす敵を倒せ『元素爆弾(エレメンツボム)!!』」
「がはっ……!!」
……クレータ程度で済んだね、一応、力は抑えてるみたいだけど……。
まぁ、それでも重症だね。

三回戦終了

「……次はアタシだね、相手は誰だい？」
「私だな、手加減はしてやる」
「そんな事言い鬼を舐めると……死ぬよ」
「はい、それでは四回戦開始です！」
いつも通り、司会は詩音。
「お嬢様」
「どうしたの？」
「力を3割程、解放してもよろしいですか？」
「まぁ、死なせないなら……」
「おや、遺言は済んだか？」
……キシは別に1割でも勝てると思うのにな～。慢心と油断を絶対にしないのがキシだしね。
そういう事をする時は相手にわざと攻撃させたりだとか油断を見せるとかそんなんだし。
「それでは……鬼に絶望を見せてやろう……」
「なっ、何なんだい！その妖力はっ！それで3割だって!?ふざけんじゃないよ!!」
「これが本当の絶望だ。その体、全身で覚えろ……」
キシは一瞬で勇儀の後ろに回り込み普通に殴った。さっきのアヤちゃんの速さの比ではない。
それを、勇儀は腕で受け止めて数十メートル吹っ飛ばされ壁に叩きつけられる。
「……くっ、強いねぇ……腕が一本折れちまったじゃないか」

「ふん、まだ終わりではないぞ……」
そう言いながら、キシは勇儀に近づく。その時、
「油断したな！この範囲は私の間合いだ!!一で溜め、二で近づき、三で放つ！四天王奥義！『三歩必殺!!』」
どごおおおおおおおおおん!!!!!!
その一撃はこの洞窟が揺れる程に凄まじい。流石は鬼の四天王と呼ばれるだけはあるという事だ。
だが、キシは避ける筈の攻撃を防御しないで受けた。それはどういう事か？
一方、勇儀は勝ち誇った顔をしている。
「私のかｔ――――「まだ勝負は終わっていないぞ？」!?」
「終わりだ、潰れろ『重圧』」
キシは吹っ飛ばされた所から一瞬で回り込み、勇儀の足を持ち地面に叩きつけた。
勇儀はキシの『重圧』により、数十メートル下に減り込んでいる事が分かる。
クレーターが新しく一つ増えた。
キシが敢えて攻撃を喰らった理由、それは自分の最大の攻撃が相手に対して何の意味を成さなかった時、自分の無力が分かり絶望するからだ。キシはそれを行った。……というかやり過ぎだよ…。
キシが出す重圧＋キシの叩きつける力＝これはひどい。
「……パウ、拾ってきて」
「りょうか～い」
パウが拾ってくるとボロ雑巾より酷い事になっている勇儀が穴から出てきた。
「じゃあ、キシも手伝って、さっきの鬼達を集めてきて」
「分かりました」
そして、殆どがボロボロで意識が無くなっている鬼達が集まった。
私は全員の傷を操り治した。
すると、ボロボロだった鬼達は傷一つなく先程までの怪我が嘘の様に回復した。

けれど、暫くは起きないだろう。

四回戦終了

「さぁ！四回も勝ち続けてきた母上チーム！五回戦の相手は誰だあぁ!!?」

それにしても、この詩音。ノリノリである。

「次は儂じゃ」

鬼の群れの中から一人の鬼が現れる。……その登場に周りの鬼達のざわめきが大きくなる。

……見るからに数千年は生きてると感じる。キシに次ぐ最古の妖怪の様だ。

「貴方は？」

「儂は鬼子母神。この鬼達をまとめる頭って所じゃ」

「それじゃあ、私の相手は貴方ですか？」

「そうじゃ、だから……本気を出せよ？音神!!」

そう言うと、躊躇無く芽衣の腹を殴ろうと拳が迫る。が、

バギィィィッッン!!

「!?」

芽衣は事前に音壁を自分に付けていたが、鬼の頭が本気で殴っても一発で割れる程、柔ではない。

という事は、

「能力ですか……」

「ふっ、驚いたのう。まさか儂の拳の威力まで無くすほど耐えるなんてのう」

「私の能力は『音を司る程度の能力』この能力で音を纏っていたんですよ」

「儂の能力は『能力を無効化する程度の能力』じゃ。勿論、儂に触れたもの全てを無効化できる」

「という事はさっき……」

「そうじゃ、何かを纏っていたのは見えたからのう。能力で『無効化』

してそのまま、攻撃を当てれたと思ったのじゃが……いや、通らなかった」
「それじゃあ、『無効化』する物が無かったらどうします？」
「はっ、何を言うかと思えば……っ!?」
芽衣が霊力を全て解放する。妖力と神力は強すぎるので開放はしない。
霊力だけで十分と芽衣は宣言している様なものだ。鬼子母神の怒りを買うには丁度良い。
だが、芽衣はそんな気は無い。芽衣もこれで相手を考えながらの全力。
芽衣の全力は星月（ゼウス）と戦ってようやく五分という程のものだからだ。
「舐めた真似を……確かにその霊力は凄いが神力を出さんとは……後悔させてやろう!!」
鬼子母神は全ての力を解放する。自分の全ての力をだ。そのオーラだけで地面を揺れる。
そのオーラから避難するかの様に殆どの鬼が退散する。残っているのは萃香達ぐらいだろう。
そして、此処から鬼子母神と芽衣の肉弾戦が始まる。
時は流れ数十分間、殴り合う。
そして芽衣が動く。
「鬼子母神さん！これを避けきれますか？」
芽衣は自身の身体能力を全力の半分ほど使い、キシでもやっと視えるほどにスピードを出している。
他の奴から視れば、残像が残り本物がどれか分からなくなる。
今の鬼子母神の体力は三分の一が有るか無いか程度だ。圧倒的に芽衣が有利の状況。
「っ……難しい問題出してくれるわ……」
長いほど生きていると、見ているものではなく自分の感を頼りにする者が多くなる。
何故なら長年、生き抜いてきた体だ。感が物語ってくる。

「(この一撃で終わらせて見せるっ!)」
　そして、芽衣は鬼子母神に対して真正面から攻撃をする。鬼子母神も感で真正面に技を放つ。
「砲鬼剛天翔ッ!!」
「はぁっ!!」
　そして、轟音が響く。
　音が止んでと立っていたのは、
　芽衣である。
「いや~痛かった。流石、鬼子母神。鬼の頭だね」
「五回戦目!!勝者ッ!母上!!!」
『うおおおおおおおおおおおおおお!!!!』
　その瞬間、いつの間にか帰って来た鬼達の声で溢れた。
「……お嬢様、手に傷が……」
「いいよ、久しぶりに怪我したからね。自然治癒に任せるよってほら、治った」
「あ!母上、お疲れ様です!鬼達が宴会に誘いたいって言ってましたよ」
「いや、私は遠慮しとくよ。それよりも詩音、さっき言った物、持ってきた?」
「はい!鬼さん達に言ったらくれました!」
「それじゃあ、私は帰るね。キシ達は宴会に行っておいでよ日々の疲れを発散すると良いよ」
「それでは、お言葉に甘えて」
「は~い」
「言われなくても!」
「ありがとうございます!」
　私は、平城京に帰って報告しなきゃね。

宵闇の妖怪，輝夜姫

鬼退治をした帰り、私は宴会に参加せず鬼を退治したとの報告をしに京に帰っていた。
「ああ、もう真っ暗だね。山登りに時間いっぱい使っちゃったからかな」
現在、太陽が見えず確実に夜を指していると分かるが月は出ていない。新月だと察する。
夜だけあってか少し肌寒く感じる。京の町に急ぐ芽衣だが、
「っと、その前に……其処に居るんでしょ？紫」
芽衣は飛んでいる最中、声を出す。
すると何もない所に隙間が開き紫が出てきた。
「……何で分かったのかしら？」
「微弱だけど妖力を感じたからね。相手に気づかれない様にするならもっと気配を隠さないと」
「はぁ……本当に貴方には敵わないわ」
「それよりも、あの妖怪の山に交渉でも仕掛けに行くの？」
「ええ、そうよ」
「じゃあ、ついでに良い人材を紹介するよ」
「誰かしら？」
「鬼の四天王、それに鬼子母神と……紫の後ろに居る子だよ」
そう言われ紫は自分の後ろに目をやる。
すると其処には金髪の長髪に深紅の瞳。
身長は高めで、白黒の洋服を身につけ、スカートはロングの女性がいた。
紫は気付かなかった様で顔が驚いている。紫とは違い完全に気配を殺していた。
「……貴方、名前は？私はスキマ妖怪の八雲紫よ」
「私は宵闇の妖怪、ルーミア。何で貴方みたいな大妖怪が人間？と喋っているのか気になって少し見に来ただけよ」

「あら、貴方も大妖怪と呼べるほど生きてる様に見えるけど？（……
芽衣の言うとおり中々良い人材だわ。私がギリギリ勝てる程度ね。
でもこっちには芽衣が居るわ、楽勝ね）」
「じゃあ、私は先に帰ってるね」
「え？……ちょ、ちょっと待って！芽衣！」
「どしたの？」
「貴方も手伝ってくれるんじゃないの!?」
「私は一言も手伝うなんて言ってないよ～」
「くぅ……」
「頑張ってね～あ、そうだ。終わったら私の所に来てね、話したい事があるから。じゃ、交渉頑張って！」
「ええ、分かったわ」
　私は紫を置いて京に急いで帰る。朝廷の人がまだ起きてればいいけど。
「逃がしていいの？あの人間？なら私が食べようかしら……」
「待ちなさい。貴方の相手は私よ!!」

「ＥＸルーミアなら勝てるだろうと思ったけど大丈夫かな？紫」
　まぁ、そもそもＥＸかどうか分かんないけど。
　そんな事を言いながら私は証拠品を朝廷の使い人に提出して家に向けて帰っていた。
（証拠品を提出した時の使い人の顔が生きている人間に対して見せる顔をしていなかったけど……まぁ、気にしない。それと良い情報が聞けたし）
　その情報とは輝夜姫への求婚が此処、明日に行われる事。
「今日は早く寝て明日に備えよう」

そうして、私が自分の家に着くと中で人が居る様な物音が聞こえた。
戸締りはしてないけど泥棒は入らない筈だ。芽衣の事は近隣でも有名だからだ。
どんな風に有名かと言うと妖怪を素手で倒したとか何もしていないのに妖怪が倒れていく等。まぁ、殆どが事実だから否定しないんだけど。そういう事だから私の家に泥棒は入らない。
だとすると、残るは紫が侵入してるぐらいだけど……何で私の家を知ってるんだろう。
まぁ、家の前でごちゃごちゃ考えても何も進歩しないので普通に扉を開けて入る。
「ただいま～」
「お帰りなさい、芽衣お姉ちゃん」
「え？」
其処には完全に幼女と化している妹紅ちゃんが待っていた。
「え～っと……妹紅ちゃん。どうして此処にいるの？」
「お父さんに追い出された」
「……どういう事？」
「私ね、お父さんにお茶を持って行ってあげたの。いっぱい考え事してるみたいだったからお茶でも飲んで一息ついて欲しかったの。でも私ね。お父さんにお茶を持っていこうとして転んでお父さんにかけちゃったの……ぐすっ……そしたら……お父さんね……こう言ったの」
『～っ!!何をするんだっ！この馬鹿娘!!私がこんなに必死に考え事をしているのにお前はっ!!ええいっ！出てけ！考え事の邪魔だ!!ああ、お前みたいな奴！本当に生まなければ良かった!!』
（……うわ……まさに外道。妹紅ちゃんが頑張って気遣ったっていうのに……あの馬鹿）
ここ最近、藤原家には噂があった。
藤原家で息子は長男・次男・三男・四男。娘は、長女・次女・三女・四女・五女。

妹紅の存在は世間的には居ない事にされており伏せられていた。
理由は単純。才能が無いからだと、他の息子達はそれなりに才能が有った様で才能が無い妹紅の事を忌み嫌っていた。噂というのは、もう一人子供がいるんじゃないかと言う噂だ。
「……だから、家を追い出されたの……」
「そう……辛かったね……もう安心して良いよ。私は妹紅ちゃんの事を嫌いになったりしないし追い出しもしない。此処に居ても良いよ」
「うう……ぐすっ……芽衣お姉ちゃぁぁん!!」
「よしよし」
妹紅ちゃんは泣きながら私の胸に飛び込んで来る。
その事から相当、辛かったんだろうと予想が付く。
そして私は妹紅ちゃんが泣き止むまでずっと頭を撫でて上げた。
(その考え事ってのは明日にある輝夜姫への求婚の事かな。子供を大事に出来ない親は親失格だね。そんな人が求婚をする権利すらないでしょ……)
数十分後、泣き疲れたのか妹紅ちゃんは眠ってしまった。
そして妹紅ちゃんを布団に寝かせて玄関に向かうと、其処にはボロボロになった紫が座っていた。
「大丈夫?紫」
「ええ、軽傷よ。服が少しボロボロになっただけ」
紫はそう言うが頭から血も出ている。軽傷どころか重症だ。
そんな紫を能力を使い傷と服を回復させる。
「服と傷が……!!」
「これで大体は治ったよ。痛い所ある?」
「いえ、大丈夫よ。ありがとう、芽衣。処で話って?」
「あ、話は私の神社と近くの村を幻想郷が出来たら入れといてって事」
「分かったわ……そういえば芽衣……幻想郷って私、言ったかしら?」
紫が当然の事を指摘してくる。でも、
「忘れたの?私の能力は『真似る程度の能力』だよ?色んな妖怪にも

会ってる」
「……(さとり妖怪の能力ね……本当に力が知れないわね芽衣は)ええ、理解したわ。それとあの宵闇の妖怪、力が強すぎるから弱体化させたわ」
「まぁ、仕方ないね」
「それじゃ、私はこれから妖怪の山に行ってくるわ」
「あ、妖怪の山に行くならキシがいるから神社と村の事を話しておいて」
「あの執事ね。分かったわ、またね、芽衣」
そう言って、紫はスキマを使い妖怪の山へ行った。
私ももう寝ようかな。
私は妹紅ちゃんの横に新しい毛布を敷いて寝た。

翌朝、眩しい太陽の光が部屋に入り込む。
隣にはいつの間にか自分の布団から抜け出し私の腕を掴んで寝てる子。妹紅ちゃんが居る。
「こら、妹紅ちゃん。私の腕を掴んでいると起きれないでしょう?」
「う、う〜ん……」
私が声をかけると分かってくれたのか手を放してくれた。
(さてと、顔を洗ってご飯を作ろうかな)
久しぶりに人にご飯を作るので私は楽しみでしょうがなかった。
というか妹紅ちゃん……苦手な物とかあるのかな?アレルギーとか。
好き嫌いはしなさそうだし……アレルギーも……大丈夫かな。

〜少女料理中〜

「完成！さてと妹紅ちゃんを起こさないとね」
そうして、妹紅ちゃんを起こしに寝室に行くが誰も居ない。
すると居間の方から物音が聞こえる。
きっと起きたのだろう。私は居間へと向かう。
「あれ？妹紅ちゃん？」
「あ！芽衣お姉ちゃん！この鳥さんの名前って何々？」
妹紅は既に起きていて私に懐いている鳥と遊んでいた。
「この鳥の名前？……ごめんね、まだ決まってないんだ……折角だから妹紅ちゃんが付けてあげてよ」
随分と鳥と楽しく遊んでいるみたいだし妹紅ちゃんに名づけて貰う。
「私が……いいの？」
「良いよ良いよ。私が飼っている訳でも無いし。あ！今お料理持ってくるからね。その間に顔洗ってくれれば？」
「うん！」
芽衣は台所に料理を取りに行き妹紅は顔を洗いに行く。

「お待たせ～！どう？美味しそうでしょ？それと名前は決まった？」
「うん！とっても美味しそう！それと名前はピイにしたよ！だってピーって鳴いてるし！」
「ピイ……良い名前なんじゃないかな」
「えへへ」
「さて、早く食べちゃおうか。ピイのご飯もあるからね」
ピー
「「いただきます！」」
私が今回、作ったのは特製タケノコご飯に焼き魚，それに豚汁を食らえた簡単、定食だ。
ピイには新鮮な野菜をあげた。

「このご飯！凄く美味しい！」
「ありがとう、いっぱい食べてね」
妹紅ちゃんは私が作ったご飯を美味しそうに頬張りながら食べている。
それを見ているだけで嬉しい気持ちになるのは普通の事だと思う。
私を妹紅ちゃんに続いてご飯を食べた。

そしてご飯が食べ終わった後。
「妹紅ちゃん。お使いに行って来てくれる？メモを渡すからさ」
「うん！妹紅、お使い出来るよ！」
「じゃあ、よろしくね。私は少し用事があるから。お金は此処に置いとくよ」
「いってらっしゃい！」
「いってきます」
芽衣は昨日、聞いた輝夜姫の所に向かった。いつもの平城京と比べると随分と騒がしい。
律儀にお偉いさんが多く集まっているみたいなので場所を聞くとすぐに分かった。

「おや、これは芽衣様。如何なされましたか？」
すると少し歳を取っている門番らしき人が話しかけてきた。
「輝夜姫に会いたいんだけど今、大丈夫かな？」
「はい、大丈夫で御座いますよ。ただいまいらっしゃるのは、多治比嶋様・藤原不比等様・阿部御主人様・大伴御行様・石上麻呂様がお越ししております」
（藤原ぁ……あの人だけは許さない……）
「ありがとう。早速、中に入らせてもらうよ」
「いえいえ、仕事をしたまでですよ」
そういうと、門番さんは見張りの仕事に戻った。

何処かの門番とはえらい違いの働きようだ。いや、これが普通なのかな。

お屋敷の中に入ると既に来ていた五人の自己紹介は済んでいた用で今まさに輝夜姫から「難題」が出される所だった。
「多治比嶋様は、仏の御石の鉢。藤原不比等様は、蓬莱の玉の枝。阿部御主人様は、火鼠の皮衣。大伴御行様は、龍の頸の五色の玉。石上麻呂様は、燕の子安貝を持って来てください。これらを持って来た方と求婚を認めます」
そう言うと、五人は、この「難題」を解くために退出していく。
私は入口近くに居ただけなので普通にスルーされる。
と此処で輝夜の方を見ると目が会う。
「あら?貴方はどちら様かしら?」
輝夜と目が合うと輝夜の方から話しかけてきた。
容姿はストレートで、腰より長い程の黒髪を持つ。前髪は眉を覆う程度の長さ。
この時代でこれ程の美しさがあれば誰だって求婚してしまうだろう。
おっと、輝夜に質問されたままだった。
「私はこの京で退魔士をやってる芽衣。いきなりだけど質問していい?」
「え、ええ。いいですよ」
私のフレンドリーさに少し驚いたのか動揺を見せながら答える。
「じゃ、直球に……永琳って知ってるよね?」
「!?」
すると、輝夜は驚きに満ちた顔で私を見る。
「……側近は全員下がりなさい」
「「はい」」
輝夜の一言で周りにいた側近たちが退出した。

部屋には私と輝夜だけになった。
「貴方……何処まで知っているの？」
「質問は質問で返さない」
質問を質問で返すと救急車に顔を轢かれて死んでしまった人が怒るよ…。
「っ……ええ、その名前は知っているわ。なら私の質問にも答えて頂戴……貴方は月人なの？」
「いや、違うけど？」
「……じゃあ、なんで貴方は永琳の事を知っているのよ!!」
「古い、古い友人だからだよ」
懐かしいよ、あの頃が。数億年ぐらい前だったっけ？
「ていう事は…そう……貴方が永琳の言っていた命の恩人ね。今日は何の用で来たの？」
「はっきり言うね。月から迎えが来るのは何時なの？」
「っ！……何でも知っているのね。流石、永琳の友人だわ。そうね数年ぐらい先だと思うわよ？」
「そう……まぁ、今日は帰るけど今度また遊びに来るね」
「……え？遊びに？ってもう居ないし」

う～ん、後数年かぁ～……。
その時になったら私はまた旅に出るとしようかな。
……妹紅ちゃんは……どうしようかな。またその時になったら考えようっと。

蓬莱の薬と富士の山

輝夜に会ってから数年が経った……。
その間、事件等も起きず平和な数年間を私は過ごした。

妹紅ちゃんの場合は一人前に自立出来る様に色々な事を教えてあげた。
「料理を作りたい？」
「うん！芽衣姉ちゃんみたいに美味しい料理を作りたいんだ！」
「う～ん……まぁ、そろそろいい歳だし。良いよ、教えてあげる」
「やっｔ「ただし！」……ただし？」
「やるからには、徹底的にやるからね」
「分かりました！」
微笑ましいな～。

「芽衣姉ちゃん！出来た！」
「……ふむ、見た目、匂い、味、まぁまぁ良く出来てるね。これなら文句なしだね」
「やったー！２０回目でようやく完成した！」
「良く頑張ったね、今日は一緒に夕飯でも作ろうか」
「うん！」

輝夜の場合は遊びに行ったりが殆どだった。
「……」
「……」
芽衣と輝夜は二人とも見詰め合い引けをとらない。二人の間に緊張が走る。

そして数分の沈黙が経ち、その時、芽衣が動いた。

「王手」

「待った！」

「いや駄目でしょ。それはもうこの勝負で四回聞いたから」

「……負けた……これで４７敗…」

芽衣と輝夜は、将棋をしていた。勝敗は、芽衣が４７戦４７勝。圧倒的に輝夜を打ち負かしていた。

将棋は芽衣が木を『操り』作った。

「本当に強いわね……芽衣……」

「いやいや、輝夜も惜しい所だったよ。あそこをこうしてこうやれば、ほらね」

「……もう、芽衣に勝てる気がしない……」

「さて……まだやる？」

「くぅ……負けました」

回想終了。

そんなこんなで普通の日常を送っていたぐらいかな。

まぁ、それはさておき今日の夜、輝夜に月から迎えが来る。

輝夜によると迎えに来るのは兵士数人と永琳だそうだ。

だけど輝夜は帰りたくないって言うから助ける事にしたんだけど、逃げる手伝いは紫に任せることにしたよ。これで幻想郷の住民が増えるね！やったね紫！

それと私は、やらないといけない事があるからね。主に不比等の事とか不比等の事とか……。

現在、私は輝夜の部屋にいる。妹紅ちゃんとピィは勿論、お留守番。

ちゃんと私が此処にいる事も知っている。その時輝夜の事を少し話したけど大丈夫だよね？

「芽衣……来たわよ」

「そう、分かった…作戦通りに動いてね」

「分かったわ」
そう言うと輝夜は庭へ私は部屋で待機。
今回、帝から数百人の兵が送られてきた。けど月人には勝てる訳がない。
実際、戦闘になったら一瞬で消し去られる事だろう。
そして夜空に映る満月の真ん中から小さい点、それがどんどん大きくなり月人達の乗った乗り物だと分かる。
そして、空中で止まったと思ったら中から兵士が数十人出てきた。
それに続いて永琳も出てきた。
(あれ〜?意外に人数が多いんだけど……まぁ、いいか)
それとは関係なしに輝夜と永琳は抱き合い感動の再開をしている。
「永琳……会いたかったわ……」
「ええ、私もですよ、姫様……」
「私は月に帰りたくないわ、一緒に逃げましょう……」
「はい、姫がそう仰るなら……。ですがあの月人の数だと……」
「大丈夫よ、飛びっきりの助っ人……芽衣がいるから。私たちはすぐ其処の森の中に逃げ込めば芽衣の知り合いが安全な所へ送ってくれるわ」
「芽衣が!?……分かりました……」
さてと、私も仕事するかな……っていっても終わってるけど。兵士の視角、聴覚を操ってあの月人達がみている屋敷を無くして本物の屋敷は別の方向にあると見せておく。そして屋敷が壊れていくと同時に兵士達の叫び声とかを聞かせておけば勘違いするかな?少し時間が掛ったけど……
「それでは、私達を見た地上人を抹殺、及び重罪人、蓬莱山輝夜を確保を開始」
そして兵士たちは、屋敷とは別の方向に光線銃の様な物を発射し始めた。
帝からの兵士は何が起こっているか分からないみたいで慌てふためいている。
まぁ、いきなり隣の山が燃えたら驚くよね。

それとは別に輝夜を連れて行こうと兵士が輝夜に近寄る。
「おい、早くし……ろ……？」
兵士は気づくと弓で腹を撃ち抜かれて落ちて行った。
永琳が弓を放ったのだろう。というかそれ死んじゃう。
「貴様！何をしている！絶対に逃がすな!!」
「姫様！今の内に……」
「分かったわ」
輝夜と永琳は森の方に行ったみたいだね、それじゃ、私の出番かな！
「お前らっ！あいつらが逃げた所に攻撃を加えろっ！」
兵士たちは輝夜が逃げた森に銃を発射した。
だが、意味は無かった。なぜなら光線は森に向かわなかったからだ。
そして、光線銃を撃った兵士たちは全員、地上に落ちていった。
「お前ら！どうしたんだ！」
「無駄だよ」
「!?誰だお前は！」
「永琳の友人かな？」
「くそっ、誰だか知らんがこれでも喰らえ！」
兵士の中の隊長らしき人物は芽衣に向けて光線銃を撃った。
「だから、無駄だって。光線を操り貴方に返すよ」
芽衣が光線銃を操り最後の月人は地に堕ちた。
まぁ、全員月送りにするけどね。致命傷は避けといたし。
永琳に撃ち抜かれた兵士はっと……居た居た、死んでは……居ないみたいだね。
傷を治して……月に送り返しっと…。スキマは便利だね。ホント。
「さて、最後の仕事をしないとね」

輝夜が消えたその夜……
「くそっ！儂の輝夜が……」
輝夜の屋敷の一室で黄昏る不比等。其処に一人の女性が、
「大丈夫ですか？」
「まぁ、大丈夫だ。それよりもお主、中々美しいな……どうじゃ儂の嫁にならんか？」
「それは、それは、とても光栄です……」
女性は、不比等に近寄り頭を触った、
「む？なんｚ……あああああああああああああああああああああああああ」
「ちょっと、動かないで下さいね～」
その女性……いや芽衣は、不比等の頭に触り絶望などの感情を操り最大にした。
（これだと、自殺しちゃうかな？だったら自殺出来ない様に操っておまけで寿命を操って少し長く生きる様にしとこう）
「あ、あああ、ああ、あ、あ、あ、死に死、ああああああああああああああああ」
「……まぁ、これ位で許してあげるよ♪じゃあね」
そして芽衣は夜の暗闇に消えた。

翌日、京の町に月人を見た性で不比等は不治の病にかかったと知らされた。

妹紅が町で噂を聞き、頭を抱える。
「なんで……なんで、なんで……なんで!!」
妹紅は京の町で知らされた不比等が月人の性で不治の病に掛った

事を聞いた。
妹紅からすれば全て、輝夜の所為だと思い込むのは明らかだ。
「……そうだ……皆あの輝夜とかいう奴がいけないんだ…あの輝夜って奴が居なかったらお父様は……」
一人、欲望……いや復讐を果たそうと決意する……。

あの満月の日から二週間が経った某日。
一昨日、輝夜から渡された不老不死の薬を焼く為に登山隊が富士の山に向かった。
私の所に知らせを受けたのは一週間程前。何故、私に知らせが来たのかと言うと私に途中までの護衛を頼みに来ていたからだ。まぁ、念の為という事の様だが。
帝は輝夜が居なければ生きてる意味など無いと言い蓬莱の薬を燃やす決断をしたみたいだけど。
まぁ、暇もあってか私は護衛を承諾した。富士の山の現地集合と言う私の勝手な条件のうえで。
そういう事で私は登山隊より遅く出発する事にしていた。
何故ならこの都から富士の山の麓まで普通の人間ならそれで数日だからだ。
それと偶然に妹紅ちゃんが一昨日、家に帰ると急に言い出して朝早くに出て行った。
そんな偶然があるかな？いや、ないだろう（原作的に考えて）。
私が止める理由もないのでそのまま見送った。
十中八九、登山隊の後を追ったんだろうと思うけどね。
「まぁ、妹紅ちゃんがしたい事に私が何かを言う理由は無いんだけど。私はお姉ちゃんだしね」

ピー
私の言葉に反応したのかピィが不安気に鳴く。
「ピィはお留守番。大丈夫、妹紅ちゃんと一緒に必ず帰って来るから」
ピィ……
そうピィに言い町を出てから富士の山に向かい飛んで行く。
妹紅ちゃんは蓬莱の薬……というか壺目当てに向かったに違いない。
なら富士の山を登っている人達……登山隊が居ればその近くに妹紅ちゃんが居るに違いない。
なので私は富士の山の麓辺りで登山隊を待つ。
そうそう、一応退魔師という事なのでそれっぽい服を着て狐のお面を付けてる何となく。

数十分後、富士の山を登ろうとする登山隊が来た。
私はその登山隊のリーダー的人物、一応護衛の依頼なので確認を取る。
「おお、あんたが山に登る護衛をしてくれる退魔師の人だな。俺はこの登山隊のまとめ役の岩笠って奴だ。他の奴の紹介は頂上にでも」
「ええ、宜しく。依頼は護衛、貴方達に『危害』を加える者から守るという事で合ってますよね？」
私は『危害』という部分を強調してリーダーの岩笠さんに確認する。
それとこの登山隊の少し離れた後ろの方に人の気配がする。
今は隠れているけれど間違いなく妹紅ちゃんだ。私の事には気づいて居ない様子。
そして岩笠さんはこちらの方を向きながら眼だけを後ろに動かし、
「ああ、『危害』を加える奴から護衛してくれ」
「確認しました」
どうやら、この岩笠さんも妹紅ちゃんの事に気がついて居るみたいだ。他の人達も同様に。
岩笠さんも強調して言ったという事は『危害』を加えないなら放っ

ておいて良いって事かな。
普通に優しい人達みたいだね。それに……人付き合いが良さそうに見える。
それに「いざとなったら俺とこいつらが……」何かも言っている。

そうして私との自己紹介を終えると富士の山へと登って行く。
私もそれに続いて登る。殿、一番後ろは私。
私と登山隊が山へと登り始めるとその後ろでもこっそりと一定の距離を保ちながら追ってくる人物が居る確かに妹紅ちゃんだった。私の事を少し警戒している感じだったがそれでも追って付いて来る。
登りも後半になり八合目に差し掛かった所で後ろで誰かが倒れるというより座り込む音がした。
先程も言った通り、私が殿を勤めているので私の後ろで倒れる人は登山隊の人では無い。
倒れたのは妹紅ちゃんだ。無理もない。この年で富士の山を何の準備も無しに登れる筈がない。
それに岩笠さんも気づき妹紅ちゃんの所まで引き返し疲れ果てて座り込む妹紅ちゃんに水を渡す。
そうして妹紅ちゃんも加わり登山を再会した。
最後は殆どの兵士が他の兵士や妹紅ちゃんにも励ましの言葉を掛け合いながら山頂まで一気に登った。丁度、日も落ちかけて来ていた。夜までもう少しだろう。
そうして頂上に付き岩笠さんが皆を集めて休憩をした。
その時に妹紅ちゃんが岩笠さんに質問をした。
「何でこの山に登っていたの？」
どうやら妹紅ちゃんは何でこの山に私達が登っていたのかを知らない様だった。
それで此処まで頑張れる妹紅ちゃんはある意味凄いと思う。
「勅命だ。意味は……そうだなぁ……凄い偉い人が直接お願いをしたんだ。分かるか？嬢ちゃんは？」
「私は……山賊。それで貴方達を追っていたけど、とんだ失態をして

しまった」
　そう妹紅ちゃんは答える。壺を奪おうとしているならあながち間違ってはない。
「山賊？……あっはっはっはっはっは!!」
　岩笠さんが笑い始めるとそれに釣られて他の兵士達も一斉に笑い出す。
「いやぁ、お嬢ちゃんみたいな子が山賊なら俺は極悪人だな!!」
「違いねぇ！」
「お嬢ちゃんが山賊かぁ……それなら襲われても良かったかもな！」
「それはお前だけだ、この変態が！」
『あっははははっははは!!』
　と他の兵士達が雑談交じりに会話を盛り上げる。
　やっぱり感じた通りノリが良さそうな人達だ。
　そして少し落ち着くと岩笠さんが壺を担いでいた兵士に命令して壺を地面に置く。
　岩笠さんは壺に紐を結びつけ始めた。
　それを妹紅ちゃんは興味深そうに見ている。いや、不思議そうに見ている。
「何しようとしているの？」
「ん？紐を付けて遠くまで投げ飛ばし、壺を火口に入れて焼くんだ」
　岩笠さんと数人の兵士達が火口に近づいた時、火口から如何にも此処の神様ですよーな感じの女性が現れた。突然の出来事に兵士達は驚いた。中には「ふつくしい……」と声を出す人も。
「私は咲耶姫。木花咲耶姫（コノハナサクヤビメ）、この山の噴火を鎮める女神である」
　それに相対して、岩笠さんが一段と畏まり馴れない口調で事情を説明する。
「私は壺をこの霊力のある神の火で焼かなければならない。これは帝の勅命である」
　そう言うと、咲耶姫は軽蔑する様な何処か殺気を含ませた目で岩笠さんを見るとこう言った。
「その壺をこの山で焼かれてしまうと、火山はますます活動を活発に

し、私の力では手に負えなくなってしまうでしょう。その壺は神である私の力をも上回る力を持っています。貴方達はその壺に入っている物がどのような物なのか理解しているでしょうか？」
兵士達は沈黙する。がそれもひと時。沈黙を破るのは岩笠さん。
もう限界なのかいつもの感じで喋った。
「ああ、大体は分かる」
「ほう？それは何ですか？」
「蓬莱の薬。恐らく不老不死の薬だ」
「ええ、そうです。不老不死の薬です。ですが……他のお仲間達は知っているのでしょうか？」
咲耶姫は兵士達をぐるっと見渡す。
そして何人かが言葉を発する。
「不老不死の薬……噂で流れてたな。他にも成功の薬だとか天才の薬だとか」
「はっきり言って胡散臭すぎるだろ！」
「仮に本物だとしよう……それだけ凄い薬なんだ。きっと苦いだろうなぁ……」
「お前は薬が苦手な永遠の餓鬼だもんな！一生口に出来ねぇな！」
「馬鹿にすんじゃねぇ！な、舐めるぐらいは……やっぱ無理!!」
『あっはっはっはははっは!!』
シリアスな雰囲気が消えて相も変わらずノリが良い会話続く。
岩笠さんは予想通りな反応に満足したのか。咲耶姫に向き直る。
「でだ、この薬を燃やしたいんだが「なりません」……仕方ない。今日は此処で一晩越すとしよう」
そして焚き火をして岩笠さんはその火で壺を燃やそうとするが何故か火が付かないらしいので諦めた。いけると思ったのかがっくりと本気で項垂れる岩笠さんが其処には居た。
それを見てまた兵士達が会話を盛り上げ笑い転がる。
それと私に対して一通りの自己紹介をしてくれた。私は
妹紅ちゃんはそれを心底不思議そうに見つめていた。

夜、皆が寝静まった頃。月が雲に隠れたと同時に兵士達に近寄る者が居た。
そして何処からか出した炎を一人の兵士に当て……様として外した。
いや、外れた。
「危ない危ない。皆が寝静まった頃に暗殺ですか。怖い怖い」
「……」
その人物は何も喋らない。
そして雲に隠れていた月が見え辺りを照らし出す。
夜襲を掛けたのは女性。木花咲耶姫だった。
「神様が人間に対して夜襲ねぇ。面白い世の中になったもんだね」
兵士を助けたのは退魔師、依頼で雇われていた芽衣だ。
「退きなさい。貴方程度の人間が私、神に勝てるとでもお思いですか？」
「さぁ？やってみないと分からないよ～？」
「戯言を……」
そうして私は咲耶姫と朝までデスマッチをしていた。
隙さえあれば兵士達を狙う咲耶姫。本当に神なのかどうか疑うレベルで酷い。
私は基本、逃げと守りに専念して攻撃を一切行っていない。
咲耶姫はそれに苛立ちか怒りか朝になる時には無作為に攻撃を放っているだけだった。
そんな事が起こればそう、周りの地面が抉れてまるで無作為に耕した畑だった。
朝になり周りの異常事態に驚いた岩笠さんと兵士達と妹紅ちゃん。
というかあれほど寝てる体を動かしたりしたのに起きなかったのが凄いよね。
それほど疲れていたのかな？それとも咲耶姫が何かをしたかだね。
「どういう事だ……？退魔師の人……何が起こったか詳しく…」
「う～んと……敵襲？」

岩笠は敵襲の事についてかそれが起きても寝ていた自分にか汗がだらだらと流していた。
「もしかして……俺達が寝ている間、ずうっと？」
「大体は」
そう告げるとまた汗を流し、
「……助かった」
「いやいや、これが私の依頼だし？お礼を言われる理由は無いって」
「そう言われてもな俺には今、これしか出来ねぇ。本当に助かった。お前らも！」
『ありがとう!!姉ちゃん!!愛してる!!』
「……」
兵士達が私に向けてお礼とかその他を言っているその中で妹紅ちゃんが私の事をじっと見つめる。
「……もしかして……芽衣……お姉ちゃん？」
「あれ？ばれちゃった？」
妹紅ちゃんに正体がバレたので狐のお面を外していつもの服に戻る。着替え時間、僅か０．２秒。
それを不思議そうに見る岩笠さん。まぁ、そりゃそうだ。
「何で……此処に……？」
「知り合いか？」
「まぁね。義理の妹ってぐらい。それよりもどうします？岩笠さん？」
「……こんな所で襲撃が出来るのはアレぐらいだしな。そんなに嫌なのか……此処でこの薬を燃やされるのが」
ってそう言えばさっきまで攻撃を出鱈目に打ちまくって居たのに何処行ったんだろ。
「ええ、嫌ですよ」
……いきなり現れた。さっきよりも落ち着いた様子で。
「じゃあ、どうすれば良い？こいつは？俺は月に最も近い所で、この薬を燃やして来いと言われたんだ。ここより高い山があるなら是非教えて貰いたいものだね」

「ならば、良い場所があります。この山より北西へ向かうと八ヶ丘と呼ばれる醜い山があります。そこに私の姉が住んでいます。姉は不死、不変を扱う神ですから、供養して貰うには丁度良いでしょう」
　此処から北西……八ヶ丘……あれ？妖怪の山だね。
「はぁ？八ヶ丘？あそこじゃあ高さが足りないんだろう。この山に比べたら小さい」
　岩笠さんは呆れた様な表情を見せて落胆する。
「いいえ。実は昔は私の山より高かったのです」
「初耳だな、お前らは聞いた事あるか？」
「う～ん……ああ、確かぁ……『富士山と八ヶ岳の背くらべ』って言う民話があったと思います」
　兵士達の一人が思い出したかの様に答える。
「まじかよ……」
「……話を知っているなら話は早いです。山の格としては十分ですし、月までの距離はもしかしたらこの山よりも近いのかも知れません」
「ああ、分かった。じゃあ、さっさと下山して八ヶ丘に向かう計画でも立てよう。お前らー下山の準備だぁー！」
『うーす』
　格兵士達はテキパキと下山の準備を済ませて支度する。
　妹紅ちゃんは何が何だか良く分かって居ないみたいだ。
　咲耶姫は何時の間にか消えている。
　そして岩笠を先頭に下山していく。
「しっかしまぁ、面倒な事になったもんだ。富士の山登るだけで報酬が貰えると思ったら次は八ヶ丘だぁ？あそこは有名な妖怪の山じゃねぇか!!」
　どうやら岩笠さんも知っていた様だ。
「あ～あ、どうにかコレをなんとかしねぇとなぁ……」
「あの……」
「ん？」
　壺をじっと見ていた岩笠さんに妹紅ちゃんが話しかける。

「それ……良かったら私にくれませんか？」
「はぁ!?嬢ちゃん、これは遊びとかそんなんじゃあ「本気です」……」
兵士達がざわめき出す。妹紅ちゃんの目は本気と言っている。
「良いんじゃねぇすか？岩笠さん。此処で渡しちまえば楽になるっすよ」
「そうっすよ、娘さんの為にも此処は……」
「ぐぐぐ……」
「お願いします」
「んんん……ああっ!!分かった！ほれやるよ！俺達はしっかりとこの富士の山で薬を燃やした!!その後は何もしらねぇ!!良いな!!」
『うっす！』
そう言うと早足でさっさと下山をする岩笠さんと後の兵士達。その姿はもう豆粒程度だ。
妹紅ちゃんの本気さに精一杯答えた結果がアレなんだろう。
やっぱり優しい人だなぁと再認識させられる。
「……」
妹紅ちゃんは蓬莱の薬が入った壺を見てじっとしている。
「いいの？妹紅ちゃん。それを飲んだら不老不死だよ？」
「……うん。あの輝夜に復讐出来ればそれで良い……」
「……そう」
そして、私が見守る中、妹紅は蓬莱の薬を飲んだ。
次の瞬間、妹紅は喉を抑えてもがき苦しみだした。
髪は白く、眼は血走ったように赤く染まった。
数分間痛みを耐えていた妹紅だったがそのまま地面に崩れた。
「……」
「気絶してる……薬の影響かな？……じゃあ、帰ろうか」
芽衣は妹紅をおんぶして飛んで帰った。

京の町に付き自分の家に歩く。ただそれだけ。だが、

ざわ…ざわ…ざわ…
ざわ…ざわ…ざわ…

（なんか変に注目を浴びちゃってるな～。妹紅ちゃんの髪が白いからだと思うけど）
私は妹紅ちゃんの顔を見る。まだ気絶……というか寝ている。
『あの子……妖怪じゃないの？』
『忌み子だ……早く始末してくれよ……気味悪いなぁ』
『あの人は退魔士じゃないのか……？』
（聞こえな～い聞こえな～い……）
芽衣が数分して家に着いて妹紅を寝かせた。
ピィはちゃんと家で大人しく留守番してくれていた。
「……下手に弄ると怖いし寝かせたままにしとこう」
「……う……ん……」
「あれ？起きた、妹紅ちゃん？」
「あ……芽衣姉ちゃん……此処は……」
「此処は私の家だよ。それよりも妹紅ちゃん、体、大丈夫？」
「ん？……あれ？私……髪の毛が……それに……何か分からない力も……」
「ああー……それ妖力って言って妖怪が持ってる力の事だよ」
「え……じゃあ、私は……」
「う～ん、人間……じゃなくて蓬莱人だね。だから残念な事に此処にいる訳にはいかないんだよ。バッチリ目撃されちゃったからね。だから一つ提案。私と一緒に旅する？勿論ピィも一緒に」
ピー
まぁ、嫌だと言っても姉として無理矢理連れて行くけど。
「……うん、行く。だけど芽衣姉ちゃんは良いの？その……私みたいな……じ、人外と一緒にいて」
「う～ん、それを私に言うか。それに……私たちは家族でしょ？血は繋がっていないけど」
「……うん!!」

大きく頷く妹紅ちゃん。少しは元気付けられたかな？
「じゃあ、適当に旅でもしようか」
「行く当ては？」
「ん？無いよ？」
「……」
「旅は目的が無い方が楽しいからね。じゃあ、行こうか」
「う、うん！」
ピィー
二人は町から出る時、周りの目など気にしないで手を繋いで歩いて旅に出た。

その姿はまるで……親子…の様に見えた。

独り立ち

私と妹紅ちゃんが旅を初めて百年程経ち、その頃には日本一周を終えていた。
私は旅の間、妹紅ちゃんの心の精神をケアし続けた。
でももう変わった自分に対して物心を付けて妹紅ちゃんは自力で立ち直った。
それだけじゃない。私に力が欲しいと言って来たのでそれなりに妖術等を教えた。
今ではすっかり一人前の退治屋になっている。まだまだ危なっかしい所もあるけれど。
「さてと……これからどうしようかね～」
「そうですね～」
そう答える人物は癖っ毛のあるショートの髪型。服装はラフな格好をしている。
旅の人数は二人と一匹から三人へと変わった。
ピィが人間へと変わったからだ。いわゆる擬人化という奴。
能力もあるそうだから二倍の驚き。『天を操る程度の能力』だそうだ。カッコいいね。
「……芽衣姉が前に言っていた妖怪の山だっけか？其処に行ってみたいな私は」
妹紅ちゃんは薬の所為である一定の年齢で成長が止まっている。
それと私の呼び方もちょっと変わった。
「ん～？そうだね、妹紅ちゃんが行きたいなら行ってみようか」
「ちゃんはそろそろ止めてくれないか……？」
「う～ん、じゃあ妹紅」
「う……急に呼び捨てで呼ばれると恥ずかしいなぁ……」
そんな事を言っている妹紅ちゃん……いや、妹紅を見て私は妖怪の山行きのスキマを開く。
「さ、入って入って♪」

「……前にも入った事があるけどさ、何というか……この空間、不思議だよな」
「私は別に～明るくて綺麗だと思いますけどね～」
私のスキマの中は紫のとは違い、中で音符が飛び交っている。
その音符同士が当たると音が出る。私がカスタマイズした。
妹紅がスキマに入りそれに芽衣とピィも続く。
数歩スキマの中を歩き別のスキマから妖怪の山の山頂の洞窟前に出る。
「此処が妖怪の山だよ。八割方は天狗で占めてて……他にも色々居るよ」
「何だ此処、妖力が半端ないな……伊達に妖怪の山と呼ばれてる訳じゃないのな」
「何ですか此処～私は怖いので隠れてますね～というか妖怪多すぎです～天狗達だけじゃないんですか～？やだ～」
ピィはそう言うと鳥の姿に戻り私の髪の中に隠れた。
普通にくすぐったい。
「何か鬼でも出そうな雰囲気だな……」
「あ、大当たり。そうだよ、鬼が居るよ」
「……え？本当か？」
「本当本当。なので折角の機会だから鬼に会いに行こうか」
「でも鬼って確か昔に誰かが退治したって……」
「それ私だよ。退治と云うより懲らしめたの間違いかな？」
「本当に強いのな芽衣姉は」
「何を今更」
そんな雑談をしながら洞窟の中に入っていく私達。
此処に来るのも久しぶり！まぁ、今日は用事も有るしね。
「あれ？芽衣姉、あそこで酒飲んでるのって……」
「おや？人間……と妖怪かね？こんな所に珍しい」
そう言いながら酒を飲んでいるのは鬼の四天王こと星熊勇儀だ。
まだ今はお昼過ぎた辺りなんだけどなぁ……。いつも通りって感じだね。

「久しぶり勇儀。元気にしてた？」
「ん？誰かと思えば……芽衣じゃないか！どうしたんだい？」
「いや～、家の妹紅が妖怪の山にいる鬼と戦いたいって言うからさ」
当然ながら妹紅はそんな事は言っていない。
勇義も当然ながら嘘だと分かるが私が連れてきた人物。戦わずには居られないだろう……！。
「え!?ちょ、芽衣姉!?」
「ほう？それは面白い話じゃないか。なんなら私がその相手をしてあげるよ」
「あ！手加減は勿論必要無いからね」
「ふ、分かってるよ。あんたの連れだしね。私も本気でやらないとな」
そう言って盃を置き、準備運動を始める。
「ああ！もう！やってやる！」
計画通り、後は妹紅がどれだけ実践に対応出来るかだね。
この百年間、普通の妖怪退治（懲らしめてるだけ）で戦えはするけどこれと言って強い相手は居らず本気で戦えてはいない。今回は鬼相手なので妹紅も本気を出すでしょ。

妹紅ＶＳ勇儀

最初の攻撃を行ったのは勇義。その自慢の腕を唸らせ妹紅の頭を物理的に飛ばしに来る。
「最初から全開だよ！」
勇儀は力の余る限り拳を振るう。
妹紅は最初の一撃こそ躱したものの、直ぐに次の攻撃が来るので中々攻勢に出れないでいる。
「くっ……っこのっ……」
妹紅はその拳を見て避ける事で中には避けきれず受け流したりもしている。精一杯の様だ。
「おいおい、どうしたんだい？避けてるだけじゃあアタシは倒せないよっ！」

「がはっ！」
勇儀が放った一撃は妹紅は避けきれずに腹に直撃した。
妹紅は芽衣との組手を思い出し冷静に敵の攻撃に捌こうとしていた。
だが勇義の攻撃はそんなに簡単に捌ききれる物ではない。
勇義は鬼の力に加え速さがある。
「くそっ……こうなったら……『火の鳥　―鳳翼天翔―!!』」
「……へぇ…何だやれば出来るじゃないかい！だけど……私を倒すには火力がちっとばかし足りないねぇぇ!!」
妹紅は炎を身に纏い不死鳥の様に舞い勇儀に突撃する。
だがそれを勇義はそのまま受け止めて妹紅を壁に投げつける。
妹紅は何とか受身を取る。
「くっ！化け物めっ！」
(うん。そうだよね、キシが強すぎたんだよね。分かってた)
「どうすれば……」
妹紅は自分が出来る事を全て出し尽くしたと思っていた。
自分の最大の技、火の鳥　―鳳翼天翔―をぶつけて倒れなかったのだから。
そんな妹紅に私は一つのアドバイスをする。
「お～い、妹紅。あの技試してみなって！案外いけるかもよ？私が昨日、見せた奴」
「あ、あれを!?……わ、分かったよ!!」
「お、何だい。ま～だ出し惜しみしてたのかい。さっさと出しなよ」
勇義は相も変わらず余裕の表情を表している。
「ふぅ……」
それに対して妹紅は目を閉じ完全に脱力して精神を落ち着かせる。
そして……
「はぁぁぁぁぁ!!」
「！」
脱力した状態から一気に攻撃へと移る。

普通の正拳突き、だが強い力を持つ正拳突き。
勇義もその正拳突きに対して拳で返す。
拳と拳がぶつかった時、その攻撃の所為で地面が沈没し土煙が舞う。

「芽衣姉って……まじスパルタ……」
「そりゃ……大変だなぁ」

土煙が晴れると其処には二人が膝を付いていた。
妹紅の傷は片腕が消し飛んでいた。
勇義はあの一発で体中に傷が出来ていた。
妹紅がやった技はその気になれば誰だって出来る物だ。
自分の拳に全力を込める。夏に鳴くセミの様に。全力に。
普通の人はその力に耐え切れず腕が吹き飛ぶ。
いや、普通の人はそもそも腕に全力を込められないだろう。
使った後は酷く疲れ体が動かなくなる。正に諸刃の拳。
「っ!……いってええええええええ!!」
痛いで住むのが妹紅の良い所、普通の人なら確実に死ぬ。
私はあの技をやっても疲れはしないし腕も吹き飛ばない。
更に連続でやっても出来る。鍛え方が違うんだよ鍛え方が。
「まぁ、それはともかくお疲れさん♪良く頑張ったね」
「もう鬼とやるのは御免だ……」
「はぁ、今回は引き分けだねぇ……体中が痛くて敵わないよ……けど本当に芽衣の近くにいる奴は強者揃いだね。家の若い奴らにも見習わせてやりたいよ」
「ふふ、褒め言葉として受け取っておくよ」
「ははは、アタシは疲れたから少し寝るとするよ……また遊びに来なよ。今度は一緒に酒でも飲もう」
「そうだね、とびきりのお酒でも用意しといてよ」
「ああ」
勇儀はそう言い終えると洞窟の奥に消えて行った。

「さてと、ほら！妹紅。腕も再生した事だし帰るよ！」
「え？少し休ませ……「ほらほら頑張る」……分かったよ」

スキマを使い私の神社の近くの村辺りに着く。
「……私が妖怪の山に行きたいとは行ったけど……いきなり鬼と戦うなんて思いもしなかったよ」
「いや～運が悪かったんだね～（棒）」
「よく言うよ……」
そして芽衣達が村に入ろうとすると……
『……か…！……けて！……』
何処からか掠れた声で誰かを呼ぶ声が聞こえる。
それは村の方からでは無く、村の外から聞こえた。
「妹紅、誰かの声が聞こえない？」
「聞こえた……助けを求める様な声が……」
「じゃあ、助けに行こうか」
「ああ、っててて……」
妹紅は急いで助けに向かおうとはするが体が先の戦いの反動で思う様に動けない様だ。
「大丈夫？妹紅？手伝ってあげるよ」
「あ、ありがとう芽衣姉……って、へ？」
私は妹紅の首根っこを掴んで声が聞こえた方向へと投げ飛ばす。
妹紅を投げた方向に私も急いで向かう。途中で妹紅を抜かした様な気がするけど気の性。

（くぅ……いくら何でも妖怪が多すぎる……子供達を守りながらだと厳しいな……）
「先生！大丈夫!?」
「ああ、大丈夫だ。お前達は決して私の傍を離れるんじゃないぞ！」
だが、子供に気にかけた一瞬を妖怪は見逃さなかった。
『がああっ！』
「しまっ……」
バギィイン
ドゴォ！
「!?」
子供達を守ろうとする人物の目の前で私は音壁を作り妖怪の攻撃を防いだ。
そのまま横から私が投げ飛ばした妹紅が襲っていた妖怪に対してドロップキックを当てる。
おまけに完璧な着地だ！
「本当に無茶苦茶だな、芽衣姉」
「間に合った間に合った。さて反撃開始！妹紅はあの人達の所に行って守ってあげて。攻撃は私がするから」
「分かった」
「さて……始めようか」
まずは状況確認。
敵意がある妖怪の数は６匹程度。
そして妹紅に守られているのは……って、アレは……まぁ、いいか。人数は１０人程度。
まぁ、楽勝だね。知恵が無いみたいだし。
なので私はスキマからトンファーを出して攻撃に移る。
「トンファーキック！」
私は妖怪の一匹にキックを当てて飛ばす。

飛ばした先にもう一匹居て巻き添えを喰らいそのまま飛ばされる。
「トンファーラリアットー！」
攻撃をしようと飛びかかってきた妖怪二匹を腕で地面に叩きつける。
残った二人にはトンファーを投げて終了。楽な戦いだった。
「……それってそういう武器なのか？もっとこう……」
「ノリに決まってるでしょ」
「だ、だよな」
もっと効果的に使えるよ、トンファー十字固とかトンファータックルとか……。
「何が何だか分からないが助かった……」
「礼なら芽衣姉に言いなよ、殆ど芽衣姉がやったことだし」
「いやいや、礼なら妹紅に。それより、怪我はしてない？」
「はい、お陰様で。危ない所を助けて頂きありがとうございます。ほらお前たちも……」
「ありがとう！お姉ちゃん達！」「ありがとう、お姉さん達…」
「それにしても森の中まで何しに来てたの？」
「私は人里で寺小屋の先生をやっていたんだ。それで少し課外授業を……」
「ふ～ん。それにしても怪我が無くて良かったな。私は藤原妹紅」
「私は星羅芽衣だよ」
「申し遅れた。私は、上白沢慧音。さっきも言った通り先生をやっている」
「そうだ、妹紅。この子達を護衛のついでに人里に行きなよ」
「え？芽衣姉は？」
「ん？もう妹が鬼を倒せるぐらいになったから独り立ちなら十分かなと」
「……ああ、だからその為に鬼と」
「という事で……卒業記念として私の髪の中でのんびり寝てるピィあげるね。それじゃ！」
そのままピィを渡して私はスキマの中に入った。

「……あの人は一体？」
「あ～それは、歩きながらで話すよ。それよりも早く行こう」
「ああ」

「さてと、適当に隙間を開いたのはいいけど……此処って……」
目の前には、神社などと言うよりお寺という雰囲気……。
そして太陽がもう沈んでいたからかお寺からは、妖力が微かに感じる。
寺の前にある石柱にはこう書かれている。
【命蓮寺】
「……だよねー」
完全に運命力を持っている私だった。

命蓮寺＝妖怪寺，花

「まぁ、折角、命蓮寺に来たからには中に入ってみよう。そしてそのままお泊りでもしよう」
時刻は六時過ぎ。太陽が沈み暗闇で覆い尽くされるのも時間の問題だ。
なので私は原作キャラと会うのを目的にこの寺に泊まろうと思った。
まぁ、出来ればの話だけどね（お泊り）

境内に入ると時間も時間なので参拝客は数える程しか居らず関係者らしき人物も簡単に見つかった。
「あの、すいません」
「あ、はい。なんでしょう？」
その要旨は、金髪に紫のグラデーションが入ったロングウェーブに金の瞳。服装は白黒のゴスロリ風のドレス姿に表地が黒・裏地が赤のマントをはおり、黒いブーツをはいている。
（どうみても聖だね。まぁ、大体分かってだけど）
「夜分遅く申し訳ないのですが……私は旅をしている者で今日一泊こちらで泊めさせて貰っても大丈夫でしょうか？」
「ふむ……そうですね。では、一つ二つ程質問に答えて貰いますね」
「ええ、別に構いませんよ。それで質問とは？」
「一つ目、貴方は妖怪は全て悪だと言い切れますか？」
「いや、全然」
限りなく早く即答する。
私にとって妖怪が家族みたいなもんだし。妖精や人間？も居るけど。
「へぇ……」
まぁ、そりゃあ、こういう質問してくるってのは分かってた。
聖は少し驚いた様なそんな反応を示す。そして私は其処に畳み掛

ける！
「そうですね。普通は無理だと思いますが両者とも襲う気が無ければ相容れると思いますよ。それに……『人も妖怪も神も仏も全て同じ』だと私は思いますよ」
　ふふふ……聖の名言言っちゃった。まぁ、本当に思っている事だし別にいいよね。
「……質問に答えて下さりありがとうございます。それと貴方なら泊まっても大丈夫だと思います……」
「それはそれは、ありがとうございます」
「それでは、付いて来て下さい」
　そう言われ私は聖の後に付いて行く。
「それでは、まずこの寺に住んでいる者を紹介しますね。貴方なら大丈夫だと思いますけど、あんまり驚かないで下さいね。皆！」
　聖が声を出すと中から知っている顔が数人出てきた。
　そしてそれに合わせて今聖があっと思い出す素振りを見せる。
「あ！私の自己紹介を忘れてました。私は聖白蓮と申します。そしてこちらが……」
「寅丸星です。一応、毘沙門天の化身です。よろしくお願いします！」
「一応じゃないだろご主人……私はご主人の監視役のナズーリンだよろしく」
「私は雲居一輪。そしてこっちが雲山だよ。よろしくね」
「私は村紗水蜜！よろしく！」
　と一通りの挨拶が終わるが何故か私の後ろから気配がするのは気の性かな？
「ばぁっ!!」
「？」
　やっぱり気の性ではなく後ろから声が聞えたので後ろを向く。
　其処には室内なのに傘を持っている少女が驚かそうとしていた。
「ねぇねぇ！驚いた？驚いた？」
「あー……うん。驚いた驚いた。」
「やった～。ドッキリ大成功！」

「こらっ！小傘。ちゃんと挨拶しなさい」
「は～い。多々良小傘！よろしく！」
「私は星羅芽衣。旅人だよ。皆よろしくね」
　私が普通に自己紹介をすると不思議そうにナズーリンが質問を問いかける。
「……おや、全然動じないんだね。此処に居るのは殆どが妖怪だって分かっているだろう？」
「いや、いつもの光景だから……」
「いつも通り？という事は、君は妖怪と一緒に居たという事なのか？」
「う～ん。まぁ大体合ってる」
「それは中々興味深いな。じっくり聞かせてくれないか？」
「あ！私も聞きたい！」
「それより、まず皆でご飯ですよ。聞くのはその後ですよ、私も聞きたいので……」
「「「「は～い」」」」
　その後、何処を旅をしたのか。どんな妖怪と一緒にいたのか。どうしてそうなったのか。と色々聞かれた。正直話し疲れた……。もう日にちが変わる時間私は縁側で涼んでた。
「あぁ……涼しい……」
　私が縁側で涼みながら座っていると、奥から聖が歩いてきた。
「あら？まだ眠っていなかったのですか？」
「いや、少し涼んでただけだよ」
「ふふふ、あの子達。凄く面白そうで話に釘漬けでしたからね」
「私もあんなに熱中して聞いてくれて嬉しいよ」
「……今宵は月が綺麗ですね」
「そうだね」
「……」
「……」
「明日……」
「？」
「明日……私は封印されるかもしれません」

何てタイミングっ！どっかの吸血鬼が私の運命を操っているんじゃないかと疑うぐらいに……！

どっちかって言うと操ってるのは星月の方だと思うけど。

「……逃げる気はないの？」

「はい、此処で逃げたらあの子達に示しが付かないので」

「……明日……どうするつもりなの？」

「……話し合いたいと思います。それで駄目でも私は……抵抗しません」

「本気なんだね」

「はい、その時。多分ですが寅丸達は封印されないと思います。あれでも毘沙門天の化身ですから。だから私が封印された時。寅丸達を頼みます」

「それが聖の願い？」

「はい、一見した所。貴方は普通の旅人とは少し違うみたいですから」

「あはは、ばれてたか～」

「それでは、よろしくお願いします」

「うん、任せておいて」

……翌日、聖・一輪・村紗が封印された。私はただの旅人だと思われ何も無し。

寅丸とナズーリンは聖の言った通り毘沙門天の化身という事で無事。

ただ……寅丸が聖が封印されて自分がのうのうと寺に居られないと言い出し大変だった。

小傘はただの傘になってたから見つからずに退魔士から逃れたみたい。

それから数十年。寅丸には、寺として機能する様に色々と教えナズーリンは、寅丸が毎回無くす宝塔の早く見つける方法も教えて。小傘も手伝い。もう芽衣が居なくても寺として機能する事だろう。

聖達が封印されて一番に心が折れたのは寅丸だ。その心を能力で治すとその心に負担が多く出ると思い自力で治させた。ナズーリンが手伝ってくれたのが一番大きいだろう。
小傘も自分も本当は封印されるかもしれなかったからと言い寅丸達の手伝いを文句一つ言わず手伝った。
そしてある日……
「これなら、もう私が居なくても大丈夫かな」
「ぐすっ……本当に……お世話になりました……」
おいおい、泣かないでよ寅丸ちゃん。別に一生の別れって訳じゃないんだから。
「私からもお礼を言わせてもらうよ。君が居なかったら今頃どうなっていた事か……」
「いいって、聖からの頼みだったし」
「わ、私からもありがとうございました！もっと頑張って人を驚かせます！」
別にそれは頑張らなくても良いんじゃないかな？いや、小傘ちゃんだからそれが生きがいか。
「じゃあ、皆頑張ってね」
「「本当にありがとうございました!!」」

私は寅丸達に見送られて次の場所に向かった。
と言っても行く宛も無いし自分の家にこの前帰りそびれちゃったし……
「そろそろ自分の家にも顔を出して見ようかな」
次の目的地は自分の家。私はスキマを開き向かった。
其処で凄い事（あんまり意味は無い）が起こっているとも知らずに……

「前に来た時は妹紅のあれこれで神社に寄れなかったけど今回は真っ直ぐ家に帰るとしよう」
そう言いつつも隙間から既に抜けており何処となく懐かしい神社の前に着いた。
私の神社。この神社には鳥居が無い。その代わりに境内の中に入ると両脇には春には桜が夏には百日紅が秋には紅葉が冬には柊が咲き乱れる木がある。
そして神社の裏庭には、花壇と西行妖にも負けない大樹がある。
大樹は殆どがパウの住居として使われている。妖精は木の中や土の中に住んでいるんだそうだ。
後今は丁度、夏なので百日紅が両脇に咲いている。
(そういえば、キシに任せたままの花があったっけ。今なら彼処も向日葵がさいている頃かな)
私は神社の中に入らずに神社の裏庭に向かった。其処には芽衣の育てていた花達が咲く花壇がある。其処には予想通り向日葵が咲き乱れていて。其処には懐かしい人物がいた。
「あ!キシ!久ぶ……り?」
そしてもう一人は見慣れない人物がいた。
「お嬢様、お帰りなさいませ。突然で申し訳ありませんがこの方に見覚えはございますか?」
そう言いキシはもう一人の人物の方に向く。
其処には癖のある緑の髪に、真紅の瞳。白のカッターシャツとチェックが入った赤のロングスカートを着用し、その上から同じくチェック柄のベストを羽織っている。
どう考えてもゆうかりんです。本当に(ｙｒ
「……まぁ、一応知ってるよ」
「なら話が早いですね。この方がこの花を育て始めた人は何処に……と言うので……」
「そう、分かった。キシは中に入ってて」
「畏まりました」
私に言われキシは家の中に入って行った。

「それで……季節事に花を求めて歩くと言われている風見幽香さんは何の用でしょうか？」
「私の事を…知っているのね……何て事は無いわ…この花達がさっきの男の人の事や貴方の事をとても良く言っているから少し気になっただけよ。それに……」
「それに？」
「この神社にいる。最強の人間に会いに来たのよ」
ざわっ……
その言動を放って幽香は妖力を放出する。
それに伴い先程まで穏やかだった空気が一変し殺気溢れる空間に早変わりした（主にゆうかりんの所為で）
「貴方がそうなんでしょ？一つ手合せ願えないかしら？私は風見幽香……普通の花妖怪よ」
幽香が笑顔で戦闘態勢を取っている。これ断ってもそのまま戦う事になるよね。
「まぁ別にいいよ、どうせ暇だし。私は星羅芽衣。何処にでもいるしがない人間だよ」
私もやる気は無いが一応戦う感じで。

場所を裏庭から移し神社前
「さぁ、いきなりで悪いけど終わらせるわ！喰らいなさいっ!!」
ゴオオオオオオオオオオッッ!!!!
芽衣に向かって幽香が放った二本の太い光線が襲い掛かる。
「え!?いきなり!?でもね！そんなんじゃ、私は倒せないよ!!」
「なっ！……私の攻撃を操っている!?」
幽香は攻撃を避けるとは思ってはいたけれど『操る』なんて思いもしなかった。
だが芽衣は光線を『操った』。操られた光線は軌道を変え幽香に向

かい当たる。
　幽香も当たらぬ様に避けたが避けた場所に追尾されては避けようがない。だが、
「ぁあああああっ!!」
　幽香は光線をとっさに傘でガードしてなんとか直撃を免れた。
　そのビームの威力で傘はボロボロになり使い物にならなくなる。
「くっ……はぁ、はぁ…遠距離が駄目なら近距離で倒すのみっ！」
　幽香は芽衣に近づき殴りかかる。
　それを芽衣は……
「よっ、ほっ、やっ」
「なんでっ！なんで当たらないの!!」
「いや、私に言われてもね。普通に当たったら痛いから受け流してるの」
「貴方もっ！本気を出して攻撃してきなさいよ!!」
「ん～？じゃあ、新技を披露するね！」
「!?……くっ……」
　芽衣は、幽香を突き飛ばすとすぐさまスキマから本を取り出す。
　そして芽衣は本を開きページを二枚破った。
≪魔法発動…『停止世界ＬＥＶＥＬ３』≫
≪魔法発動…『煉獄炎塔ＬＥＶＥＬ３』≫
　そう、芽衣の前に表示される。
　そして幽香の周りに周りに魔法陣が浮かび上がりそれが幽香を高速する。
「何!?動けないっ！」
　そして、下に魔法陣が展開され其処から炎が出て幽香を巻き込み塔の形をした煉獄が完成した。
≪解除≫
　数秒後。芽衣は術を解除して幽香を見る。
「……やばい、火力の調整間違ったかも」
　幽香は死んではいないが見るからに重症だ。
「十段階の三段階目だったらこんなもんかな。まぁ、５００℃は有っ

たかもしれないけど」
　芽衣が持っている本…いや魔道書は芽衣の手書きだ。この本のページを破るとそれに書いてある術が発動する様になっている。念じれば簡単に解除出来る。そうして芽衣はすぐに解除した。
　ページ数はざっと見て数千だ。芽衣により小型化されているので携帯している事も出来る。
　それにページを破っても術が終われば元に戻る。
　これを使うには芽衣自身の霊力・妖力・神力・魔力のいずれかを消費して使う事が出来る。
　さっき使った技は、普通の人間が持っている霊力の二倍程度。消費量が明らかにおかしい。
「いつも通り、傷を『操って』治して。寝かせて置こうっと」
　芽衣は幽香を担いで家の中に入る。
「おや、お嬢様。外が騒がしかったですがそちらの方を見る限りまた何かされていたのですか？」
「手合せをしたいって言ったから少し手合わせしただけだよ」
「そうですか。その方は私が寝室に運んでおきますね。それよりも久しぶりに帰って来たのですからゆっくりして行って下さい」
「うん。そうするよ」
　私が居間で幽香の傘を修理したりついでにスキマの中を整理していると、
「ただいまです！むっ？これは……母上の感じ！母上～！」
　そんな声が聞こえて居間に飛び込んで来た。
　其処には相変わらず白黒の巫女服を着ている。
「久しぶりだね、詩音」
「はい！本当に久しぶりです！今度は何処に行って来たんですか！聞かせて下さい！」
「ん～そうだね。じゃあ、最初から話そうか」

「やっぱり、凄いですね。母上は」
「そうかな？」
「そうですよ！一日会っただけの人の為に数十年も費やせる事、中々出来ないですよ」
う～ん。まぁ普通の人はそうだけど私は違うからな～。感覚が麻痺してるのかな。
「お嬢様。ご夕飯が出来ましたのであのお客の方を起こして来てくれませんか？」
「分かったよ」
「それと詩音。料理を運ぶから手伝いなさい」
「は～い」
そういえば幽香はまだ寝てるのかな？
「お～い、幽香～起きてる～？」
「……起きてるわよ」
「良かった。ご飯が出来たから一緒に食べようよ」
「ええ、頂くわ」
そう言い幽香は気怠そうに立ち上がる
「それと、貴方……私の傷を治したの？」
「？…そうだよ、それがどうしたの？」
「いえ、お人よしだと思ってね」
「良く言われるよ」
「でしょうね」
「あはは」
「ふふふ」
「ほら、行こう。私の家族を紹介するよ」
「分かったわ」
芽衣と幽香はお互いに信頼し合えた様に感じる。
その後、皆で食卓を久しぶりに囲んだ芽衣は懐かしながら食べていて誰かと一緒に食べるという事を知らなかった幽香は少し嬉しそうに食べていた。

早朝、まだ4時も回らない頃
「あれ？もう行くの？」
「あら、起きていたのね。ええ、また各地の花を探して歩くわ」
「またいつでも遊びにおいでよ、それと昨日壊しちゃった傘直しておいたよ」
それも特別頑丈に。多分月が落ちてきてそれを受けても耐えられる。
「近くに来たらそうするわ、それと傘ありがとね」
「いやいや、私が壊しちゃったからね」
「それじゃまた会いましょう」
「うん、また会おうね～」

妖怪の山

妖怪の山。其処はその名の通り妖怪の住んでいる山。
鬼の鬼神を筆頭に社会が成り立っている。
強さで表せば、鬼神〉鬼の四天王〉天魔〉その他鬼〉天狗の幹部〉その他天狗という風になる。
そして最近、天狗に鴉天狗で生意気な新参が入って来たらしい。ソースは詩音。
私は鬼と酒を飲む約束のついでに確かめに行く。
「という訳でキシ。妖怪の山に行こうよ」
「何がという訳なのか分かりませんが。お付き合いさせて頂きます」
私はこの地を少しでも理解する為スキマを使わず歩きで行く事になった。
私が居ない間に大分、変わったというのが大きな理由。
「それでは此処から妖怪の山に行くには人里を通って行く事になりますが宜しいですか？」
「別に大丈夫だよ。距離とかは流石に変わってないでしょ」
「ええ、歩いて数十分ぐらいですね。昔と変わりません」
「それじゃ、妖怪の山に行く途中に寄ってみたい所があるからそっちも案内お願いね」
「畏まりました」
私とキシは人里に向けて歩き出した。

閑話休題

「そういやキシってさ。人型の時と蜘蛛型の時があるけどどっちが強いの？」
「人型の方が確かに動きやすいですが蜘蛛の時の方が力が強いですね。体格の問題でしょうけど。ですが力が強いだけですから純粋に

強いのは人間の姿をしている時でしょう」
「へ～……あ、そう言えばキシにアレ渡してなかったっけ」
「アレとは？」
「これだよ」
　芽衣がスキマからイヤホンの様な物を取り出した。
「これは何ですか？」
「遠隔通信装置。まぁはっきり言うと遠くの人と会話が出来る様になるんだよ。使い方はこれに、キシだったら妖力を流し込めば私が何処にいても会話が出来る様になるよ。詩音にも渡して置いて」
「分かりました。それとお嬢様。見えてきましたよ人里が」
「本当だ～前来た時より幾分発達してるね」
「年月の積み重ねというやつです。そういえばお嬢様。寄りたい所があると仰っていましたが…」
「そうそう、それでさ。寺小屋って言う所知ってる？」
「ええ、知っております。其処でよろしいのですか？」
「うん。多分だけど其処にあの子がいると思うから」
「？……それではこちらの道へ」
「はいは～い」
　キシに案内されて寺小屋に無事辿り着けた。
　途中、八百屋の様な店の主人に『お、キシさん。今回は何をお探しで？』みたいな事を言われていた。その他の店でも同じ感じだ。随分、顔馴染みが多いな～と思ったけどそりゃ数百年も此処に通い続けてるから嫌でも顔馴染みになるよね、そりゃ。
「お嬢様、此処が寺小屋です」
「へー……子供達が外で遊んでいるって事は休み時間なのかな？」
「恐らくそうでしょう」
「おや？誰かと思えばキシさんじゃないか」
　私達が寺小屋の前で立っていると長身の女性が中から出てきた。
　容姿は腰まで届こうかというまで長い、青のメッシュが入った銀髪。頭には頂に赤いリボンをつけ、六面体と三角錐の間に板を挟んだような形の青い帽子を乗せている。

「こんにちは、慧音さん。調子はどうですか？」
「毎日大変だけど良い事もありますから、調子はいい方ですね」
「そうですか、それなら良かったです」
「それで、そちらさんは？見かけない顔だが……」
覚えてないのは無理ないよね。出会って数分で消えたしね。
「お～い、慧音。遊びにきたぞ～って芽衣姉!!」
「あ、妹紅。久しぶり」
「ん？妹紅かこの方を知っているのか？」
「知ってるも何も、私達が出会った時いたでしょ！」
「？……って、あの時の人か!!」
今更だね～というか妹紅…タイミング良すぎだね。
「お嬢様？知り合いでしたか？」
「まぁ、一人は義理の妹だからね～血縁関係は無いけど。もう一人は妖怪に襲われてたから助けただけだよ。」
「本当にお人好しですね」
「言われなくても分かってるよ～」
「え？貴方は私の昔の命の恩人でそして妹紅の姉でもありキシさんの上の立場??あ、頭がついていけん……」
「諦めろ慧音。この人には何もかも勝てない」
妹紅は当然の如く察して慧音を助ける。
けど何もかも勝てないは言い過ぎじゃ……いや、言い過ぎじゃない？
……おっとこんな事で四苦八苦してないで妖怪の山へ行かないと、人里は大体これでいいかな。
「まぁ、今日はふらっと寄っただけだから、また今度ゆっくり話し合おうね。それじゃ」
「失礼いたします」
「あ、ああ。また」
「じゃあな」
私とキシは寺小屋を後にした。

「お嬢様は本当に顔が広いですね」
「顔と情報は多ければ多いほど良くて面白いからね」
「それもそうですね。っと着きましたよ。妖怪の山へ」
「……何か空気が重いな～」
「そうですね、侵入者を忌み嫌っている感じがとても出ていますね」
まぁ、そんなのは関係無しに進みますけどね～
そうして私とキシが丁度、山の半分まで進んで来た所で、
「おっと其処の人、待ちなさい」
背中の羽を見る限り天狗の様だ。だが何処か普通の天狗と違う。
というかこの天狗……
「……誰？それと何か用なの？」
「おや、人間風情が天狗に質問ですか……まぁいいでしょう。私は清く正しい射命丸文。鴉天狗ですよ。用があるのか？とはこちらのセリフです。わざわざこの山に何の用ですか？」
「……（人間風情が？）」
やっぱり噂の鴉天狗って文の事だったんだね。
鴉天狗は中々居ないからもしかしてって思ったけど……やっぱりそうだよね。
というか隣に居るキシが殺意を我慢してる。多分お怒りなんですけど……
「い、いや、少し鬼に会いに来ただけだけど？」
「……は？……私の聞き間違いかも知れませんのでもう一度いいですか？」
「だから、鬼に会いに来たって言ってるんだよ」
「……あ……あやややややややっ！貴方は何をっ！」
「え？」
「鬼に会いに来たですって!?私でも普通の鬼の足元にも及ばないと言うのに…あやややっ！」
「それで、通っていいの？」

「くふふ……その度胸に免じて鬼のいる所まで送ってあげますよ」
「……まぁ、ありがと」
「……（必ず殺すお嬢様を侮辱した事は忘れんぞ）」
キシが耐えた！怒りを露にせずに抑えた！
けど何か嫌な予感がするから帰ったらケアしよう、必ず。

「はい、着きましたよ。此処が鬼の居る所です」
「あ、うん。ありがと」
何回も見た事のある洞窟前に私達は文に案内されて着いた。
「それでは、ご武運を……あっ最後に写真撮らせてもらいますね！鬼に会う勇気ある（哀れな）人間として！」
そう言って文は写真を何枚か撮り飛び去って行った。
何か勘違いされてた様な気がめちゃくちゃする……。
「……それでお嬢様。此処にまた何の用が有って来たんですか？」
キシが喋った！文が居る時一切喋らなかったキシが！
……何でそういやここまで怒ってたんだろ、後で聞いてみよ。
「えーと……鬼から今度お酒を飲もうって言われたから約束を果たしに来たんだよ。鬼は約束に敏感だからね。まぁ、今回は多分、戦う事も無いし大丈夫でしょ……鬼が酔っぱらって襲って来ない限り」
「そう願いたいものですね…」
そんな些細な願いを口にして洞窟の中に入る芽衣とキシ。
其処は、いつもより鬼が居座っていた。
『あ？何だお前ら？』
『人間が何しに来た！』
『此処に何の用だ！』
何か感じが悪いね。嫌な予感がする。
「此処にいる。四天王か鬼神に会いに来たんだけど……」
「はっ、人間に会わせるなんて出来ないな。そんな事なら俺を倒して

から言いなっ!!」
そう言い私に殴りかかる鬼1。ですよね～。
だが、
ドゴぉ!
そんな音を出しながら私に殴りかかって来た鬼は山の方へと吹っ飛んだ。
「何いきなり突っかかってんだいお前らっ!」
『『『姉御っ!!』』』
私に鬼1が殴りかかる直前。
見たことのある盃を持ちながら私の目の前にいた鬼を吹っ飛ばした鬼が其処に立っていた。
「私の客に何してんだい」
「お久しぶり、勇儀」
「ふ、今日は飲みに来たのかい?」
「うん、そうだよ。約束通りね」
「鬼は約束が好きだからねえ。もう一人は私と戦った奴じゃないかい!久しぶりだねぇ。それじゃあ!お前ら!酒をあるだけ持ってきな!!」
『『『うぃっす!!』』』
「今日は宴だあああああっ!!」
『『『おおおおおおおおおおおおおおおおおお!!』』』
本当……騒がしいったらありゃしないな～鬼達は。
飽きなくて面白いから良いんだけど。

宴が始まって数時間後
「……くぅ……もう…駄目だぁ…」
「もう…飲めにゃい～………」

「いや～鬼のお酒って中々美味しいね」
「全くですね」
え？今何をしているのかって？勇儀＆萃香と飲み比べしている。
私ってある一定の所までは酔えるんだけど其処からは酔えないんだよね。
例えばほろ酔い状態で普通の人がお酒を飲むと酩酊になる。
けど私はほろ酔いのままそれ以上酔わない。
キシもそういう体質の様で鬼二人が完全敗北した。

「ほう、あの勇儀と萃香が飲み負けたか」
「あ、鬼神！久しぶり～」
「鬼神はやめよ。私の名前は叶（かない）だよ」
「へぇ～それよりも私と飲み比べをする？」
「いや、遠慮するよ。お前が飲んだ量の半分で限界だからね」
「という事は、勇儀達の三倍ぐらいしか飲めないって事じゃん」
「充分、化け物じみてると思うのじゃが…」
「まぁ、宴は長いし限界に挑戦してみれば？」
「それもそうじゃな」
こうして宴は一日中続いた。最後まで飲んでいたのは芽衣とキシだけだったそうだが。

白玉楼の庭師と主と桜

「え？友人？」
「そうよ、貴方に紹介しようと思ってね」
とある日の晴れ。
久しぶりに紫が遊びに来たと思ったらいきなりこんな事を言われた。
「私の友人を紹介したいから付いて来て」
「どうして私に？」
「……い、一応、私の友人だからよ……は、恥ずかしい事言わせないでよ！」
「へ～」
「い、いいから！行くわよ！」
「いいけど……何処に？」
紫の友人って博麗の巫女ちゃんか幽々子しか居ないと思うけど……
「冥界よ」
ですよね。分かってた。
「という事は白玉楼にでも行くのかな？」
「……なんで貴方が知っているのよ。また心を読んだのかしら？それとも行った事があるのかしら？」
「どっちでしょうね～」
「……本当、貴方は考えている事が分からないわ」
「私にとっては褒め言葉だよ」
「それじゃあ行きましょう」
「はいは～い」
私は紫の隙間の中に入り案内される。そして何処かに……そう階段の前に落とされた。
「紫～此処は？」
「其処は白玉楼へ続く階段よ。私は先に行っているから頑張って上っ

て頂戴。それじゃ」
そう言い紫は隙間を閉じた。
私を友人に会わせたいのか会わせたくないのか分かんないよ。
「まぁ、地道（本気）で上ろうかな」
さて、何秒で着くかなっと。

～少女全力疾走中～

「良し！6秒7。短距離走ぐらいで終わったね」
私が全力で階段を上り大きい門の所まで着いた。
……これ、開けてもいいのかな？
なんか扉の向こうに出待ちしている人？がいるんだけど…
「まぁ、挨拶は必要だよね」
芽衣は扉に近づき扉を叩く。

ドンッ！ドンッ！

「すいませ～ん。此処、開けて貰えませんか～」

……
返事が無い、ただの扉の様だ。
じゃなくて……開けていいのかな？
まぁ、いいか。
「それじゃあ、おっじゃまっしま～す!!」

バッゴオオオオオオオオオオン!!!

芽衣は扉を思い切り殴り無理やり力で開門させた。
「!?……騒がしい侵入者だな…」
「いるなら返事ぐらいしたらどうなんですか?」
「侵入者に誰が返事をするものか」
「……へ～それは勉強になりました。じゃあ、そういうことで」
「待たんか」
ヒュン
パシッ
芽衣が脇を通ろうとすると腰にある刀を抜き、躊躇無く芽衣に向けて振った。
だが芽衣もそれをガードした。
「危ないじゃないですか。白刃取りをしていなかったら普通は致命傷ですよ?」
「侵入者には十分だろう」
「わ～た～し～は、紫に誘われて来たんだってば。侵入者じゃないの。お客なの!」
「……信用できないな。それほど通りたければ儂を倒してみろ」
「……仕方無いな～お爺ちゃんを苛める趣味は無いんだけどな～」
まぁ、此処は余興として少し相手と合わせて戦ってみようかな。
確か隙間の中に良い刀があった様な気がしたんだけどな～ってあったあった。これこれ。
「ほう…中々良い刀の様じゃの」
「ありがとね～」
私の刀は超でかい。というより剣だけどね。両刃の。
「まぁ、ある物を参考にして打ったんだけどね。この刀は退魔ノ剣。そして私は星羅芽衣。旅人だよ。ふふふ、さぁ尋常に」
「……面白い。わざわざ儂と剣術で戦おうと言うのか……いいだろう。儂は魂魄妖忌。此処の庭師だ。それでは……いざ尋常にっ!」
「「勝負ッ!!」」
その言葉と共に私は巨大な剣を真横に振るう。
「いくよっ!それっ!」

「っ！……」
キンっ！
その斬撃を受け流し私にカウンターをしかける妖忌お爺ちゃん。
「おっと、掠る所だった」
「何故あの体制から掠りもしないのだ」
そうして斬撃を躱し流し避けてぬらりくらりと両方の刃が相手に届かずに時間が過ぎる。
「(何だこの動きは……何かの流派に習い振り下ろしている訳でも無く。これといって癖が無い……だが太刀筋がしっかりしており隙が無い。どういう事だ？我流ならばここまでキレのある動きが出来る筈が無い…)」
「どうしたの？考え事？」
「お主…何処かで流派を学んだのか？それとも我流か？」
「……強いて言うなら両方。かな？」
だって私がやっているのは見様見真似の剣術だしね。伊達に長く生きてない。
「お主…他の流派を複数混ぜお主自身の流派も入れておるじゃろう？」
「だいたい合ってるかもね」
「ふむ……興味が沸いてきた。このまま数日斬り合うのも悪くない……が、いいだろう。お主を幽々子様の所へ案内してやる」
そういい妖忌は刀を下げた。
私もそれを見て剣をスキマに戻す。
「どうして、また急に何か理由でもあるの？」
「そうだな、お主からは殺意や悪意というものが見つからなかった。それだけで理由は充分じゃ」
「それはどうも」
「それと此処からはいつ死んでもおかしくない領域になるからな。気をつけるがいい」
「？……ああ、そういうこと。分かりましたよ～」
『死んでもおかしくない領域』って西行妖の事と幽々子の事、どっちも

だろうけど私はそう簡単に死なないしね。
「あ、そういえば妖忌って『歌聖』っていう人は知ってる？」
「!?……いや知らないな」
「……そう」
幽々子の父親の事何だけど、後でもう一回言おうっと。
「それよりも着いたぞ、此処が幽々子様のいるお屋敷だ」
「へ～此処が……！」
おっと、危ない。
「如何した？」
「いや、何でもないよ」
「そうか、なら儂はお茶でも用意するかの。幽々子様の友人、紫様も来ておられるのなら尚更。幽々子様は縁側に居る筈だ。家の周りを歩いていれば見つかるだろう」
そう言い妖忌は屋敷の中に入って行った。私は妖忌お爺ちゃんの言う通り屋敷の周りを歩き縁側を探している。
それにしてもあれが『死に誘う程度の能力』か……あれは危ないね普通の人が近づいたら余裕で死ねる。
まぁ、そんな事は置いといて紫を探そう。
いっそ、ゆっかり～んて大きな声で呼ぼうかな。

家の周りを歩くこと数分。
「あ、意外に早かったのね芽衣」
「おやおや、腰にダメージが入るからと言ってスキマで移動した紫さんじゃないですか」
「……喧嘩を売っているのかしら？（ピキピキ）」
「私はいつでも大安売りだよ？」
「はぁ、まぁ、いいわ。それよりも紹介するわ。この子が幽々子よ」
「ど～も、初めまして。西行寺幽々子と申します」
「ど～も、初めまして。星羅芽衣と申します」
「何、口調を真似してるのよ。貴方は」
「何となく」

「あの～早速で悪いんですけど私と友達になってくれませんか？」
「私は構わないけど？」
「じゃあ、これからよろしくお願いします～」
　やったね、幽々子と友達になった。
「幽々子様。お茶と菓子を持って参りました」
「あら、妖忌。気が利くじゃない」
「それじゃ、お茶会としましょうか」
　お茶会をしている時、私は妖忌にどんな流派を知っているのかと聞かれたので色々と言ってみたが、私が総勢数十とも言える流派を話したので妖忌はいつかは旅をしたいと言っていた。
　そして……
「幽々子、そういえば前来た時には話題にしなかったけどあそこにある桜。随分、嫌な感じがするんだけれど」
「ああ、あれ。あれは西行妖と言われていてね。人の生気を吸うんですって」
「へぇ～面白そうね」
「いや、私はあまり面白くないと思うけどな」
「どうして？」
「あれは、普通の桜ではないよ。言うならば妖怪桜。あれからは妖力が大量に感じられる。あれが満開になると大変な事になると思う」
「あの桜は数年の間、満開になっていないわよ？」
「だからこそだよ。幽々子。溜めに溜まった妖力が一気に放出されれば……」
「大惨事になるわね……」
「それと妖忌」
「何だ？」
「『歌聖』」
「!!」
「私に隠し事は意味を成さないよ」
　まぁ、知っているだけなんだけどね。そして出来るだけ幽々子に聞こえない様に話す。

「あの桜。満開になる度に人が死んでいるでしょ？最初は歌聖。そして歌聖を慕っていた者達も後を追うように死んでいった。違う？」
「……その通りだ」
「そしてもう残りは……」
「幽々子様……」
「ちょ、ちょっと待ってよ。いきなり何の話をしているの!?幽々子がどうしたっていうの!?」
「紫…幽々子を助ける為にあの桜を封印するしかないんだよ」
「それなら、早そｋ」
「だけど矛盾するんだよ」
「……どういうこと？」
「あの桜を封印する為には何かを媒体にして封印するしか無いんだよ」
「……まさか」
「そう。幽々子の体が必要なんだよ」
「!?」
「幽々子を助ける為には西行妖を封印するしかない。だけど封印するには幽々子の体が必要。言ってる意味……分かる？」
「……この話はもうやめましょ。今、満開になるとは限らないじゃない。それなｒ」
「まぁ、今は満開にならないかもしれないけど……何かを切っ掛けに満開になるかもしれないよ」
「……」
「あくまで可能性のお話だよ」
「……気分が悪くなったわ。先に帰らせて貰うわ。じゃあね幽々子」
「？何の話をしていたのか分からないけど、またね～」
紫は心底、気分が悪そうにして帰って行く。
妖忌も随分、悲しい表情になっている。
「じゃあ、私も帰るね。また会おうね幽々子」
「ええ、また会いましょう」

芽衣はそう言い残し帰って行った。

幽々子が芽衣と出会い数日後……
「あれ？どうしたの紫？そんな顔して」
朝、裏庭で花に水をあげていると隙間が開き紫が険しい表情で出てきた。
「……少し付いて来て……」
「何々？何処か行くの？」
私は紫の隙間に入りある場所に連れてかれた。
其処にはとても美しく残酷な光景が広がっていた。
頭上からは桜が降り注ぎ目の前では西行寺幽々子が死んでいた。
西行妖からはとても多い妖力が発散されていた。
「紫……これどういう事？」
「……朝、幽々子の家に来たら……幽々子が自殺していた……西行妖が…満開になっていたわ」
「……」
「……」
言葉が止まる。一秒がとても長く感じられた。
「……ねぇ……これは貴方がやったの？」
「やる訳無いでしょ！」
「っ!?」
私はそれを完全否定するように言い切る。
こんなことをする訳がないから。
「あーごめん。ちょっと大きい声出しちゃった」
「いえ、私が悪かったわ。ちょっと気が動転して馬鹿になってたわ。ごめんなさい」

紫は頭を下げて謝る。
「……紫……この桜を封印するよ」
「……ええ、勿論よ。こんな桜さっさと封印しましょう」
そして私はこの桜を封印するべく歌を歌う。
「芽衣？何をしているの？」
「（封印の儀式、私なりの）」
「（直接脳内に!?）」
「（少し聴いててね）」
「（……分かったわ）」
そして芽衣は歌い続けた。桜を封印する為に。
「（凄く綺麗で美しい声……だけど……なぜか涙が……）」

そして西行妖は封印された。芽衣の歌によって。
「紫……幽々子の体はこの桜に埋めて」
「分かったわ」
紫は素手で地面を掘り幽々子の体を埋めた。
「これで……幽々子も少しは……」
「そうだと良いね」
私と紫はその日を白玉楼で一晩を過ごした。

そして翌朝。
「……あーそういえば白玉楼に泊まったんだっけ。顔洗ってこよう」
私は顔を洗いに井戸を探す。
「あれ？確かここ等辺に……ってあれ？縁側に誰か座っているな～紫？いや、あれって……」

「＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿という事で頼みましたよ。西行寺幽々子」
「勿論よ～」
「……やっぱり幽々子なのね」
「あら？貴方はだ～れ？私の事を知ってるの？」
「おや？誰かと思えば、星ｒ」
「ああ、うん。ちょっと待ってて」
　芽衣は寝坊助さんの紫を呼ぶ。
「お～い。ゆかり～。ちょっと来て～」
「…何よ……朝から騒がしい……ん？その人は誰？って、え？え？幽々子？え？」
「まだ寝ぼけてるの？」
「失礼ねっ!!……本当に幽々子なの？」
「見たまんま、でも」
「あら、貴方も私の事を知っているの？」
「!?」
「記憶を失ってるよ。まぁ、それについてはさっきからスルーしてた目の前にいる閻魔様に聞けばいいんじゃない？」
　幽々子の隣には髪は緑色で、身長は子供のそれに近い。
「……何か変な事を思われた気がしますが、まぁいいでしょう。それでは、貴方方にも説明します。今、此処にいる西行寺幽々子は生前の西行寺幽々子とは別です。記憶が無いだけです」
「ど、どうして記憶が無いのよ!!」
「それは『能力』の問題です。能力と魂は深い関係を持っています。彼女の能力が別の物に変わった性で魂にも干渉したんでしょうね」
「例えばどんな？」
「生前は『死に誘う程度の能力』でしたが今は『主に死を操る程度の能力』ですね。それと西行寺幽々子には冥界で永住する代わりに幽霊管理を任せましたから。それが伝え終わったので私は帰ります」
　こうして閻魔……映姫は帰って行った。
「貴方達は私の友達だったのかしら？それじゃあ、もう一度友達になりましょう！」

「ちょっと待って……妖忌…隠れてないで出てきたらどう？」
「……ばれていたか」
「あら？貴方も私のお友達？」
「いえ、滅相もありません！私は此処の庭師ですから……友達とは……」
「まぁ、細かい事は気にしないで」
「こ、細かい事では……」
「それじゃあ、三人とも！友達ということね♪」
「……もうそれでいいです…」

そして月日が進んだある日。
「月に攻め込もうかしら？」
「随分と唐突だけど……それだと戦争になるね」
「ええ、月面戦争よ…」
「何を勘違いしてるの？」
「え？」
「幻想郷大戦の間違いじゃないかな」
「……まさか、邪魔をする気？」
「勿論、そんな事で妖怪達を無駄死にさせる訳にはいかないからね」
「いいわ、受けて立つわ！月に行く前に叩き潰してあげるわ!!」
「ふふふ、こっちは出来るだけ殺さないから殺す気でかかってきなよ」
「勿論よ」
第一次幻想郷大戦……開幕！

第一次幻想郷大戦

戦争当日、芽衣の拠点

「う～ん」

「どうされましたか？お嬢様」

戦争が始まる前に芽衣は少し考え事をしていた。

「いやね、紫がどうも真正面から戦うとは思わないんだよね」

「……近辺に敵兵を潜ませているかどうかですか？」

「いや、そういうんじゃなくて……もっと…こう、そもそもが違う様な戦い方を…」

「芽衣様！偵察部隊が帰って参りました！」

…まぁ、いっか。紫が何かを仕掛けて来たら私もその時に対処すればいいし。

「申し上げます！我ら偵察部隊、芽衣様から渡された映像と声を録音できる機械で隅済みまで撮影して参りました！」

「うん、ありがと、それとこれはデジカメって言うんだよ」

「はっ！頭に叩き込みます！」

何となくで作って見たけど結構出来は良いんだよね。これ。

「さて指示通りならば最初は味方の面々を撮影し次に敵部隊を遠くから撮影したものが映ると思います」

「じゃあちょっと見てみようか」

そうして私はデジカメの撮影された映像を見てみる。

「えっ？何か言えですか？ええっとぉ……紅美鈴です。キシさんに呼ばれて来ましたが……これ私が居なくても勝てるんじゃないでしょ

うか？でも一日、貸し出されちゃったのでちゃんと戦いいます！」

え？キシ何で美鈴と知り合いなの？というか参加してるんだ……。

「ん？儂に？そうじゃのう……儂が加勢するまでもないが紫の奴に昔ちょっかい出されたからのう。少しお返しをさせて貰おうと来た訳じゃ」

マミゾウさんも居るし、ちょっと大変な事になってない？主に規模が。

「とまぁ、味方のは大体が見終わりましたね。次は敵の映像です」

「敵かぁ……どんな妖怪達が参加してるんだろう」

「いやぁ、これは良いスクープが書けそうですね！」

「何をしてるのだ？お前は」

「え？て、てて天魔様ぁあぁ!?」

「なんだ、騒がしい……」

「い、いえ、てっきりこの戦争に参加していないのかと」

「鬼神が認めた相手がどれほどなのか見に来ただけだ」

「そ、そうですか」

あ、あややだ。それに……天魔？確か萃香達が天狗の長だとか行っていたような……。

「よし！今度こそ芽衣達にリベンジだ！」

「私も四天王としてやらなきゃね！」

「儂も少し暴れたいからのう……芽衣にリベンジついでに暴れるか

の」
噂をすれば何とやら萃香に勇義に鬼神の叶も……豪華だなー…。
「ふふふ、もう一度、貴方に挑むわ。今度こそ貴方を越えるために……」
ゆうかりん……何か声に出てるしというか戦争って形じゃなくても再戦ならするのに。
「芽衣姉……私の実力を……私の今の力を見せに行く!!」
……頑張れ…妹紅……私は本陣で待ってるよ。
「と、これで以上ですお嬢様。気になるのはやはり鬼の四天王や鬼神、それに天狗の長と言った所ですね」
「ん、そうだね。偵察部隊の皆は休んでて良いよ」
「はっ!」
思いの他、皆に何か色々と言われてた様な気がするけどいいか。

そして程なくして全軍が集まったと知らせが届いた。
「さてと、これで全員集まったかな?」
「はい、今回この戦争で集まった妖精,人間,妖怪達です。全勢力の三分の一という所でしょう」
其処にはおびただしい数の妖怪と人間が集まっていた。
だが人間は妖怪よりも少し少ないようだ。
「そういえばあれは?」
「はい、既にお嬢様の台本を渡した幹部が言い始めるでしょう」
「台本っていうより注意事項をまとめた紙みたいなものだけどね」
少し高い丘にキシの幹部らしき人物が立った。というか私達の前

なんだけどね。
此処は丘の上に拠点を作ったからね。
そして妖怪と人間たちは丘に立った人物を見る。
『これから注意点を話す！よく聞け！
まず第一！相手を殺すな！
いいか決して殺傷は禁止だぞ！どうしても殺したいというならキシ様が直々に相手してくれるそうだ！
そして第二！自分の命が危なくなったら構わず逃げろ！
一応、芽衣様が誰も死なないように何かをしてくれるそうだが万が一の事もある！
以上だ、芽衣様……何かありますか？』
「そうだね、じゃあ少し気合が入る歌を……」
『『『うおおおおおおおおおおおおお!!!』』』
そして気合が入る歌が歌い終わり開戦準備。
軍団のみんなにはいつも以上に力が出るような歌を歌ったし、それに死なないようにも半分不死化の歌をかけておいた。まぁ、一日が限度の超薄い不死化だけど。

「ふう……疲れた。さてと戦争が始まるね」
「お疲れ様ですお嬢様。お嬢様の成果もあり軍団のやる気は十分の様です」
そう言いながら冷たいタオルと水を渡してくれる。
なんかライブ終わりの様な感じがするけどここからが本番。
「タオルありがと」
「いえ、これが私の役目ですから」
さてと、後は開戦を待つだけってあれは……？
「こいしちゃん？」
「……？お姉ちゃん私が認識できるの？私は無意識だから声をかけても気づかれない時があるのに……」
「まぁね、普通に分かるよ」

「嬉しい！ね、ね、お姉ちゃんの名前は？」
「芽衣だよ、星羅芽衣」
「私はね、古明地こいしって……あれ？芽衣お姉ちゃんさっき私の事名前で呼んでなかった？」
「呼んだよ、私はそういう能力を持ってるんだ」
普通に知ってただけだけど。
「へぇー、あ、さっきからお姉ちゃんって呼んでるけど別に良い？」
「別に良いよ、慣れてるし」
「ありがとー、芽衣お姉ちゃん」
とこいしちゃんを膝に乗せてふわふわお喋りしてた時。
ドーン！と太鼓の様な音がなり開戦が告げられる。
「始まりましたね、お嬢様……その妖怪は？」
「ああ、この子？こいしちゃん。なんかふらふらしてたから声かけた」
「えっ？お兄さんも私の事が認識出来るの？」
「？……何がだ？」
「まぁ、キシぐらいなら普通に気づくよね」
そうして戦争は開戦された。
高台から見てみると完全にこっちが押している。
というか紫側が何か凄い勢いで倒されてるんだけど……

戦争が始まって数分、見事に紫陣営の妖怪達は次々に倒されていく。
『力がみなぎるうううううう!!』
『たぎる!!力がたぎるぞぉ!!』
『体が軽い…。こんな気持ちで戦うなんて初めてだ!!』
芽衣陣営の殆どはありあまる力を発揮して相手を死なせないよう

に進軍する。
この統率の高さは芽衣の下だからこそ発揮することである。

その中で一人、フラワーマスターである風見幽香はある一人の人間と対峙していた。
「さてと……最初はあなたから倒して行こうかしら？」
「……」
幽香の近くに一人……見た目、３０代後半の男性だ。
「運が無いわね貴方」
幽香はその男に向かって傘で殴りつけた。
が、

ズ……
バシイイイン!!

幽香の攻撃はその男に当たるが当たった感触は程なくしてその殴りつけた場所から自分と同じ力で殴りつけられる様な感触が返ってくる。
その力に幽香は一旦下がる。
「……貴方……何者？」
「……私は…伊縁……伊縁惰弐（いえんだに）だ……」
「ふ～ん、中々の力を持っているのね、人間の癖に。芽衣の側近の一人かしら？」
「……芽衣様の近くにおられる方はキシ様……詩音様……パウ様ぐらいしか居ない……私など到底及ばない……」
「……まぁ、芽衣の様な人間も居るし……油断はしないわよ」
ゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオッッ!!
幽香は接近戦は分が悪いと感じたのか少し離れ魔砲を撃ってきた。

昔、芽衣に放ったやつより速く、そして大きかった。
「これならどう？」
「……」
伊縁は、幽香が放った魔砲から逃げようとしなかった。
何故なら……
「……」
伊縁に魔砲が当たる瞬間、幽香の放った魔砲は何かに吸い込まれたかの様に消えた。そして……
ズ……
ゴオオオオオオオオオオオオオオオッッ!!
消えた魔砲は伊縁から幽香に放たれた。
「くっ！……」
だが幽香もそういう事は芽衣の時に経験済みだ。それに油断もしていない。
その魔砲は余裕を持ち回避する。
「貴方……さっきのもそうだけど……能力持ちなのね？」
「……その通りだ……別に言う必要も無いが……一応…言っておこう。私の能力は『返す程度の能力』だ。来た物を……来た方向に……来たスピードで……返すだけだ」
「という事はつまり……」
「……お前の攻撃は私に届かない」
「面白いじゃない!!こんなのが一兵士なんて、心が躍るわ!!」
「……」
見よ！戦闘狂は今日も赤く燃えている!!

そして藤原妹紅は、前線のぶつかる所ではなく大回りをして芽衣の本陣を目指していた。
だがそれには森の中を通る必要があった。

「（速く……芽衣姉の所へ……）」
妹紅は一人……森を駆ける。芽衣に会って自分の成長を見せる為に……
「あれ？貴方は確か……」
「！……芽衣姉の所の巫女……」
「えーと、白い髪に赤い目……思い出した！母上が言っていた妹って貴方だったのね、えーと……名前…何だっけ…」
「すまないが急いでいるから……」
「ちょ……ちょっと待って下さい！母上の所に行きたいなら私を倒してから行って下さい!!こう見えて地獄の様な修行を耐え抜いたんですよ！」
「……（こいつを倒したら芽衣姉も認めてくれるのか……？）分かった、相手になってやる」
「ふふふ、貴方の弱点は分かってますよ……不老不死で体が再生するなら精神を削ってやります!!」
「精神を削る？」
「母上が何かそう言ってました。ＳＡＮ値だとか何とか……まぁよく分かりませんでしたが……まぁ、という事で『食屍鬼』さん！『夜鬼』さん！『ムーン＝ビースト』さん！『ミ＝ゴ』さん！『イゴーロナク』さん！お願いします!!」
詩音がその名を呼ぶと、木々の中からそれぞれが姿を見せる。
最初の奴は一見、人間に見えたがすぐに違うと分かった。そいつはゴムの様な弾力のある皮膚をしており犬に似た顔、鋭いかぎ爪をしている。
次に現れた奴は無格好な黒い生き物で、油っぽく滑らかなクジラの様な皮膚、不快な角、羽ばたいても音のしない翼、酷い手、トゲの付いた尾、顔は有るべき所には空白があるだけである。
次に現れたのはピンク色の短い震える触手があり、目の無いヒキガエルに似ていた。
次はピンクがかかった色の生き物で甲殻類の様な胴体、背中には翼が付いていた。

最後に体が白熱していて、頭が無くて、裸で、巨大で、両手の平に濡れた口が開いた化け物。
「な……なんだ……こいつら……」
妹紅は幾度となく妖怪を見てきたが妹紅は直感でこう感じ取った。
こいつらは妖怪なんかではない。理解してはいけない奴らなのだと。
「(こいつらは普通の妖怪なんかじゃない……)こ、こいつらは……な、何なんだ?」
妹紅は吐き気を我慢しながら詩音に尋ねる。
だが尋ねた所で良い答えなど返ってくる筈は無いという事は本人も分かっていた。
「私に聞かれましても……母上が呼び方を教えてくれて呼んだだけですしそれに……意外に可愛いですし♪」
「……」
妹紅は瞬間、意識を持っていかれそうになり下を見る、だがそれを耐えて何とか詩音の方を見ようとする。
だがこの時に気絶をしていれば良かったと妹紅は思うであろう。
詩音がいた場所には臓器が露出して半分ほど溶けていた人の様なナニカが蠢いていた。
「うわあああああああああああ!!!」
「へ?あ、あの、どうしたんですか?」
詩音は妹紅に近寄る。それが止めを刺す事になる。
「来るな!こっちに来るなあああ……ぁ…!!」
バサッ!
そして地面に倒れる。
妹紅は幻覚を見ていた。
詩音は別段、臓器を露出をしていないし溶けてもいない。
妹紅が見たナニカは幻覚だったのだ。
「あれ、気絶しちゃった。これが精神を削るってやつなのかな?心配だから母上の所に連れて行こう。あ、皆は其処ら辺で遊んでていいよ。いきなり呼んだけど来てくれてありがとね!」

神話生物達は詩音に従い適当に遊ぶ玩具（敵）を探す。
詩音は芽衣の所に妹紅を背負って走る。

「良しっ！やるよ、萃香！」
「どっちが多く倒すか競争でもする？」
「良いねぇ！その話乗った！」
その鬼達の前に若い男性が現れる。
その男は一見普通の人間のようだ。
「おっ、獲物発見！勇義！あいつは私が貰うよ！」
「なっ……好きにしな！」
「へっへーん、私の名前は伊吹萃香。お兄さん運が無かったね！お兄さんの名前は？」
「俺は運賀那智（うんがなち）だ。貴様は芽衣様に仇名す敵か？」
「敵と言えば敵かな…って危なっ!!いきなりかい！」
那智は芽衣の敵だと言った瞬間に戦闘態勢に入る。
「敵は倒すまでだ、大丈夫だ殺しはしない」
「舐めない事だね……後悔するよ？」
先制したのは那智。腕を使い巧みに動かし攻撃をしてくる。
一方、萃香も自分の腕を巧みに動かして攻撃を防ぎ攻撃のタイミングを伺う。
「中々、やるじゃないか。だけど攻撃が甘いよ！」
萃香は那智の腕を掻い潜り腹に一発喰らわせようとするがその拳は完全に止められる。
「なっ……腕が……四本!?」
「攻撃が甘いのはお前の方だったな」
ズシッ！
もう一つの右腕は萃香の腹に深く突き刺さる。
「ガっ……ぐっ……」

「終わりだっ…」
　そのまま萃香を投げ飛ばし戦闘不能にさせる。
　その瞬間、
　バンっ！
「ちっ、止めたかい」
　勇義の渾身の一撃も素手で受け止める。
　そして両方の腕で力の押し合いになる。
「あんた妖怪かい？その腕の数。それに鬼である私と萃香の拳を止めるなんてね」
「俺は人間だ。それも芽衣様の部下で最弱の部類のな」
「冗談だろ」
「鬼に嘘はつかないさ、それにしても弱いなこの程度か、鬼は」
「何だと？」
　那智は勇義の手首を掴みそのまま上にあげる。
「ほらこれで動けない」
「はっ、まだ足が…」
　ガシっ！バシっ！
　勇義の足ももう一つの両腕で掴む。
「これでもか？」
「はっ！あんたもそれだと攻撃出来ないじゃないか」
「いや、まだ腕はある」
　ニュっともう一つの両腕が出てくる。これで合わせて腕は六本だ。
「何だい、まだ腕を隠してたのかい」
「腕が四本なんて俺は言ってないからな」
　そして出てきた新しい腕で勇義は殴られる。
　数十発を過ぎた辺りで勇義の表情が険しくなる。
「まだ、まだっ!!」
　ガっ！
　勇義は那智に対して渾身の頭突きを喰らわせる。
　突然の攻撃によろけた那智は勇義の拘束していた腕を緩ませる。
「オラっ！」

「ぐっ！」
　そのまま拘束を抜けると同時に那智の顎に蹴りを喰らわせ少し浮いた所でもう一度蹴りを喰らわせ那智を蹴り飛ばす。
　その方向には…
「へっ、ナイスパスだよ!!勇義！」
　其処にはさっき腹を刺されて投げられていた萃香が巨大化して待ち構えていた。
「うおおおおおおお!!」
　萃香は全身全霊を込めて那智に拳を振り下ろす。
「……」
「やっと……倒せた……」
「良いパンチじゃないか萃香」
「今回の功労者は勇義だよ、私が起きるまでこいつの拳を受け続けるなんて尋常じゃないよ。私は腹刺されて投げられただけで気絶してたってのに」
「まぁ、何はともあれ……ようやく一人！これはあたしの逃げ切りかな」
「あっ！やっぱりさっきの私にもプラス1ね！」
「まぁどっちでもいいさ。さぁ、次に行こう」
「休まなくていいの？」
「まだ喧嘩は始まったばっかりだよ、ほら相手も来たしさ。次はあんたかい？」
　両方とも完全に満身創痍だが二人は次の人物と戦う。
　それは鬼だからかどうかは二人にも分からない。

終戦

「……おかしいですね」
美鈴は戦争の最前線で戦っており敵を捕捉しては倒す事を繰り返し行っている。
だが敵を倒して行くと同時に明らかに普通の妖怪とは何かが違う妖怪も確認していた。
「……気が感じられない。この妖怪は本当に生きていたのでしょうか？」
美鈴の能力は『気を使う程度の能力』で相手の気なども分かるのだ。それが感じられないという事は生きていなかったという事だ。この事には他も気づいており芽衣にその事が報告されるのも時間の問題だろう。
美鈴はその事を考えながらも次の相手を探す。
「……次はあんたが相手かい？」
すると前方から金髪ロングで頭には赤い角が一本生えている鬼と、
「……はっきり言ってもう勘弁して欲しいけどね」
薄い茶色のロングヘアーを先っぽのほうで一つにまとめている頭の左右から身長と不釣り合いに長くねじれた角が二本生えている鬼が歩いて来た。
星熊勇義に伊吹萃香だ。
「……鬼ですか。戦いを挑むのは良いですが、それにしてもボロボロですね？」
「ふん、これぐらい大した事は無い。さっき二人がかりでやっとこさ一人倒したんだ」
「ああ、卑怯も何も言ってられないぐらい強かったからね」
「……（こちらの人達は強いなとは思っていましたが……そんなに一人一人強いんですか？この軍勢は…鬼二人相手で此処までボロボロになんて凄いってもんじゃないですよ…）」
「さて、悪いが二人がかりで行かせて貰うぞ」

「いいでしょう。そこまでハンデを背負っているんです。二人でも三人でもかかって来て下さい」
「いい根性してるね。私は鬼の四天王、伊吹萃香！」
「私は鬼の四天王、星熊勇儀！負けても勝っても恨みっこ無しだ！」
「私の名前は紅美鈴！本気で行かせて貰います!!」
鬼の四天王と門番がぶつかり合う。
先にしかけるのは鬼の四天王。
「行くよ！『ミッシングパープルパワー』!!」
すると萃香はいきなり巨大化した。
「……」
「驚いたかい？急に巨大化して？それがあいつの能力さっ!!」
ブンッ！
「っ！」
「ほう？あたしの拳を受け流すのかい。良い判断だ。防御してたら腕が使えなかっただろうからねぇ……でもあたしばかり構っていたら……」
ヒュウウウ……
「なっ！」
ドガンッ!!
萃香は巨大化した体で飛び上がり美鈴に向けて着地した。
美鈴はそれを紙一重で避ける。
「（一人ならまだしも二人は厄介ですね。それなら……）巨大化した方から沈める!!」
「させるかっ!!」
美鈴は勇義の妨害を躱しながら萃香の片方の足を殴りバランスを崩させる、そして崩れて倒れる。その時、美鈴は萃香の腹に潜り倒れて来た所を殴る。すると……
「っ！あァ!!」
「萃香ぁ！」
萃香は痛みを伴いながら巨大化が解けており地面に倒れている。
だがまだ戦う気はあるようだ。

「ふぅ……貴方達が誰かと戦った後で良かった。疲れがあり気が乱れた所がありました。そこを中心に叩いたんですが……どうやら正解みたいでしたね」
　美鈴はあの一瞬で萃香の気が乱れている場所を見つけ其処に瞬時に移動して殴ったのだ。
　萃香は前の戦いで腹を怪我しておりそこを狙われたのだ。
「さて、一対一ですね。下手な小細工は通用しませんよ？」
「……鬼に向かって小細工をするなとか……いい度胸してんね!!」
「萃香！もう一頑張りだ！」
「っ……あいよっ！」
「……なら、私もそれに応えるとしましょう」

「ほっほっほ、いや、中々強いのう」
　マミゾウはある人物達と戦っていた。
「ぐっ……」
「……流石、狸の頂点と言われる訳だ。一筋縄ではいかんか」
　其処には鬼神と天魔の二人が膝を突いていた。
「いやいや、おぬし達も中々強かったぞい。一瞬、やられるかと思ったぐらいじゃ。それに何だか今日はすこぶる調子が良いしのぅ……」
「よく、言いますよ。私達二人を相手に余裕かましてるんですから……」
「全くだ……だが」
　グググ……
「まだ負けを認めた訳じゃあない」
「その通りです。私達も天狗と鬼の頂点なんですから……」
「ほう？あれほど痛めつけたのに起き上れるとはのう」

「「ふっ、我らの根性……しかと目に焼き付けて置け!!」」
「面白い、しかと見届けてやろう!天魔に鬼神!!」

戦争が始まってから数十分……
「芽衣様、爆撃部隊の準備が完了しました」
「え?そんなのいたっけ?」
「はい、あちらにございます」
そう言われ行ってみると其処には物凄い数のペンギンがいた。
「(あれ?どっかで見た事あるような……)」
「彼らはプリニーと言う鳥妖怪だそうです。なんでも投げると爆発するそうです。ですが直ぐに復活するんで問題は無いと思われます。実質的に言えば不死だそうです」
「……キシ……このプリニー達、どっから連れて来たの?」
「いえ、最初は数匹だったんですが急に数十、数百と数を上げていったんです。路頭に迷ってました」
少しプリニー達に耳を傾けてみると……
『キシさんの所は給料がいいッス!』
『一週間、イワシ一匹なんて凄いッス!』
『前は1日20時間労働で年中無休制で年2回の特別ボーナスがイワシ1匹の時とは全然違うッス』
本当にプリニーだね……
「それで、キシ。プリニーをどうするの?嫌な予感しかしないけど……」
「はい、戦場に投げます」
「ですよね〜」

「投擲器、用意!!」
すると他のプリニー達が投擲器らしき物を持って来た。
そしてどんどんプリニー達は発射されていく。
『死なば諸共ッス!!』
『玉砕覚悟ッス!!』
『派手に爆発するッス!!』
そんな事を言いながら散っていく。
だが……
『復活したッス!』
『ただいま帰還したッス!』
『もう一回行くッス!』
爆発したと思われるプリニーはすぐさま復活し投擲器の前に並ぶ。
すると其処に……
「芽衣様!キシ様!怪我人と敵を運んできた人仲間が大量です!」
「ん～今行く!」
「了解しました!」
伝言役は伝える事を伝えると一瞬で消えた。
「さてと治療タイムだね。キシは此処で指揮を出しててよ」
「分かりました」

～少女移動中～

「うわっ!これはひどい……」
其処には死屍累々した妖怪達がいた。
そしてその中に……
「母上～」
「詩音!何処行ってたの?」
「いえ、少し森の中で母上に教えて貰った術を試していました」
「へ～、それで……ああ、うん。分かった。練習してたら妹紅が出

て来て妹紅がＳＡＮ値直葬したんだね。見て分かるよ」
「あっこの子の名前、妹紅って言うんでしたね。すっかり忘れたました」
「うん、ちゃんと覚えようね。それより早く妹紅を……」
「あ、はい！」
　芽衣は妹紅の頭に光る自分の手を当てるそして数分後……
「ふぅ～治った治った。これなら明日ぐらいに気を取り戻してるかな。詩音は妹紅を見てて」
「は～い」
「なら次は此処にいるみんなを直さないとね」
　それにしても天狗と鬼が多いなぁ……というかそれしかいなくない？
「芽衣様！報告が…」
「どうしたの？」
「それが……相手の鬼、天狗以外の妖怪達の様子がおかしいのです」
「おかしい？何が？」
「はい、倒れても声をあげず血も出ない、まるで偽物の様です！」
「あー」
「芽衣様？どうされましたか？」
「いや、何でもない。それとキシの幹部のあの子達……姉妹を呼んできて」
「分かりました！」
「はぁ～……やっぱりか～……」

　プリニー達が発射されてから各地では爆発の煙が上がり始める。
「あやややや、どうしたんでしょうか!?いきなり各地で爆発が……」
　戦争が始まってから文は誰とも戦わず逃げに徹して上から戦況を

みて回る。
　するとその上から……
『特攻ッス!!』
「え？」
　ドゴーン！ピチューン！
　空を飛んでいた射命丸はプリニーの特攻に合い敢え無く撃沈した。

～月～
「……やっぱりか～」
　芽衣はスキマを使い月に来ている。
　其処には紫の妖怪達がいた。幸い月と戦争はまだ始まっていない、だが時間の問題だろう。なので芽衣はある人物の能力を使いこれを回避させようとする。

～五分前～

「芽衣様、お呼びですか？」
「私はちゃんと働いてるよー！」
「あ、来たね嘉永姉妹。頼みがあるんだ」
「はぁ、私達に頼み……ですか」
　この子は嘉永瑞樹（かえいみずき）キシ曰く真面目な姉だそうだ。
　能力『電を司る程度の能力』
「何々？面白い事～？」

この子は嘉永英里（かえいえいり）キシ曰く気分屋な妹だそうだ。
能力『反転させる程度の能力』
「ん～？まぁ、多分面白い事だよ」
「本当に!?じゃあ、私がやる！私が！」
「まぁ、元々、英里にやって貰うつもりだったんだよね」
「それで何をするの！」
「う～ん、見て貰った方が早いかな着いて来て」
「は～い」
「私も一緒に行こっと」
芽衣は英里とこいしを連れて隙間の中に入って行った。
「……わ、私が来た理由は？」
一人、放置される瑞樹だった……。

そして現在、芽衣は英里を連れて月に来ている。
「それでそれで、何をするの？」
「あそこにいる妖怪達と地球にいる鬼と天狗を抜いた相手の妖怪全部を反転出来る？」
多分、地上の皆は誰一人殺していないと思うし偽物の体とあそこにいる妖怪を全部逆に出来ると思うんだよね。まぁこれは紫に対しての信頼だけど。
あそこにいる妖怪と同じ数の妖怪の偽物を紫は作っていると思うし。
「……それで何が面白いの？」
「あの妖怪達が慌てふためく姿が面白いと思うよ」
「それは面白いそうだね！」

～作戦実行中～

「……お、終わったあああぁぁ!!」
「良く出来たね、偉い偉い」
「えへへ～、もっと撫でて撫でて！」
「慌てふためく妖怪達を見に行かなくていいの？」
「撫でて貰う方が良いの～」
「そ、そう……」
　本当に気分屋でまるで猫みたいだな～。
「あ、私も撫でて欲しい！」
「うん、良いよ」
「わーい」

　一方、紫の方では……
「さて、そろそろ月に送った本物の妖怪達が月人達と戦う時間ね。まぁ、月人を倒せれば儲けられて邪魔者を少しでも排除ができる。月人に一切勝てなくても邪魔者が全員死ぬ。この勝負……どっちにしろ私の勝ちだわ!!」
　まぁ、でも少し月の様子でも見に行こうかしら……
「……え？どういう事なの!?これは私が作った偽物じゃない！まさか……芽衣が……？」

「芽衣!!」

「ああ、紫ね。驚かさないでよ、何の用？」
「用も何も……貴方！何をしたの!?」
「何をしたのって……偽物と本物を『反転』して貰っただけだよ、この子に」
「ｚｚｚ」
　芽衣は自分の膝の上で寝ている英里を撫でながら言う。後、こいしも一応撫でている。
「……反転？」
「そう、反転。正確に言えば位置を逆にしたって事かな。今頃、地球では本物が暴れ回っているんじゃないのかな？」
「くっ……これは私の負け……ね。まいったわ、芽衣」
「そう？じゃあ……キシ～ある程度、敵が居なくなってきたら撤収指示出しといて～」
　そう言いながら私は英里ちゃんとこいしちゃんを背負いながらスキマから出る。
「撤収というと……その点に関してはもう大丈夫です。現状はもう制圧済みで残りはプライベートで戦っているフラワーマスターと私達の部下一人だけなのでもうほぼ撤収済みです」
「早いね～流石キシ。じゃあ、私と英里は家で寝てるよ」
「畏まりました（嘉永……貴様は今度、地獄の訓練を提供してやろう……）」
　こいしちゃんは一度、家に帰るらしく月から帰って来たら帰って行った。

～次の日～
「それで……もう懲りた？紫」
「……ええ、懲りたわよ。貴方と戦うのは……」
「そういえば紫の目的って本当に月の技術なの？」

「まぁ、それは手に入ればの話よ。本当は邪魔者を排除出来ればそれで十分だったんだけど」
「じゃあ、鬼や天狗は邪魔者って訳じゃないんだ」
「あれはいいのよ、統率が取れてるし。統率が取れてなくて少し力がある妖怪が邪魔だったのよ」
「ふ～ん」
「まぁ、それはそれとして月へのリベンジはいつかするとするわ」
「まぁ……頑張って」
　ゆっかり～んは今度また月にちゃんと攻め込む様です。

「それではキシさん。私は帰りますね」
「ええ、ご苦労様でした。当主にもお礼を伝えて置いて下さい」
　紫と縁側で談話してると玄関の方からキシと誰かの声が聞えた。
　気になったので見に行く事にした。
「キシ、誰と話してるの？」
「これはお嬢様。こちら紅魔館の美鈴さんが戦争に参加して頂いたんでお礼を渡していた所です」
「あ、どーもです」
「へ～って、あ、美鈴」
「何処かでお会いしましたっけ？」
「いや、してないけど」
「そうですか、それではこの辺で」
　そう言うと美鈴は去って行った。
「キシ……」
「どうされましたか？お嬢様？」
「美鈴の行き場所は？」
「ここからとても遠い所にある紅魔館という所です」
「へー……ちょっと紅魔館に行って来るね！」
「分かりました。詩音達にも伝えて置きます。今回も長くなりそうですか？」
「うん、それなりにね。じゃ、行って来ま～す」

「いってらっしゃませ、お嬢様」

門番＆魔女

「ふぅ……やっと着いた」
　最初は場所が分からなかったが優しい旅人とさすらいの商人のお陰で数日かけて、ようやく私は紅い洋館に着く事が出来た。
　そして門の前で立って寝てる美鈴を見つけたので確定。
「どうも、こんにちは～」
「ＺＺＺ～」
　美鈴は深い眠りについている。
「美鈴～起きて～」
「ＺＺＺ～」
　美鈴は（ｙｒ
「……朝だよ！」
　芽衣は美鈴の頭を軽く叩いた。
「いたっ！……だ、誰ですか!?」
「えっと……私は星羅芽衣。この洋館に入ってもいい？」
「何処かで会った事が……？…でも駄目です。私は此処の門番ですから。通す訳には行きません。どうしても通りたいのなら私を倒して下さい」
「あんなに爆睡してたのに？」
「あ、あれはたまたまです!!」
「へぇーたまたまかー。ならいいや。此処を通るには貴方を倒さないといけないんだね？」
「倒せるのなら……倒してみて下さい！」
　そう言い、美鈴は戦う構えを取った。
「じゃあ、私も型に合わしてあげるよ」
　私は美鈴とはまた違う構えを取る。
　手を両方とも上に挙げて意味深な構え、特に理由は無い。
「独特な構えですね……それでは、こちらから行かせて貰います！」
　美鈴は一瞬で間合いを詰めると芽衣の死角から拳を放ってきた。

だが私はそれを直観で避ける。
美鈴の拳は私の頭の位置にあった。
あのまま当たっていたらどんなに酷い事になっていたか……。
「……なるほど、熟練者ですね」
「次はこっちから行くよ？」
私はは美鈴が放った拳を掴んで背負い投げをする。

「ぐっ……！」
美鈴は地面に思い切り叩きつける。
だが美鈴はきちんと受身をしておりダメージはそれほど入っていない様に見える。
「追撃いくよ」
「！」
倒れている美鈴の腹に向けて掌底、けれど横に転がられ外す。
美鈴はそのまま転がった勢いで立ち上がり、再度私に拳を放ってくる。
狙いは腹、そう感じた私は本能のままに腹を守る。
予想は的中しガードした感覚が残る。蹴りは重い。だが既に美鈴は次の攻撃をしていた。
脇腹への回し蹴り、受け止めて防ぐ。やはり重い一撃。美鈴は残った足で私の頭を狙う。
私は両手でもう一方の脚を受け止めていたので必然的にその脚を離してまた防ぐ。
今度は反撃を許す前にこちらが反撃する。無防備になっていた腹に全力で掌底。
「たぁっ！」
「っ……！」
当たった感触はあるが妙な違和感。
美鈴は堪えた様子は無い。……どうやら気で防がれたらしい。
『気を使う程度の能力』
この能力は攻撃は当然、防御にも使える。

気を溜めて一箇所に集中して防御をすれば攻撃は通らず、気を溜めて攻撃を放てば防御など並みの相手ならば無意味だろう。
武道や武術に対して最も適している能力だろう。
ただしそれは気を十分に使える前提である。
もし気を乱す相手ならば話は別だ。
気を乱されればいつもと同じ様に戦えないのは必須であろう。
「ぐっ……！……？」
「気を乱すツボを14箇所やらせてもらったよ」
その相手が今、目の前にいる。
気を使い攻撃と防御をしている事を知り、それを乱す技を知っている。
気を使う武道としてはまさに天敵だ。
だが美鈴はその事に驚いてはいない。場数はそれなりにこなしている。
そんな相手がいなかった訳ではない。
――あの攻防の中、そんな余裕があったのか!?――
そう、美鈴は自分でも知らない内にその技が為されていた事に驚いたのだ。
だがそれは一瞬。直ぐに頭は切り替わりこの問題を対処する。
「すううぅぅぅぅ……はあぁぁぁぁぁ……」
「おぉ……」
美鈴は気の乱れを静め、そしてまた気を戦闘できるまでに回復させる。
それぐらい出来なければ当然『気を使う』などとは言えない。
「埒が明かないね」
「まだまだ、私はやれますからね」
「なら、次の一手で勝負を決める。一手だよ」
「……出来るのなら拝見したいですね」
「……」
芽衣は集中する。どこに一手を決めれば相手を倒せるか。
どうすれば相手の注意を攻撃する場所から遠ざけられるか。

その考えは二秒で終わった。気づいた時には体が動いていた。
――速いっ！――
瞬間、芽衣の立っている所には誰もおらず、気づけば美鈴の下に移動し終えていた。
――っ！……脇腹に蹴り…？……いや違う、これはフェイント！本命は顎に掌底！――
美鈴は気を全て腕に集中させてアッパーの様な掌底をガードさせる。
拳と腕が当たる直前、拳はすり抜ける。
それは残像であった。確かに当たる直前までは其処にいたのだ。
だが今はもう居ない。ふと上に気配を感じた。
――最初は全てがフェイントっ……！……本命は上からの踵落としか……！――
直様、腕を上でクロスさせて衝撃を緩和させる。
避けるのは当然間に合わないからだ。
今度こそ攻撃が当たる。
その時、美鈴は頭を強く揺さぶられた感覚に陥る。
それは一番最初のフェイントの顎に掌底を喰らえばこの様な感じになるだろうという感覚。それは正しかった。
なぜなら芽衣は下に居ると見せかけ上に行きそしてまた下に戻ったのだ。
――二重フェイント……！……見事な物だ…っ！――
今、思えば最初のフェイントが発覚して上に気配を感じた時、気を乱す技を知っていたのだ。なんなら気配を断つ事だった出来た筈だ。
それなのにわざわざ上に気配を感じさせて注意を引き本当の攻撃は気配を完全に断ち、私に昏倒させる程の一撃を喰らわせる為だったのだ。
そして美鈴は地に膝を着いた。
ここまで来れば、宣言通り一撃で決めると言った事を実現したのだ。
もう敬意を示す他ない。

けれどもそれはしてはいけない。目の前にいる人物は主に牙を剥くであろう人物。
ここで倒れれば門番としての役割は果たせない。ならば尚、抗うのは当然の事。
「……ぐ……」
一度、地に膝を着いたがまだ完全に倒れた訳ではない。
死力を振り絞りもう一度地面に立とうとする。
「あんまり動かない方が良いと思うんだけど……」
その忠告は正しい。これ以上無理に体を動かせば日常に支障をきたすであろう。
だが美鈴はそんな忠告を聞かずに立ち上がった。
「私は……門番だ。……門を……主を守らないで……どう……す……る……」
そして美鈴はここで完全に動きを止める。立ったまま気絶したのだ。
「……何処の弁慶だよ美鈴は……」
――でも、まぁ。ここで気絶してくれるなら良かった。これ以上動いたら本当に危ないからね。このままそっとしておこう――
芽衣は立ったまま気絶している美鈴に一礼して紅魔館の領地へと足を踏み入れる。

「う～ん、見た目と中の広さは同じみたいだね」
てことは、咲夜は居ないって事かな？
「適当にドア見つけて入ろうかな」
芽衣は適当にドアを探して片っ端から調べようとした。

けれど意外にも直ぐに誰かがいそうな雰囲気のドアを見つけた。
「う～ん鬼が出るか蛇が出るか…まぁ出るのは吸血鬼なんだけどね。此処にいるかな？」
そのドアはいくつも備え付けられているドアと違い二倍程の大きさだ。
私はそのドアを数回ノックする。…返事は返ってこない。
仕方ないのでそのまま開ける。そして其処には…
「わー本がいっぱいだー（棒）」
其処には所狭しと並べられた本が有った。
残念、パチェのいる所でした。
「いらっしゃい。侵入者さん」
「え？」
声がする方には椅子に座り本を読んでいるパチュリーがいた。少し若い感じがする。
何でノックに反応してくれなかったんだろう……。
まぁ、侵入者がノックする時点でおかしいんだろうけど…。
「えっと……こんにちは、この屋敷の主の所に行きたいんだけど……」
「それより、紅茶でも飲んで行きなさい。こぁ！紅茶を入れて貰える？」
「分かりました、パチュリー様」
「え、でも…」
「お茶の誘いを断るほど無粋では無いでしょう？」
「……いただきます」
――さっき侵入者って言ってたのに何でもてなしてくれるんだろう――
「さて、待っている間、暇だし自己紹介でもしましょう。私はパチュリー・ノーレッジ。魔女よ」
「私は星羅芽衣。人間だよ」
「人間……ねぇ。貴方を監視していたのだけれど……貴方、本当に人間？」
「まぁ…普通の人間だよ」

「……そう」
「紅茶をお持ちしましたよ」
話してる間にこぁが紅茶を持って来てくれた。
「ありがとう、それじゃ早速」
そして私は普通に紅茶を飲んだ。
飲んだ瞬間、口の中で一瞬変な味がした。
「……うん、中々美味しいよ」
これ……毒？この甘く苦い毒って……体が麻痺して最終的に死ぬ毒じゃん……。
体の中で勝手に抗体が出来なければ死んでたよ…。
「!?」
「どうしたの？そんな顔して、それじゃ紅茶もご馳走になったしそろそろ行くね。誰か屋敷の主まで案内してくれない？」

芽衣は紅茶を飲み干して図書館から出ようとする。が、
バタンッ！
急にドアが閉まった。
「行かせないわ： 貴方みたいな危険人物を： こぁ！殺しなさい！」
「分かりました！」
すると小悪魔は小さな魔法陣をいくつも展開して術を放ってきた。
後ろではパチュリーが大きな魔法陣を作りあげている。
「それじゃ、今回も付き合ってあげるよ♪」
そう言いながら小悪魔が放ってきた魔法を避けて、
芽衣はスキマから例の魔法書を手に取りあるページを破った。
芽衣の前にこう文字が表示される。
≪魔法発動：『黄金の魔女の家具　召喚』≫
すると芽衣の周りに幾つもの魔法陣が展開してある人達が出てきた。
「「「「「「煉獄の七姉妹、此処に」」」」」」
「やっちゃって」
「「「「「「了解」」」」」」

煉獄の七姉妹は自分の体を七杭にし高速飛翔して魔法陣を全て貫いた。
そして、
「くっ…」
「すみません～パチュリー様～」
七杭の四本は小悪魔を壁に貼り付けて残りの三本はパチュリーの顔の目の前で止まっている。
「これで、Ｃｈｅｃｋｍａｔｅ（チェックメイト）だよ」
「… 私の負けよ。好きにするといいわ」
「それじゃ、≪解除≫」
すると七杭は元の姿に戻り芽衣を一瞥して消えた。
「じゃあね♪」
「まっ、待ちなさい！」
「何？」
「何で… 攻撃を止めたの？」
「…」
「私は貴方を殺そうとしたのよ!?何で… 何でそうあっさりとしてるのよ！」
「… 紅茶のお礼… かな？それじゃあまたね♪」
そして芽衣は魔法のかかった扉を普通に開けてまた洋館の中を探索する。
「… 訳が分からないわ… 星羅芽衣… 人間… ね。ふふ」
一人、人間という生き物に興味を持った魔女が微かに笑った。

「此処で最後かな」
芽衣の前には図書館より一層、大きい扉が待ち構えていた。
そして扉を開くと…
「ようこそ、人間… いや？人外よ」

狂気の吸血鬼

私が扉を開けると其処には大きな窓と長テーブルがあった。
長テーブルの奥には見た目、少し老けている男性が座っていた。
いかにも待っていました感が出ているのでテーブルに座り質問をしてみる。
「貴方がこの屋敷の当主？」
「そうだ、私がこの館の当主、エクス・スカーレットだ。貴様は何だ？」
「私は星羅芽衣。ただの人間だよ」
「ふ…はーっはっはっは！家の門番と魔女と戦い無傷な人間とな？面白い！私の名はエクス・スカーレットだ！」
「いや…まぁ…その…ありがとうございます？」
「何故にお礼を言う？私は感想をそのまま言っただけだぞ？人間？」
スカーレット家、当主。
彼は彼女の実力をひしひしと感じていた。
それと同時に何をしても彼女には勝てないという事を本能で分かってしまっていた。
エクス・スカーレットは目の前にいる人間に決して怯えはしない。
何故なら彼は屋敷の主。自分が屈したら屋敷の者達に示しがたたない。
「さて、挨拶はここ等でいいだろう。単刀直入で聞く。何しに来た？吸血鬼退治か？」
「いや、貴方の所の門番が家の所の戦争に加担してくれたからそのお礼に…と」
「ふむ、あの戦争の首謀者か。それでお礼とはどんな事だ？」
「首謀者ではないんだけど……そうだね、今貴方が悩んでいる事を一つ解決してあげるよ」
まぁ、本当は願いでもいいんだけどね……なんて。
「……それなら、娘の教育を頼もうか。私は若いころから戦う事しかしてなくてな、教育とか全然、分からんのだよ。妻も死んでしまった

し何も出来ぬのだ」
「それが貴方の悩み？」
「うむ、そうだっと、一つ言い忘れたことがあったな。娘は姉妹で姉の方は妻が少し教育を施してくれたので大丈夫だが妹を生んだと同時に死んでしまったのだ。そしてその妹に問題があるのだが……」
「問題……情緒不安定とかですか？」
「！……ああ、その通りだ。娘の能力も合わさりとても危険な状態なのだ。昔…娘を抱いたら腕を吹っ飛ばされてしまった。なので地下に閉じ込めておるのだよ。私は気にしないし大丈夫なのだが周りはそうもいかないのでな」
「そう、分かった。ついでに狂気も治しとくから数年間かかるよ、良い？」
「……狂気をついでと……ああ、是非よろしく頼む」
「じゃ、早速案内してくれる？」
「分かった、では付いて来てくれ」
そう言うとエクスは監禁している場所へと歩く。私もそれに続く。
そして数分後、地下の一室の前に着いた。
「此処だ、今は魔法陣がかかっていて入れないが今、魔法使いを呼んでいる」
「あ、それについてはご心配なく～」
私は部屋のドアノブに手を掛けて普通に開けて入った。
まぁ、少しビリっと来たけど。
「!!」
「それでは、また数年後……」
バタンッ
「どういう事だ？」
エクスは部屋に魔法陣がかかっているかどうか疑問に思い取って
に手を掛けた、次の瞬間。
バチィッ！
エクスは魔法陣によって侵入を拒まれてしまった。
手を見ると原型が見えない程に焼け爛れてしまっていた。

「……」
と、その時
「スカーレット、呼ばれたから来たわよ」
パチュリーが階段を下りてきた。
「ノーレッジか……悪いが用は無くなってしまった」
「どういう事？」
「先の人間？が部屋に入って行ったのだ」
「!?……どういう事なの？魔法陣は正常に稼働しているのに……」
「全く、謎だらけだな。あ奴は・・」

～地下室～
其処には人形の残骸や動物で在ったと思われる破片、床にまき散らされた血。
見て分かる通り異常だった。
と其処に……
「お姉さん、だ～れ？私はフラン、フランドール・スカーレット」
「私は芽衣。人間だよ」
「人間？人間は飲み物でしか見た事が無いよ、騙したりしてる？」
「してないよ。普通の人間」
「そう、なら貴方が新しい玩具？」
そう言い、フランちゃんは両手を向けて何かを潰した。すると、
バンッ！
私の両腕が吹っ飛んだ。
とても痛い。凄く痛い。
「キャハハハ、この玩具も直ぐに壊れちゃう！」
「……これは思ったより重症かな」
そして私は早速この常人なら数分で死に至らしめるであろう狂気

を収める為に能力を行使する。この狂気の感覚は似ている。あの西行妖に。
「……精神状態を確認。狂気の感情が溢れ危険域突破。常人の数千倍。これより狂気の感情を常人と同レベルまで時間をかけて治します。なおこれより使用者の体力を削り相手の精神を徐々に下げていきます。予想時間……６３１１３８５１．９秒、１０５１８９７．５３分、１７５３１．６２５５時間、７３０．４８４３９８日、１０４．３５４９１４週間、２４月、２年かかる事になります。今の体力で約５４０分の１減ります。宜しいでしょうか？――――――――――了解。――――――――それでは開始します」
ふふ、この超精神分析（全てを操る程度の能力）で精神を治す！
すぐに正常に戻さず徐々に狂気を下げる事でフランちゃんの脳に後遺症を残さないから安心だ！
「どうしちゃったの？頭も壊れちゃった？」
「……さて、これから礼儀・マナー・作法・常識、全部を叩き込むから、しっかり付いて来てね」
「？……そんな体で何を……!?」
さっき吹っ飛ばされた私の腕の破片を分子レベルで元に戻す。
そうして私の体はどんどん元の姿に再構築されていく。
「さて、授業を始めようか」
「早く、壊れちゃえっ！」
そして私はフランちゃんからの攻撃を全て受けながらのフランちゃんの為の授業を開始した。

～数日後～
「～であるので、人との接し方は～」
「死ね！死ね！死ね！死ね！死ね！死ね！死ね！死ね！死ね！死ね！」
グキッ！ベチャ！バアン！グチャ！ドカン！ボキッ・・・

フランちゃんはまだ私に対して攻撃を行う。
常人だったら見てるだけで失神するレベルであろう痛さを私は笑って受け流す。
ふふ、話を聞いてくれません。

～数か月後～
「～なので、人間と妖怪は～」
「……」
フランちゃんは遂に攻撃をしなくなった。意味がないと分かったのか、それとも効果が表れ始めたのか。

～一年と半年後～
「～という事なので人間と妖怪は私みたいな例外を除く」
「はい！質問！」
「はい、フランちゃん」
「何で芽衣さんは妖怪と仲が良いんですか？」
「うん、良い質問だ。それはね～」
フランちゃんも積極的に芽衣の授業に参加して質問もする様になった。
とても嬉しい…こんなに嬉しい事なんて（ｒｙ

～そして二年後～
「～以上で全ての過程を終了してフランちゃんを一人前の吸血鬼として卒業させます」
「ありがとう！芽衣お姉ちゃん！」
「さてと、少し報告する事があるから付いて来てくれる？」
「うん！」

こうしてフランちゃんは異常な程あった狂気は普通になり元の…
いや本来のフランドール・スカーレットになった。

「ふむ、本当にあれほど有った狂気が消えているな。改めてお礼を言わせて貰おう。本当にありがとう」
「いえいえ、これでフランちゃんは一人前の吸血鬼として過ごせますよ。もう隔離する必要はありません。安心して下さい」
「そうか、なら自由に屋敷を歩いてもいいぞ。フラン」
「！……ありがとうございます。お父様！」
「そうそう、お前に姉がいるんだ。後で紹介しよう」
「え！私に本当のお姉ちゃんが？」
　そういえば、フランちゃんは姉……レミリアと会った事は無かったみたいだね。一度も話題に出て来なかったし。
「じゃ、私はこれで帰るよ。何か困った事があれば幻想郷に、幻想郷は（紫曰く）全てを受け入れるからね。フランちゃんにも一通り話したけどね」
「え？芽衣お姉ちゃん行っちゃうの？」
「うん、でも生きていればいつか会えるよ」
「本当に？」
「本当に」
「絶対に？」
「絶対に」
「本当の本当の本当の本当の本当に？」
「本当の本当の本当の本当の本当に」
「こら、フラン。あまり彼女を困らせるな」
「う～……約束だよ！」
「うん、約束」
　私はそう別れを告げフランちゃんと指切りをして屋敷を後にした。

「最後まで不思議な奴だったな」
「あ！芽衣お姉ちゃんの事を奴とか言ったら駄目なの！」
ポカポカポカ
「む……わ、悪かった」
「分かったなら、許してあげる！」

「家に帰る前に色々と世界を調べようかな！５００年ぐらい世界を見て回ろう」
まだ私の旅は続く……

プリズムリバー四姉妹

～妖怪の山　川～

河の近くで将棋をする二人の妖怪…

「最近、鬼を見かけなくなって来たね」

「何でも地底と言う所に移動したとか、なんとか」

「へぇ～、大変だね～」

「私は天狗の領域が増えて喜ばしい事ですけどね」

「……いいのかい？白狼天狗がそんな事を言って…」

「いいんですよ、鬼はもう居なくなるんですから。貴方達、河童も酒飲みにもう付き合わなくて内心ほっとしてるんじゃないんですか？」

「それはそうだけどさ……」

「！……少し仕事みたいですので行きますね」

「おや？侵入者かい？」

「どうやら、その様です」

一人の白狼天狗は何を感じたのかその侵入者の下に飛んで行った。

残された河童は将棋盤を見つめる。

「あれ？これ私の勝ちだったんじゃ……」

手は河童の番でもう詰みで終わりだった。

「運が良いじゃないか……」

「其処の侵入者！止まりなさい！此処からは天狗の領域です。それでも進むというならば、それ相応の対処をしなければなりませんよ！」

其処には一人の女性が立っていた。少し長い髪を一つ束ねて白色の髪をしている。服は見た事が無い。余所者だろうか？

「聞いているのですか！」

「ん?ああ、ごめん。聞いてなかった」
私はこの人間にとても腹が立った。私達、天狗を舐めている様な態度をしている。
「……天狗を愚弄しますか。人間」
「いや、そういうつもりじゃ」
「問答無用です。貴方は天狗を怒らしました」
私は持っていた法螺貝を吹いた。こうすればすぐに仲間が集まって来る。
そして数十秒で女性を囲むように普通の天狗と白狼天狗が集まった。
「何でこうなるかな~?」
!……まだ自分の立場が分かっていない様だな。
「捕まえろ!」
そう声を掛けると近くにいた白狼天狗三人が女性に刀で斬りかかる。
「っと!……危ない危ない」
な……!!ギリギリで躱した!?……いや、完全に見切って……紙一重でかわした。
こいつ…人間だと侮っていたが…強い!!
「聞きたい事があるだけなんだけどな~。まぁ、いいか」
そう言うと女性は一人の白狼天狗から刀を奪い刃とは逆の方を使い一人、また一人と倒して行く。
そして最後に私が残った。
ザっ…
「!……」
私は女性が近づいてきたので刀を構える。
まずい…今こいつとやり合っても勝てる気がしない…。
直ぐに応援を呼ばねば…。
「ああ、戦うつもりは無いよ。ただ聞きたい事があって。鬼はまだこの山にいる?」
その女性は私にそう質問する。

質問に答えればこの女性は立ち去ってくれるのだろうか…。
「……鬼は地底と言う場所に移住した今この山には残っていない」
「そう……ありがと。じゃあ、私はここ等で消えるとするよ。これ返すね」
女性はその事を聞くと私に刀を押し付けてさっさと山を下りて行った。
「何だったんだ、一体……」

「あ～あ、鬼はもう地底にお引越しかぁ～」
私は一人山を下りながらそう呟いた。
殆ど、私の長旅の所為である。（約５００年）
いや、でも歴史の分岐点や偉人に会えたし充実した旅だった。
「次は何処に行こうかな～」
すると、見慣れない洋館が目に入った。
「あれ？こんな洋館、前に在ったっけ？」
場所は妖怪の山のすぐ近くの場所だ。
「まぁ、とりあえず行ってみよう」

「中は思ったより綺麗だね、けど少し寒気がする……」
っと、やめよう。ブルーベリー色の巨人が襲ってくる。だが駆逐してやる！
「誰も居ないのかな？」

すると上の方で、
ガタッ！
「……え？まさか……無いない……とりあえず行ってみよう」
私は二階の音のする部屋に行った。そして扉を開けると其処に……
「あら、こんにちは。久しぶりに人を見た様な気がしますね」
「こ、こんにちは（良かった～ブルーベリーの巨人じゃなくて）」
「私の名前はレイラ・プリズムリバーと言います。貴方は？」
「私は星羅芽衣。旅人だよ」
「へぇ！旅人さんですか！それじゃあ、色々な所を旅されて来たんですか？」
「うん、まぁ」
「そうですか！ならお話をしてくれませんか。私は体が弱いのであまり外を歩けないので外の事は良く知らないんです」
「分かった、話してあげるよ」
「ありがとうございます！」
私は昔、人間が月に向かった事や輝夜姫の話をしたり紫とした戦争の話などもした。
当然だが世界を旅した事も話した。
レイラはそれを物珍しそうな顔で淡々と聞いていた。
そして話が終わる頃にはもう日が暮れていた。
「あら？もうこんな時間に、そろそろあの子達が帰って来る頃かしら」
「あの子達って……」
「ええ、私には姉が三人居るんですよ。幽霊ですけど」
「……へぇ～」
「あんまり驚かないんですねってそれもそうですよね……これより驚くお話を聞かせてもらいましたし……あ、噂をすれば」
「たっだいま～レイラ！」
勢い良く扉を開けてレイラの妹と思われる人物が入って来た。
「あれ？その人はどうしたの？レイラ」
「ああ、この人は芽衣さんって言うの、何でも旅人さんの様です」

「ふ～ん。あ、私はリリカ・プリズムリバー」
「私はメルラン・プリズムリバー」
「私がルナサ・プリズムリバー。よろしくお願いします」
「よろしくね、私は芽衣だよ」
軽く挨拶をすませばリリカ達からお腹の音が聞こえる。
もう夕食の時間なのでその日は、私が泊まって良いと言われたのでお礼に夕飯を作った。
想像以上に喜んでくれたので私としてもとても嬉しい。
そして夕食の後、レイラは自室に戻り芽衣は上の姉妹に呼ばれた……
「え？楽器の使い方を教えて欲しい？」
「うん、私達、三人でレイラに少しでも元気になって欲しいから音楽でも奏でようかな～なんて思ったの。芽衣さんなら使い方が分かるんじゃないかと思って」
「それで、教えて欲しい楽器はどれ？」
「あ、コレとコレとコレです。今日探していたんですよ」
「……弦楽器（ヴァイオリン）と管楽器（トランペット）と鍵盤楽器（キーボード）ね」
「分かる？」
「うん、大丈夫だよ。あ、唐突なんだけど能力って知ってる？」
「能力？それって芽衣さんが言っていた○○する程度の能力ですか？」
「そうそう。思い浮かべたら簡単に出るもんだよ」
「私は……手足を使わずに楽器を演奏する程度の能力？」
「あ！私もそれ！」
「私もだよ」
「てことは、姉妹揃って皆、同じだって事だね。じゃあ演奏の仕方を教えようか」
「「はーい」」

そして数時間後……
「こんなもんかな」
「疲れた～」
「めっちゃ汗かいたよ……」
「以外に難しい……」
三人はそれぞれ練習で大まかだが使い方を私が教えた。
能力を初めて使った時は体力使うよね。私も初めはそうだったし。
それに才能があるからもう教える事がないんだよね。正直。
「じゃあ、私は帰るね」
「え？帰るの？泊まっていくんじゃ？」
「いやぁ…何か今外を歩けば友人に会えそうだし…勘だけど」
「また旅に出るの？」
「一日ぐらいいいじゃないか～」
「まぁ、私の家は案外、すぐ近くだからね。何か教えて欲しい事があったら来なよ。音妖神社って言う所にいるからさ、普段は」
「分かりました。夜道に気をつけて下さいね」
「ありがとね、レイラにも宜しく言って置いてね」
私はプリズムリバー邸を後にした。

弾幕ごっこ

プリズムリバー邸を後にする頃には、もう外は真っ暗だった。
「はぁ～、夜は冷えるね～」
私は家に歩いて帰っていた。
何故、飛んで行かないかと言うと寒いからだ。
それと近くから友人の気配が……
「まぁ、今日は月も出てるし道には迷わないかな」
月が出ていて道もはっきりと見える。
「早く帰ろう、ん？歌？」
何処からか歌が聞こえると、さっきまで月が出ていた筈なのに周りが暗くなってしまった。
「……この歌は夜雀…？……みすちーかな？まぁ、とりあえず……種族を妖怪に変えておこう」
ふふ、私の能力をもってすれば種族を操るぐらい造作もないんだ。
能力を発動すると周りが明るくなり月も見える様になる。
みすちーの能力は『歌で人を狂わせる程度の能力』だから人じゃなければ問題では無いという事だよね。
「でもこれは、狙ってやったと言うより誰かの為に歌っている様な感じだったね、屋台でもやってるのかな？」
何かに釣られる様に私は歌が聞こえる方に歩く。
其処では屋台に座っている見覚えのある二人に歌を歌っているみすちーの姿だった。
「おや？お客さんかな？いらっしゃい」
とみすちーが気づく。客の二人も気づいた様だ。
「あら、芽衣。久しぶりね」
「ホントに芽衣だわ、久しぶり～」
「や、二人とも元気にしてた？」
屋台に座っていたのは妖怪の賢者こと八雲紫と白玉楼の主こと西行寺幽々子だった。

「私はいつでも元気よ、でも最近紫がね～…」
「ええ…式はいるんだけど博麗大結界の時に龍神とちょっとね…」
「いつそんな事をやってたの?全然、分かんなかったよ」
「そりゃ、貴方にも手伝って貰おうとしたけど貴方、神社にいつも不在じゃない」
「あはは～、ごめんごめん」
世界を旅してたから紫も私の事を見つけられなかったのかな。
「お客さん、何か食べます?」
「あ、夕飯は食べたし……そうだ雀酒って置いてる?」
「お、客さん。通だね～勿論、置いてあるよ。待ってて今、出すからさ」
「雀酒?何それ」
「私も聞いた事ないわね」
「ん～、紫達も飲めば?」
「それもそうね、店主。私にも一杯」
「あ、私にも～」
「はいは～い!」
その後、幽々子と飲みあいになったり紫に愚痴を聞かされたり、いやぁ……楽しい飲み会でしたね……。
「あ、そうそう芽衣」
「何?」
「貴方…博麗神社に一度も行ってないでしょ。今、霊夢って子が巫女だから明日ぐらいに挨拶に行って来なさいよ」
「分かった」
「それと……はい、これ」
「……お札?」
紫からお札?を数十枚ぐらい渡された。
「一から説明するわね、まず初めに――――

数十分後

――――分かったかしら?」

「何となく、要するに勝負する時は弾幕ごっこをすればいいんでしょ？」
「そういう事」
「後、相手の了承を得れば天測ルールを良いと…」
「理解したようね、助かるわ。じゃあ私は幽々子を送っていくわ」
幽々子は私と飲みあいをしてさっかいからダウンしていた。
ふふ、鬼と競った私に勝てる人は居ない！あ、今人じゃなかった。
戻しとこ。
「それじゃ」
「さよなら」
「家の店をまたご利用して下さいね～」
「ああ、また来るよ」
「ありがとうございました～！」

翌日の朝
「お嬢様、またお出かけですか？」
「うん、同業者に挨拶に行く所。今日には帰るよ」
「そうですか、それとは別件なんですが……そろそろプリニー達のアレが行われる時期なのですが……大丈夫でしょうか？」
「ああ、その事ね。大丈夫、今年の夏に行うからさ」
「分かりました、プリニー達にもそう伝えて置きます」
「宜しく、じゃ行って来る」
「お気をつけて、お嬢様」

博麗神社
「到着！……私の神社と色々と違うね、でも良い雰囲気だしてる。一応、お賽銭でも入れて置こう、５００円でいいかな」
チャリーン
「神社の皆が元気でいます様に……」
って私が神様だ。
そんな感じで私がお参りをしていると、奥から…
「え？参拝客？」
「こんにちは、私は星羅芽衣。宜しく」
「私は博麗霊夢。この神社の巫女をやっているわ。貴方が紫が言っていた人ね、どんな胡散臭い人だと思ったら普通の人ね。星羅さんでしたっけ？私に何か用でも？」
「紫ェ……芽衣で良いよ。今日、来たのは同業者として挨拶に来たんだよ」
「それでは芽衣さんで……同業者という事は貴方も巫女なんですか？」
「いや、崇拝されてる方かな」
「え？」
とその時、空の方から声が聞えて来る。
「おーい、霊夢！」
「あら、魔理沙。何の様かしら？賽銭が無いなら帰りなさい」
「おいおい、私は参拝者だぞ？賽銭は無いが」
「賽銭を入れない奴は参拝者では無い」
「じゃあ、其処にいる奴はどうなんだよ！」
「芽衣さんは良いのよ、参拝者だしお賽銭も入れてくれたし」
「参拝者なんてこの神社に居たのか（笑）……」
と魔理沙ちゃんが挑発して霊夢ちゃんが睨んでいる。
魔理沙ちゃんが霊夢ちゃんから視線を逸らそうとして私と目が合った。
「おっと、自己紹介をしていなかったな、私は霧雨魔理沙、普通の魔法使いだぜ！」

「私は星羅芽衣。旅人だよ」
「え？さっきと言ってる事が……」
「色々な事をしているんだよ」
「なるほど」
「えーと、芽衣さんだっけか？弾幕ごっこって知ってるか？」
「知ってるよ、昨日教えて貰った」
名前を知っているのは大分昔から何だけどね。
「魔理沙……手加減してあげなさいよ。初心者みたいだから」
「分かってるぜ！じゃあ、枚数は2枚で1回当たったら負けだぜ！」
「……分かった」
私の今の持っているスペルカードは二枚、ぎりぎり足りた。昨日の内に作って置いて良かった……
そして私と魔理沙は空中に移動した。
「じゃあ、行くぜ！『魔弾「テストスレイブ」』！」
魔理沙ちゃんは自身と赤いレーザーで繋がった使い魔を召喚し全方位に星弾を撃たせて来た。勿論、魔理沙ちゃんも弾幕を放ってくる。
というか、これって妖精大戦争の時の奴じゃ……まぁいいか。
「でも、これくらいなら」
私は軽いステップで殆どその場から動かず弾幕を避けた。そしてスペルブレイク、
「……本当に弾幕ごっこ初心者なのか？」
「案外、避けるわね芽衣さん」
「次は私だね。えっと……『終符「逃げ場のない恐怖～Ｅａｓｙ～」』」
「!?」
瞬間、芽衣から放たれた弾幕は半分は曲線を描きながら放たれもう半分は魔理沙を追尾し近くまで来ると爆発して小さな弾幕を放つ。だがＥａｓｙでもあって弾の数は少ない、が難しい。
「おおおお!?」
魔理沙もそれを必死に避ける、グレイズは当たり前の様になり最後には本当に当たる直前にスペルブレイクをした。

「あ、危なかったぜ……」
「Ｅａｓｙって聞こえた気がするんだけど気のせいかしら……？」
「さて、お待ちかねの二枚目だ。芽衣さんはビーム系のやつを持ってるか？」
「ん、一枚だけ」
「それじゃあ、競り負けた奴が負けだな。行くぜ！『恋符「マスタースパーク」!!!』」
「これは少しだけ火力を上げないと……『音符「洗礼ノ音波砲～Ｎｏｒｍａｌ～」』」
魔理沙は極太のレーザーを芽衣に放つ。手加減など微塵も感じない。
だが芽衣はその魔理沙が放ったレーザーの数倍はあるであろうレーザーは魔理沙のレーザーを飲み込む様にして消した。
「なっ……!?」
そして芽衣のレーザーは魔理沙を包み込んで、
ピチューン
そんな音が聞こえた。

「痛てて、少しは手加減をしてくれよ芽衣さん」
「あれ？立場が逆になってない？」
「芽衣さんって才能があるんじゃない？」
「其処まで？」
「私からみても敵いそうに無かったわ」
霊夢ちゃんに褒められちゃったよ。
でも手加減はしたんだけどな～。でも弾幕ごっこは何となく分かったかな。
誰か天測で勝負してくれる人居ないかな～。

幽閉

夏の始め……人里では紅い霧が徐々にではあるが蔓延していた。
キシに人里の皆をなるべく外に出さない様にして置いてと頼んだので今頃はプリニーが家から出ないと指示して体調が悪い者はプリニー医療班が頑張ってくれているだろう。
原作通りだとすれば霊夢達が異変の解決に行くのはもう数日先の話。
そして所変わって、私の神社。
「紫、其処にいるんでしょ？出て来て」
「何の用かしら？芽衣」
「紫の事だしこの異変の首謀者と繋がっているんでしょ？内容は貴方はスペルカードルールを広める為に首謀者は幻想郷の挨拶って所かな？」
「……貴方、心を読むより未来を読むの方が正しいんじゃないかしら？」
「そうかもしれないし、違うかもしれないよ」
「まぁ……いいわ。ええ、そうよ。私は首謀者と繋がっている、内容も殆ど合っているわ。後は霊夢が動けば完全に異変となるのよ、だから貴方は手出し無用でお願い出来ないかしら？」
「う～ん、そうだね。なら異変解決では無く挨拶だったら、どう？」
「それなら構わないわ。あまり騒がないでくれたら嬉しいわ」
「私の中での予想外の出来事が起こらなきゃ、何も起こらないよ」
そう言うと紫はスキマを閉じて消えてしまった。
「ま、フランが元気かどうか見に行くだけなんだけどね」
私は紅魔館のある場所へと移動を開始した。

～森の中～
「貴方は食べても良い人間？」
私は早速、ルーミアちゃんと遭遇していた。
「（多分物理的に）食べれない人間だよ」
「そーなのかー。でもお腹が減ったのだー」
「じゃあ、これでも食べる？」
芽衣が差し出したのは、キシ特製のお弁当。
「食べるのだー」
ムシャムシャ、ガツガツ……
ルーミアは夢中になり弁当を食べ始めた。仮にも数億年も料理をしてきた人の弁当だ、不味い訳が無い。
「美味いのだー」
「それは良かった、作った人にそう伝えとくよ」
「お前は良い人間なのだー」
「それは、どうも」
「それじゃあ、ばいばいなのだー」
ルーミアちゃんはそう言ってふよふよと飛んで行ってしまった。

～霧の湖～
私は森を抜けて湖に来た。
だがしかし、一向にあの氷精が来る気配が無い。
そう周りを見渡すと木の根元で体育座りをして座っている妖精が居る。耳を澄ますと泣いている様だ。見た感じチルノちゃんの様だ。
「どうしたの？こんな所で泣いて？」
「……ぐすっ…みんな、あたいをばかにするんだ……」
「庇ってくれる友達は居ないの？」

「……？」
「だから、それを言われたりした時に守ってくれる様な友達がいる？って事」
「……大ちゃんとかが…」
「それなら泣く事なんて無いよ、守ってくれる友達がいるならそれでいいじゃないか、それにだったら笑わないと！」
「……どうして？」
「その友達がした事が無意味になっちゃうからさ、ほら噂をすれば」
するとと湖の方から一人の妖精がチルノちゃんに近づいて来た。
「チルノちゃん！何処行ってたの!?探したんだよ！」
「ご、ごめん。大ちゃん」
私はそれを見てその場から離れ様とする。
「ま、待って！」
「？」
「あ、あの……ありがとう……あたい、いつか友達を守れるような最強になる！」
「ふふふ、それは良い事だね。そうだ！………ならこれをあげるよ」
私は即席で作ったスペルカードをチルノちゃんに渡す。
ふふ、これは未来の強いチルノちゃんを自分と入れ替える事が出来る。
特製、１０年後スペルカード。さっき思いついた。
「……し、しんふ?…アドバンスチルノ?…何これ？」
「それはね、本当に友達が危険な事になった時に使いなよ。まぁ、弾幕ごっこでも使って良いけどね。じゃ、また何処かで」
私は湖を飛んで紅い屋敷に飛んで行った。
「チルノちゃん、さっきの人は誰なの？」
「……あたいの師匠…かな？」
「そんなんだ…あ、そうだ！チルノちゃん、さっきのね――――」

「この屋敷に来るのも数百年ぶりだな～……相変わらず美鈴は寝てるけど」
「ＺＺＺ……はっ！ね、寝てませんよ！」
「あ、起きた」
「あれ？貴方は……星羅さん？」
「そだね」
「あ、貴方に頼みたい事があるんです!!」
　美鈴が顔を寄せてくる。普通の頼み事では無さそうだ。
「今、このお屋敷の主はレミリアお嬢様なんですが…その…」
「ん？」
「妹様を地下に幽閉させてるんです……」
「……え？」
　どういう事なの？フランは狂気も消えたし普通の吸血鬼として生活出来た筈なのに……。
「何かあったの？」
「はい、実は――――と言う訳でして…」
　ふむふむ、美鈴の言う事によると、私が居なくなって後、エクスが病で死んでレミリアが当主になりフランを幽閉したと、理由はあの子は狂ってると……でも狂気は消えているとレミリアに説明をしたが聞いて貰えない。原因は子供の頃、お父様（エクス）の腕をフランが吹っ飛ばしたのを目撃したからだと、その時からフランをずっと狂っていると思い込んでいる。フランの話も聞かない。
　唯一の妹をそんな事で数百年も幽閉したのか。
　だけど気持ちが理解出来なくもない。
　確かに父親の腕を吹っ飛ばされる所を見たらトラウマ物だ。

「!?……星羅さん、どうか落ち着いて……」
「……大丈夫、私は落ち着いているよ」
少し怒りそうにもなったが直ぐにその気持ちは消えた。
怒りより悲しさが心を満たしたからだ。
あの時、フランだけじゃなくレミリアも精神分析していれば良かった…。
「……星羅さん。中では新しく紅魔館に入ったメイド長の咲夜さんがいます。彼女はレミリアお嬢様の命令なら何でも聞きます。とても強いですよ」
「……分かった」
主を正すのは周りの役目……でもキシなら私が間違った方向に進んだら正してくれるのだろうか…?今度聞いてみよう。
「妹様の事…頼みます……」

あ〜あ、本当は様子を見に来るだけだったのにな〜。
でもフランはこの数百年、何も悪い事なんてしていないのに幽閉……ね。
それは流石に悲しすぎる…何もしなかった私に怒りが芽生える。
私は紅魔館に強力な結界を貼り外に自分の力が漏れ出さない様にした。
さてと……本気の半分って所かな……やりますか……荒療治だけど。
今の私はスパルタだよ。

間違った思い込み

私は美鈴に頼まれてフランちゃんを助ける事になった。
ついでにレミリアを教育する。私の本当の目的は別にあるけど。
「先にフランちゃんの様子でも見に行こうかな、心配だし。でも途中で咲夜さんが来るだろうな～」
私は前に来た時と同じ道を通り地下室に向かった。
空間を操られていて広くなっていたがそれを通る時、空間を戻していたので関係無かった。
幽閉しているなら、其処に閉じ込められている筈だから。
そして何事も無く地下室の扉の前まで来れた。
そう、何事も無く。
（……何で咲夜さんが来ないんだろう、私の侵入には気づいている筈なのに……まぁ、いいか）
扉には見て分かるぐらいの魔方陣が描かれていた。だがどれも描かれているだけだ。
（パチュリー…フランちゃんがいつでも一人で出れる様にしたんだ、てっきりレミリア側だと思ったよ。さり気ない優しさが目立つね。サンキューパッチェ）

「むきゅ？」
「どうしました？パチュリー様」
「今、誰かに何か言われた様な……気のせいね」
「そうですか」

そして芽衣は地下室の扉を開ける。何の障害も無い。
部屋の中には前とは違い人形の残骸や動物で在ったと思われる破片、床にまき散らされた血などは無かった。在るのは新品では無いが、傷一つ無い人形と其処に座っているフランちゃん自身だけだった。

（やっぱり、狂気は無い。なのに……）
芽衣は考えるのを止めてフランちゃんに近寄り声を掛ける。
「フランちゃん？大丈夫？」
フランちゃんは首を少し動かし小さく呟いた。
「私……いい子に…してたよ…」
フランちゃんはそう呟き、意識を失う。眠っただけの様だ。
「……フラン…」
その時、芽衣の中で何かが固まった。
「……レミリアの所に行こう」

私がレミリアの所に行く途中、一人の女性が現れた。
「待ちなさい！侵入者！」
其処には『時を操る程度の能力』を持っている十六夜咲夜だった。
だが見るからにボロボロだ。
だが私はそれを華麗にスルーする。
「待ちなさいと言っているでしょう!!」
咲夜ちゃんからナイフが投げられる。それは私の頬を掠める。
「何？」
「何？……ではないです。この館に何の用ですか？それとも門番に何か頼まれたのですか？倒しても何も言わないので」
私がフランちゃんの所に行く時に咲夜ちゃんが出なかったのは美鈴と戦っていたからなのか。
「……此処の主を教育しに」
「そうですか、貴方はただの侵入者ですね？」
「侵入者だね」
「なら……殺しても問題はありませんね」
そして咲夜ちゃんは『時』を止める。
「一瞬で串刺しです」

咲夜はナイフを芽衣の周りに数十数百と投げる。
「さよなら」
時を動かし、そのままナイフが私にささ……らない。
「……こんにちは」
「なっ……！」
私はナイフを躱し咲夜ちゃんの目の前に立つ。
「何故、反応出来たの！……えっ？う、動けないっ……馬鹿なっ！」
「私が時を止めた」
某奇妙な冒険の様なセリフを吐いてポーズを取る。結構つらい。
そして私は咲夜ちゃんにデコピンをする。
「そして時は動き出す……やれやれだね」
咲夜ちゃんは壁に吸い込まれるように壁に激突して倒れる。
「う……」
「手加減はしたよ、怪我も直に治る。じゃ」
私は咲夜ちゃんを乗り越えレミリアの元に行く。

「よく来たな、人間。何の用だ？わざわざ食べられに来たのか？」
昔、エクスが座っていた場所にはレミリアが座っている。
エクスと比べれば威厳はミクロ程無い。
「いや、質問を答えて貰う為に来た」
「言ってみろ、なるべく答えてやるぞ。どうせ此処で死ぬのだからな」
「まず、一つ目。前の主はどうしたの？」
「……数百年前、病気で亡くなった」
「二つ目……何でフランを幽閉したの？」
レミリアの目が見開く。
「何故、お前が知っている？」
「答えて」
「……あいつは……フランは……狂っている！自身の父親を殺そうと

したんだぞ！フランは……！私の……！」
「それでフランは幽閉された」
「ええ、その時に、でも数年後にあいつは外に出てきてた！父様に聞いたら、もう暴れる心配は無いって！でも…そんなの信じられない！」
「……フランの話は聞いたの？」
「聞く訳無いじゃない！フランは狂ってるのよ」
……相当なトラウマになっているんだ。
でもそれは気づこうと思えば気づけた筈だ。
レミリアは現実から目を背けているだけだ。
「そろそろ、戦おうか。戦っている時に本当の事が解るよ、きっと」
「ふん、私もお前との会話に飽きて来た頃だ」
そして両者はそれぞれ、レミリアはグングニルを手に芽衣は退魔ノ剣を手に両者がぶつかり合う。
「それで本当の事ですって？何が本当なのか言ってみなさいよ！」
「じゃあ、言うけどフランは狂っていない」
「何を言っているの？フランは狂っている！」
剣と槍が擦れ合う。周りの壁などが悲鳴をあげている。
なので、さっきからぶつかり合う時、屋敷に大きな音が響いているだろう。
そのせいで、誰かが目を覚ましてしまうかも知れない。
「狂ってるのは貴方だよ、レミリア」
「！……私の名前を……私が狂っているってどういう事よ！」
「貴方は父親の言葉を信じなかった。あの時、もうフランは貴方と同じ普通の吸血鬼だった。なのに貴方はフランが狂気だと思い込んでいた、だから狂っている」
「違う」
「貴方は自分が主になったらフランを幽閉した！実の妹を！貴方の父親が生きていたら物凄く怒るでしょうね、そしてフランの実の姉に裏切られた気持ちも考えて見れば？きっと悲しみで心が潰れると思うけど」
「嘘よ・・ 嘘嘘嘘嘘嘘っ!!フランは狂っている!!!」

「現実を見ろ！レミリア！」
ガキンっ！
レミリアのグングニルが手から離れる。
「これで……終わりだよ……」
グシャ……

紅霧異変の解決者

グシャ……
「……え？」
レミリアの口から言葉が零れ落ちる。
剣を握っている芽衣の手が破壊されていたからだ。
いや、それよりもレミリアが注目したのはそれをした人物だ。
「なんで……貴方が此処にいるのよ…」
「……」
「フランっ!!……地下室には魔方陣が「それは私が壊したよ」」
「お姉様……離れて、危ない」
フランはレミリアと芽衣の間に入る。レミリアを背にして芽衣に言う。
「お姉様を本気で殺す気だったの？芽衣お姉ちゃん」
「……」
一瞬の沈黙の後、芽衣が放った言葉は、
「そうだよ」
刹那
どごおおおおおおんッ!!
フランは無意識の内に芽衣に本気の一撃を食らわしていた。
芽衣は避けもせず守ろうともせずフランの一撃を食らい壁を突き抜け外へと飛び出した。
「フラン……貴方、狂気が……」
レミリアは、ようやくフランが狂気ではないと感じ取った。
そしてフランはレミリアの近くに行きレミリアを抱きしめる。
「ごめんなさい、ごめんなさい。ちゃんと貴方の事を思っていれば…」
レミリアは泣きながらそう呟く。
「お姉様、私を……家族だと思ってくれる？」
「！……勿論よ、フラン」
「ありがとう、お姉様」

「いてて……骨が何本か折れちゃったよ。まぁ、直るからいいか」
私はフランちゃんに殴られて紅魔館から出て行った（物理）。
その時に私が貼った結界も壊れた。
「それにしても……上手くいったかな～？」
とその時、
「芽衣、貴方何やっているの？」
スキマから紫が出てきた。少し怒っている様にも感じる。
「結界は貼ってたんだけど……やっぱり見てた？」
「ええ、最初から最後まで」
「何で？」
「あ、芽衣の事が気になったとかじゃないからね！」
「そーなのかー」
「それよりも貴方、あれでいいの？」
「いいんじゃない？あれでハッピーエンドになったら」
「そう…確かにあの吸血鬼姉妹はハッピーエンドでしょうね、でも……貴方はどうかしら？」
「え？」
芽衣の顔はいつもの様に楽しそうではなく悲しそうな顔をしている。
いつも芽衣の顔を見ていた紫はそう感じ取った。
「……」
「無理し過ぎよ、自分を犠牲にして相手を助けるなんて。私はね、貴方のそんな顔を見たくないのよ。だから…」

「紫…いや、でもあのトラウマを治そうにも少し時間かかるしあれなら一瞬で仲直りまでいけるかな～って…」
紫の顔を見ると泣いていた。
「だから……貴方が傷つく様な…事はしないで……」
「……はぁ～…私もまだまだだね、たった一人の気持ちにも気づけないなんてね。それと……紫は笑っていた方が綺麗だよ」
!?芽衣は紫に近づき、頬に口をつけた。
「?!?!?」
「これで許してね♪ちゃんと異変解決の時に仲直りしとくからさ、じゃあね！」
そう言って芽衣は帰って行った。
一方、紫は……
「め、めめ芽衣が…綺麗って……それに…私の頬に……（ボンっ！）」
紫は顔を一瞬で赤らめて一言、発した。
「……次に芽衣と会う時、ちゃんと顔を合わせられるかしら…私…」
純情な心を持っていたスキマ妖怪でした。

数日後…
人里では、まだ赤い霧が蔓延しているのでプリニー達は最後の仕事の様に働いている。
勿論、キシが統制している。
だが、人里に二人の人間が訪れる。
プリニーに勿論、すぐに発見される。
「あっ！駄目っスよ、家から出たら！この霧は人間に取って害がある

んスから！」
「人里の様子を見に来たら妖怪だらけ……貴方達、覚悟はいいわね？」
「人里を襲うのは禁止されてるぜ、覚悟はいいか？」
一人は、紅白の巫女。もう一人は白黒の魔法使い。
……異変解決が始まった。
「え？何を……ってギャアーっス！」
「……避けられたわ」
「な、ななな何をするんスか！いきなり！」
霊夢が放った弾幕はプリニーの脇を掠った。
「お前達が人里を襲っているのが悪いんだぜ！」
「は？襲う？何を言っているのか分かんねーっスけど、一先ずキシさんに知らせた方が良いっスね、それじゃあ、お二人さん。さよならっス！」
プリニーは一目散に逃げていく。
だが二人もそれを追う。
「ちょ、待ちなさい！」
霊夢がプリニーの背中に弾幕を放とうとするが、魔理沙が止める。
「いや、待て霊夢。このまま追いかけて犯人を拝むとしようぜ」
「む……それもそうね。案内してくれるなら好都合ね、追いかけましょう」
そして二人はプリニーを追いかける。
「それにしてもな……まさか、人里を妖怪が襲っているとは思わなかったぜ…」
「ええ、この霧も関係しているのかしら？さっきキシとか何とか言っていたわよね？」
「きっと、そいつが犯人だな、っと着いたみたいだぜ。どんな奴何だろうな、わくわくするぜ」
「あんたねぇ…まぁいいわ。さっさとそいつを倒して異変解決と行きましょう」
そして二人はプリニーの近くにいた髪が白で執事服を着た奴に話しかけた。

「おい、あんたがこの異変の首謀者か？」
「誰だ、お前達は…」
「あ！さっきの！何で此処にいるんスか!?」
「あんたの後を付いて行っただけよ、それよりもあなたが人里を襲っていてかつ霧を出した犯人ね？」
「（お嬢様が言っていた異変解決の人間か…）」
「で、どうなんだ？」
「ふむ、違うと言ったらどうするんだ？」
「どうするも何も……怪しい奴は全員倒すわよ！」
「私も加勢するぜ、霊夢！」
「仕方ない…プリニー隊全員に伝達しろ、直ぐに撤収しろと」
「！……了解っス！」
　一匹のプリニーは他のプリニー達の方に向かって行った。
「いいのか？味方を行かして、二対一だぜ？」
「ふん、それぐらいではハンデすらならない。勝負は弾幕ごっこか？」
「ええ、その通りよ」
「なら……お嬢様に仕える身として負ける訳にはいかないのでな、覚悟してもらおう」
「行くわっ！」
「行くぜっ！」
　紅魔郷1ボス、最古の妖怪：キシ

異変解決？

「早速、全力全開！行くぜ！『魔砲「ファイナルマスタースパーク」』!!」
キシに超強力なレーザーが襲い掛かる。
「……真正面に撃つだけか？」
キシは体をレーザー範囲外ギリギリの所でグレイズする。
「へっ、甘く見るなよ。『恋心「ダブルスパーク」』!!」
すると先程、放たれたレーザーの先端が二つに分かれて戻ってくる。
「私の事も忘れないでね、『霊符「夢想封印」』」
そして霊夢からは色とりどりの大きめな光弾が次々と飛んでくる。
それに紛れてお札や魔理沙が放ったレーザーが一斉に襲い掛かる。
「……『圧符「超圧重力」』」
キシがスペルを発動した瞬間、キシに向かっていた弾幕は全て下に落ちて爆発した。
「お返しだ、『返符「表裏一体の空気風」』」
キシから鎌鼬の様な鋭い弾幕と霊夢達の上と横から遅い弾幕と速い弾幕が発射される。
「！……危ないじゃない！」
「っと……当たる所だったぜ」
霊夢と魔理沙は放たれた弾幕を全て躱した。が、
「まだスペルは終わっていないぞ」
「！」
避けた遅い弾幕と速い弾幕が鎌鼬の弾幕にぶつかると其処からまた新しい弾幕が襲う。
「ちっ、流石黒幕だぜ。一筋縄じゃいかないってか」
「それもそうねっと……」
やはり主人公チームは軽々弾幕を避ける。
其処に一匹のプリニーが現れる。先程のプリニーだ。
「全員に伝達完了したっス！」

「分かった、では帰るとしよう」
「ちょ…ちょっと待つんだぜ！」
「何だ？まだ用があるのか？」
「まだ弾幕ごっこが終わってないぜ！」
「……そうだな、なら終わらせるとしよう。『抗符「圧と圧」』」
　瞬間、霊夢と魔理沙の体は地面へとへばり付き上にはありとあらゆる弾幕が設置されており一気に落下してくる。
「『夢想封印』!!」
「『恋符「マスタースパーク」』!!」
　二人は同時にスペルを発動し、霊夢はありとあらゆるものから浮き脱出して魔理沙は弾幕全てを最大火力のマスパで相殺した。
「はぁ……はぁ…死ぬかと思ったぜ……」
「……同感ね」
「それよりもあいつは何処に行ったんだぜ？」
「さぁ？……あっちの方に行ったんじゃない？」
「あっちか？あっちは確か湖があるな」
「其処に吸血鬼の住んでいる館があるみたいなのよ、紫に聞いたわ」
「？……そうか！吸血鬼の所なら執事みたいな奴が一人や二人いてもおかしくないな」
「速く行くわよ」
「了解だぜ！」
　そして主人公二人は湖にある屋敷へと向かう……。

「この湖ってこんなに広かったっけ？」
「それよりも何か寒いんだぜ、こういう時は大抵妖精の仕業だって相場が決まっているぜ」
「傍迷惑な相場だわ……」
「お！やっぱｒ……何だ？お前」

霊夢達の前には水色の髪を背中の方まで伸ばして口で煙草？を吸っている女性がいた。
だが背中には氷の翼が生えている。
「貴方……妖精？」
「ああ、そうだよ。通りすがりの氷妖精のチルノさ、霊夢に魔理沙」
「!?……どうして私達の名前を？」
「さぁ？何でかな」
「っ…いいわ、弾幕ごっこで吐かせてあげるわ。魔理沙は手を出さないでよ」
「分かったぜ」
「…懐かしいね、昔もこんな感じだったんだっけ……」
「？…どういう意味？」
「何でもない」
「そう……始めるわよ！」
「お先にどうぞ」
「『神霊「夢想封印　瞬」』！」
霊夢は高速で移動しつつ札をばら撒きながら光弾を放つ。
チルノはそれを簡単に避けながらスペルを発動する。
「なら私も『氷符「白の世界」』」
チルノ？は一面真っ白な弾幕を貼る一見、変哲もないただの弾幕だが明らかに弾幕の数が減らない。
弾幕はＬｕｎａｔｉｃだ。
「耐久ね」
「正解」
白い弾幕が霊夢を襲う。見ているだけで目が疲れる白さだ。
「くっ……貴方、本当に何者よ」
「そうだね……言うとすれば現代入りした妖精って所かな」
「よく分からないわ、簡単に説明してくれる？」
「簡単に……じゃあ、もしも此処にいる私が一時的に此処にいるとしたら？」
「一時的？」

「そう」
「てことは貴方は誰かに此処に呼ばれたか召喚されたのね、でもそれだと私達を知っている理由が……」
「あ…もう時間みたい」
「え？」
ボンっ！
突然、チルノ？が爆発したと思うと其処には小さな氷妖精がいた。
気絶しているが…。
「……こいつがアレを召喚…いや憑依させていたのかしら？でもそれだと……」
「おーい、霊夢ー。終わったのかー？」
「…まぁ、どうでもいいことね。ええ！終わったわよ！」
「そっか、なら早く行こうぜ」
「そうね、行きましょ」

「これで……終わりよ（だぜ）っ！」
ピチューン×２
霊夢と魔理沙は異変の首謀者、レミリアとフランを弾幕ごっこで倒した。
「はぁ……負けちゃったわね、これで二回目ね人間に負けるのは…人間だったかしら？」
「…芽衣お姉ちゃんは人間だよ……多分」
「何か喋っている所悪いけど早くこの霧を戻してくれないかしら？」
「仕方ないわね……はい、これで霧は無くなったわよ」
「そうか、ならこれで月も……」
その場にいる全員が空を見上げた。
其処には真ん丸な黄色い月ではなく紅い月が夜空を制している。

「どういう…こと…？」
「何…これ…」
「なんだぜ……この月は…」
「……」
　今、夜空を制している月は先程まで見えていた月の数倍大きかった。
「どういう事？霧を戻すと副作用で月が紅くでかくなるの？」
「いくら私が吸血鬼だからってこんな事は出来ないわよ！」
　レミリアは自分は何もしていないと言う。
　なら誰がこんな事をするんだと思うが……霊夢達は。
「てことは……」
「まだ…異変は続いているってことね」
「あ…そういえば此処に執事は居ないのか？メイドばっかりだったが…それにペンギン？も」
「執事なんて一人も居ないわよ……それにペンギン？なんて知らないわよ」
「う～ん、だとしたらあいつ等は別の主の所ってか、霊夢ー、心辺りはあるかー？」
「……向こうの方でかなりの数の妖怪が集まっているわ、けど少しずつ消えている」
「おお、じゃあ其処に行けば良いって事か！」
「……多分ね（でも、あそこは芽衣さんの神社近く……まさかね）」
　紅霧異変が終わり新たな異変開始。

紅月異変

紅い月……それを見るのはプリニーにとって人生で最初で最後の日だ。
まず、プリニーとは妖怪でありながらも幽霊でもある。ただの魂なのだ。
前世で罪を犯した者、それがプリニー。
彼らは罪を償う為に働き罪を償う。そして罪を償うと紅い月で魂が浄化する。
そうプリニーにとっては終わりだが新しい魂の始まりでもある……
「で、何であたいが呼ばれたんだい？」
音妖神社、境内。其処に一人の死神と人間が立っている。
芽衣と小野塚小町だ。
「立会人が必要なんだよ、本当は死神が魂を連れて行くんだけど彼等はいらない。自分達で成仏が出来るからね、あ…自己紹介してなかったね。私は芽衣、よろしく」
「あたいは小野塚小町、知ってのとおり死神だよ。でも私は船で魂を運ぶだけだからね～。それと立会人？どうして？」
「名目上仕方ないんだよ、死神の立会が」
「なら仕方ないね。見てるだけでいいんだろう？面倒事じゃなければいいさ。後お茶貰うよ」
「お好きにどうぞ」
小町っちゃんは縁側に座りお茶を飲みながら話しかけてくる。
「それにしても……此処までするかねぇ……」
「？」
「いや、何でもないさ」
「あ……プリニー達が飛び立っていくね」
「……あれで成仏出来るのかねぇ…」
「出来るよ、絶対に」

「そうかい、それなら良いさ」

所変わって音妖神社近くの森。
「ああっ！もう！何なのよ！鬱陶しいったらありゃしない！」
霊夢達は音妖神社に行こうとするが途中で詩音が立ち塞がる。
周りにいる神話生物は弾幕を張る。大方芽衣か詩音が教えたのだろう。
「だから～、今は大事な儀式中なんですから駄目なんですって～」
「儀式だか何だか知らんが其処をどいて貰うぜ！」
「ああ……何でこうなるんですか……」
「『霊符「博麗幻影」』」
「『魔符「スターダスト」』」
「あわわ……『混符「漏洩した神々の力」』！」
霊夢と魔理沙の放った弾幕は詩音の弾幕と色々と凄い事になっている。
三人共、避けるのに集中する。
近くにいた護神話生物は流れ弾に当たり消える。
力は五分五分と言った所だろう……多分。
「ふぅ……中々タフね」
「母上の為なら頑張りますよ！」
「母上？それって芽衣さんの事か？」
「ええ、そうですよ」
「へぇ～、お前って芽衣さんの子供なのか」
「いえ…子供では無いんですが……」
「なら何よ？」
「あーうー……何だっていいじゃないですか！『禁符「全ては終わり、そして始まる」』！」

発動した瞬間、霊夢達に悪寒が走る。
この弾幕に当たれば自分の何かが確実に壊れると……。
事実、詩音が放つ弾幕は全て禍々しいオーラを放っている。本人も禍々しく見える。
今、詩音の目を直視すれば人間として大事な物を失うだろう、それほど禍々しい。
「魔理沙!!絶対にこれに当たったら駄目よ!!それとあの巫女の目を見たらタダじゃ済まないわよっ！」
「そんなの分かってるぜ!!!」
二人は詩音と目を合わせない様にしながら弾幕を確実に避ける。
「まだ続きますよ！『連符「全ての感情入り混じる音楽」』!!」
詩音は続けざまにスペルを宣言する。
今度は聴くだけで精神が崩壊する様な攻撃だ。
「魔理沙！耳を塞ぎなさい！」
「もう塞いでるぜ！」
戦闘は霊夢達が防戦一方で中々終わらない。
「魔理沙！攻撃が終わったら一気に決めるわよ！こんな事を繰り返してたら頭がどうにかなりそうだわ！」
「それには私も同感だぜ！」
そして詩音のスペルが終わる数秒前……
「3…2…1……今よ!!『力符「陰陽玉将」』！」
「終わりだぜっ！『星符「ドラゴンメテオ」』！」
「へ？きゃあああああ！」
ピチューン
「はぁ……やっと終わったわね。目と耳に悪いスペルだったわね」
「やっぱり、黒幕は芽衣さんって事か……」
「ええ、そうみたいね」
「あの人に勝てるかな……なぁ、あの儀式って奴が終われば異変も収まるんじゃ……」
「あんたが弱気になってどうすんのよ、まさか怖気づいたの？」
「馬鹿言え！誰が怖気つくか！」

「なら、行くわよ」
「分かったぜ……」
霊夢と魔理沙は詩音の屍（笑）を乗り越え先に行く。目指すは音妖神社、芽衣の所だ。

「う～……動けないです～……アブホースさ～ん…」
詩音がその名前を口にすると変哲のない普通の地面から「ゴボッ、ゴボ」などと音を立てて水溜りの様なものが詩音の体を包み込みそして、またアブホースと呼ばれる水溜りは地面へと消えていった。
そしてその場には誰もいなくなった……。

「む……詩音の霊力が消えた……？…いや地中に潜っただけか」
と其処に立会人の小町がやって来る。
「おや？どうしたんだい？」
「いえ、家の巫女が何者かに撃破された様なので……」
「ほう、それはこの儀式を邪魔しに来る奴らでいいのかい？」
「ええ、恐らく。異変解決者達でしょう」
「なら、立会人の私も無視する訳には行かないね」
小町は自分の持っている大鎌を地面に刺して溜息を吐く。
「それは大変、嬉しい事なのですが……貴方は面倒事が嫌なのでは？」
「あたしはこれでも死神だよ？霊が成仏するなら手伝うさ、それに霊がいたら仕事が増えるしね」
「死神が仲間とは心強いですね」
「あんたの方が心強いよ、最古の妖怪さん」

そして……
「いたな……執事……」
「芽衣さんの所に案内して貰うわよ！」
だが見るからに彼らは身体的にボロボロで詩音と戦ったというなら精神的にもボロボロだ。
「随分と詩音にやられたみたいだな、だが情けをかけてやるほど私は甘くないぞ？天測ルールだ」
「私もそっちの方がやりやすいからね～、じゃ私も天測で」
「死神に執事、変な組み合わせね」
「そうだな」
「それに天測…仕方ないわね……魔理沙？大丈夫？」
「多分……いや、大丈夫だぜ！」
ＥＸＴＲＡボス：小野塚小町＆キシ　天測ルール
そして四人はスペルカードを構える……

執事と死神と主人公

先に動いたのは霊夢だった。
「(此処は先にスペルを…)『珠符!「明珠あｎ…』!?」
突然、霊夢はスペルを発動するのをやめた。
何故なら目の前に死神、小町が突如として現れたからだ。
瞬きをする暇も無かっただろう。
「何時の間にっ……!!」
刹那、霊夢の腹に衝撃が走る。
小町が軽く殴った様だ。そしてそのまま小町は持っていた小銭を霊夢に当て消える。
「っつ…!何処へ……」
「こっちだよ」
「!」
小町は霊夢の頭上に飛んでおり鎌を振りかざしていた。
だが霊夢も持っていたお祓い棒で鎌を受け流す。
だが、まだ小町の攻撃が何度も続く。
「霊夢!」
「仲間の心配をしている場合か?」
「ぐっ……!」
キシはあり得ない動きをしながら魔理沙を翻弄し攻撃をする。
しかし一瞬、隙が空く。今まで完璧な動きをしていたのでその一瞬が一際目立った。
それに魔理沙も気づく。
「!…今だぜ!『魔符「スターダストレヴァリエ」』」
「ふっ……甘いな」
しかし、それは罠だった。
バギンッ!
魔理沙が箒に乗り突撃して来たがキシはそれを読んでいたが如く拳で箒を叩き落とす。

「あぐっ…」
「終わりだ」
魔理沙が地面に叩き付けられバウンドした所にキシの拳が迫る。
「魔理沙っ！」
其処に小町と戦っていた霊夢が魔理沙を助けに間に入る。
だが其処に小町の追撃が入る。
「逃がしゃしないよ！」
小町は霊夢を一閃しようと飛びかかる。
キシは魔理沙に止めの一撃を…
「終わりなのは貴方たちよ、『亜空穴』」
霊夢は魔理沙を抱え後方にワープする。
だがキシ達はお互いに攻撃をしようとしていた、攻撃の勢いを殺す事は出来ない。
いや、勢いを殺すというより勢いが更に増した。
「！…どういう事？」
そして小町は能力を使う。
「脱魂の儀」
小町の能力は『距離を操る程度の能力』
自身の居る地点と目的地との距離を自由に制御できる。
その能力の応用で小町は自分と霊夢の位置を入れ替えた。
「!?」
バギンっ！
霊夢は感でお祓い棒を構えていた為、ダメージは無かった。だがお祓い棒は無残に折れてしまった。
「ちっ……流石は博麗の巫女、これも対応するか…」
「……当然よ…」
口では強く言う霊夢だがそれも満身創痍でしかない。
その時、
「『魔砲「　ファイナルマスタースパアアアアアアアアアアアアアアアアアアク!!」』」
「え？ちょ……キャアアアアアアアアア！」

周りに魔理沙の声が響く。そして喰らったのは小町。
霊夢は小町と入れ替わる瞬間、魔理沙を離したのだ。それにはキシも驚く。
だがキシにとってはそれは重要では無い。そのレーザーの行く先だ。
「(!向こうはお嬢様とプリニーの……止めねば!!)」
キシはレーザーの先端へ身体能力を全開にして移動する。
そしてレーザーを素手で受け止める。
「これしきっ……!どうという事は無い!!」
キシは腕に妖力を纏わせレーザーを粉砕する。
「!」
霊夢と魔理沙はその光景を見たがあまり放心状態に陥っていた。
そう圧倒的な力の差を目の当たりにしたのだ。
霊夢は自分の前から一瞬で消えレーザーの先端に行き多大な妖力を使い粉砕した理由で
魔理沙は自分の最大パワーの技を素手で粉砕された理由で
どちらも戦意喪失している。儀式も終わった様だ。赤い月が元の月に戻る。
「終わりか……おい、死神」
キシの下には焼け焦げた死神、小町が寝ていた。
「……何だい?」
「儀式は無事に終わった様だ……ご苦労だった、協力感謝する」
「そうかい、終わったかい。ならあたいは帰るとするよ」
そう言い、小町は帰って行く。
と其処に芽衣が帰って来る。
「ふぅ……疲れた。プリニーの数が多くて結構時間がかかっちゃったね、あれ?小町は?それと其処にいる霊夢達はどうしたの?」
「小町様は先程、お帰りになられました。それと霊夢様達は私と戦い戦意喪失しております」
「小町帰っちゃったのか…。それと霊夢ちゃん達に終わった事を告げないとね」

私は霊夢ちゃん達の近くに歩いて行く、そして霊夢ちゃんはやっと正気に戻る。
「……っ!!」
「待って、待って！戦う気は無いって！」
「…芽衣さん？」
「そう、芽衣さんだよー」
「異変は…」
「完全に終わったよー」
「……はぁ…」
霊夢ちゃんは全身の力が抜けた様に地面に座り込む。
「それで、一体芽衣さんは何がしたかったんですか？」
「聞いてないの？プリｎ…妖怪を成仏させる為に赤い月にしていたんだよ」
「……はぁ」
霊夢は二度目の溜息を吐く。
もっと話を聞いていれば良かったと自分で嘆く。
とそんな事をしていると、
「ご飯はまだあああああああああ!?」
家の方から聞こえて来る声、妖精のパウだ。
「……キシ、ご飯の準備しに行ってあげて」
「……分かりました」
「霊夢ちゃん達もどう？一緒にご飯？」
「え？でも…」
「遠慮はいらないよ？」
「それじゃあ、お言葉に甘えて……」
「私も食べるぜ！」
魔理沙が放心から復活。
「多い方がいいからね、じゃあ案内するよ」
私は家に二人を案内する。詩音も帰ってきた。
そして少し遅れた夕飯を皆で食べた。
霊夢ちゃんと魔理沙ちゃんは明日博麗神社で宴会をすると言って

いた。
私はそれを承諾して明日の宴会に行くと返した。

キシが夕飯の準備をする前…
「其処のプリニー、出てこい。居るのは分かっている」
「……」
木の陰から一匹のプリニーが出てきた。
「お前は……人里の時のプリニーか。まぁいい。何故他の奴と一緒に成仏しなかった？」
「お、俺は……芽衣さんとキシさんにお仕えするのが生き甲斐でしたっス！だから成仏しないで此処に残って手伝いをするって決めてたんっス！まだお二人に恩を返しきれてないっすから！」
プリニーはそう断言する。
「ふむ……それは私とお嬢様が認めなければ意味が無い決断だな」
「そ、そんな～っス……」
「だが、まぁいいだろう。お前には力尽きるまで一生、働いて貰うとしよう」
「あ、ありがとうございますっス！命を捧げるつもりで働くっス！」
「よろしい、では行くぞ」
「はいっス！」

宴会

宴会当日、私は朝から霊夢ちゃんの所へと訪れていた。
「霊夢ちゃん、おはよう！朝から頑張っているね～」
「あ、芽衣さん。おはようございます」
そう言い、頭を下げる霊夢ちゃん。
どうやら朝から宴会の準備をしている様だ。
「大変そうだね、手伝おうか？」
「いえ、大丈夫です。芽衣さんは夜に来て貰えれば大丈夫です」
私は少し残念な気持ちになる。
色々迷惑かけちゃったからお返ししたかったんだけど…
「じゃあ、また夜に来るね」
と残して何処かへ歩いて行った。
「はぁ…本当は手伝って貰いたかったけど、つい断っちゃったわ。なんでかしら？」
「おっす！霊夢ー！大変そうだなー」
「あっ！魔理沙！良い所に来てくれたわね、早速だけど「面倒だから手伝わないぜ」そう、なら…弾幕勝負よ！勝ったら手伝って貰うからね！」
「いいぜ、丁度暇だったからな。受けて立つぜ！」
その後、嫌々手伝わされた魔理沙が見られたとかなんとか…
「不幸だぜえええ!!」
「何叫んでんのよ、口より手を動かしなさいよ」
「ぐぐぐ……」

その頃、
「此処どこだろう？」
私は現在、真っ暗な闇の中を歩いていた。
「えーと……さっき霊夢ちゃんに会ってその後神社の後ろの森で寝てたルーミアちゃんに近づいてどんな夢を見てるんだろうーって見ようとしたら真っ暗、これ夢じゃないよね？」
自分のほっぺをつねっても何の変化も無い。
なら考えられるとすれば心の中なのかな？私が間違えてルーミアちゃんの心の中に入ったって事かな。
でも全部真っ黒なんだけど……。まぁ、面白そうだし探索しよう。
それから数分、探索していると……
「あ、家がある。明かりも点いている」
私は迷わずにその家のドアを開けて入ると其処には髪が長くなり身長が大きくなったルーミア？が本を読んで座っていた。だが私はこの人物の記憶が残っている。あの夜に会ったルーミア？そのまんまなのだ。
「あら？こんな所にお客さんなんて初めてね、どうぞ」
目の前にいるルーミア？は自分の前の椅子に座る事を促す。
私もそれに応じる。
「ありがとう、私は星羅芽衣。……覚えてる？あの夜に会った事」
「ああ、あの時の人間さんね。覚えているわよ勿論、あの夜に私は封印されたんだから」
ルーミア？は読んでいた本を机の上に置き、自己紹介を始める。
「私の名前はルーミア。炫耀（げんよう）のルーミアよ、宜しく」
「炫耀？確か光り輝くとかそんな感じの…」
「そう、その炫耀よ。……なんで？って感じかしら？」
「いや、はっきり分かったよ。あのルーミアとは別人だけど別人じゃないって事でしょ？」
「そういう事、あの時封印されたのはこの私、光のルーミア。そして封印された私に代わって出て来たのは闇のルーミアよ」

そして追加する様に「私の能力は『光を操る程度の能力』よ、見事に逆でしょ？」とくすくす笑う。
それに対し私も「そうだね」と笑う。
「貴方はどうして此処に？」
「ルーミアの夢を見ようとしたら此処に着いちゃった」
ルーミアは笑いながら、
「あはは！面白いわね、貴方って本当に人間？」
「人間だよ、普通の」
「普通の人間はこんな所に来ないって」
「そう？」
「そうよ」
「ところで、ルーミア。外に出たいと思わないの？」
「外？いいわよ、別に。出ようと思えば出れるし」
「封印は？」
「貴方が此処に来たから解けたわ」
私は「へー」と言う。
別に解けたからと言ってどうもしない。
普通に良い人？っぽいし。
「それじゃ、そろそろ出るね」
「また来てね、今度はお茶を用意しとくわ」
「ルーミアが来ればいいんだよ」
「それもそうね」
「じゃ、またね」
「ええ、さようなら」
私は自分の瞼を閉じてから数秒経って瞼を開けると其処には子供のルーミアが寝ていた。
「(戻ってこれたね、じゃあまた夜まで暇を潰そう。次はチルノ達にでも会いに行こうかな)」

霧の湖周辺…
ここ等はいつも妖精の遊び場となっており妖精の目撃が多数有る。
其処に二人の妖精が遊んでいた。
「へっへー！これで１４匹目！」
「やめなよチルノちゃん……蛙が可哀想だよ……」
チルノちゃんは蛙を凍らしてピラミッドの様に積み上げて遊んでおりそれを見ている大ちゃんが止めようとしていた。だがチルノちゃんは止める気配が無い。
「さーてと、次はどの蛙を凍らせようかな～」
「何やってるの？」
「何って、蛙を凍らしｔ……師匠！」
「こんにちは、チルノちゃん。元気してた？」
「あたいはいつも元気だよ！」
そう言って、無い胸を張る。
「それで？何をやっているんだって？」
「蛙を凍らせてた！」
「そう、じゃあお仕置きしないとね」
「へ？」
芽衣はチルノのおでこに指をやり
ぱあんっ!!
デコピンをした。だが周りにはデコピンとは言えない程の音が響く。
チルノちゃんは「シッショー」と叫んで宙を舞い地面に落ちた。
大ちゃんはただそれを呆然と見ていた。
「はぁ……こんなにも蛙を凍らせちゃって……諏訪子って確か蛙が好きなんだっけ？この状況見たら発狂しかねないな～」
私は一つ一つ凍った蛙を元に戻していく。戻された蛙は芽衣にお

礼をする様に鳴き声を発して去っていく。
　私は全部の蛙を元に戻すと大ちゃんに近づく。
「こんにちは、私の名前は星羅芽衣。人間だよ」
「に、人間？…あっ！わ、私は大妖精です。皆からは大ちゃんって呼ばれています。……貴方がチルノちゃんが言っていた師匠さんですか？」
「え？……そうだね」
「何ですか、今の間は」
「あはは、別にいいでしょ。それよりチルノちゃんの友達ならちゃんと駄目な事は止めないと駄目だよ？」
「あ、は、はい」
「じゃあ、これを上げるよ。甘くて美味しいよ」
　私は服のポケットから二つの飴玉を出す。
　私特製、一時間飴。
　一時間舐めれば無くなる飴だけど五分毎に味が変わる不思議な飴なのだ！
　ただし中にはワカメの味噌汁味とか誰得な味があるのだ！
「あ、ありがとうございます……」
「もう一つはチルノちゃんの分ね、じゃ、またね」
「え？あ！……行っちゃった…。なんか不思議な人だったな……」
「う～ん……あれ？あたい何してたんだっけ？」
　と此処で先程まで伸びていたチルノが目を覚ました。
「そうだ！蛙を凍らせてたんだ！」
「あ、チルノちゃん…」
「ん？どうしたの、大ちゃん」
「蛙を凍らせるよりコレ食べようよ」
　大妖精は先程貰った飴玉をチルノに差し出す。
「何それ？」
「甘くて美味しいんだって」
「へー、蛙よりそっちの方がいいかもね」
「（……初めてチルノちゃんの悪戯を止められたかも）」

そんな事を思っていた大妖精だった。

私が着く頃には既に宴会は始まっていた。
様々な妖怪は勿論、人間の姿も見られる。
しかし人間と言っても妖怪と弾幕ごっこが出来る少数の人間達だけだ。
里の人達は妖怪を怖がり来ない。
と其処にこの事件の首謀者とそれを利用した儀式を行っていた人物が出会う。
レミリアと私だ。気まずいのか間に沈黙が流れる。
「……」
「……」
そしてその沈黙を最初に破ったのは私だ。
「えーと……ゴメン!」
私は両手を合わせて頭を軽く下げる。
それに対してレミリアは…
「……はぁ…貴方、不器用だって言われた事無いかしら?」
「?……あんまり無いけど」
「全部美鈴から聞いたわ、私達の関係を直す為にあんな事をしてくれたらしいじゃない」
「あははー……」
「もっと他にやり方があったんじゃないかしら?」
「えー……レミリアのトラウマがあまりにも深かったから……」
「全部、演技だったって事でしょ?私を殺そうとした事も、私を殺そうとする振りをしてフランを幽閉してある地下まで聞こえる攻撃音を

出してフランを呼び寄せて……全部計算の内何でしょ？」
　私は「そうだねー」と大分昔の事の様に思い出す。
「まぁ、それはそれとして。フランちゃん達は？」
「ああ、フランは貴方と会うのが怖くてお留守番。パチュリーは図書館に引き籠り。美鈴は門番やってるわ……多分。咲夜は空気を呼んで向こうの方で誰かと話しているわよ」
「へぇー、ならフランちゃんにいつでも神社に遊びにおいでって言って置いて」
「はいはい、分かったわよ。それじゃ、宴会を楽しみましょうか」
「そうだね」
　その場を立ち去ろうとする私にレミリアが声をかける。
「あ、ちょっと待ちなさいよ」
「？」
「その……今回の事は……ありがとう」
　レミリアは恥ずかしそうに小声でお礼を言ってきた。
「ふふっ……どういたしまして」
　私もそれをちゃんと返し霊夢ちゃんの所へと向かう。

　私が霊夢ちゃんの近くに行くと霊夢ちゃんも九尾の妖怪も気づく。
「ごめんね、霊夢ちゃん。遅れちゃった」
「あ、やっと来てくれましたか。皆、もう始めちゃってますよ」
「まぁ、私を待っている必要なんて無いでしょ」
「それはそうですけど……」
「所で、隣の方は？」
「ああ、こいｔ……こっちは紫の式神だそうです」

「どうも、紫様の式神をしている八雲藍だ。宜しく。貴方が紫様の言っていた芽衣殿か？」
「あ、うん。そうだよ」
　私は心の中で原作だと皆、敬語なんて使って無かった様な…何で私だけに使うんだろうと思う。
　だがそれは芽衣の圧倒的な存在感と気配で大抵の人は自然的に敬語になってしまうのだ。
　長年、芽衣という人物と関わらなければ敬語は外せないだろう。
「……それで話と言うのはですね…」
　私がそんな事を思っている内に藍は話をしていた。
　慌てて私は藍の話を聞く。
「最近、紫様の様子がおかしいんです」
「「紫が？」」
　霊夢ちゃんと私が同時に疑問を抱く。
「はい。突然何かを思い出すと顔が赤くなり布団に包まってしまうんです」
「布団に包まってるのはいつもの事じゃない」
「霊夢ちゃん……そっちの事じゃないと思うよ？」
　それにしても…何かを思い出すと顔が赤くなるね～……何かあったっけ？
「まぁ、問題は無いんじゃない？」
「そうよ、紫の事だもの。何か変なことして失敗でもしたんじゃない？考えすぎよ」
「……そうですね、少し考えすぎだったかも知れませんね…ありがとうございます」
「何てことないわよ、それより芽衣さん。さっき面倒な鴉天狗が貴方を探していましたよ」
「鴉天狗？（文のことかな…）」
「そう、新聞記者の様な「おーい、霊夢ー！こっち来いよー！」すいません、魔理沙が呼んでるんで…」
　霊夢ちゃんは魔理沙ちゃんに呼ばれて移動する。

「新聞記者ね～」
「新聞がどうかしましたか？」
「！」
　私は声に反応して後ろを向く。
　其処には射命丸文がメモ帳を片手に立っていた。
「どうも、文文。新聞を書いている射命丸文です！これで会うのは二回目ですかね～。いやー驚きましたよ。あの時鬼に会いに行って死んだと思ってましたよ、それとあれから数百年も経っているのに姿が変わらないなんて…これは取材するしかありませんね……」
　文は途中から顔を伏せてぶつぶつと喋ってしまっていた。
　私の声に全然反応しなくなってしまった。
「おーい、文～？あれ？聞こえてる？聞こえてない？」
「それでは芽衣さん！」
「ひゃっ！……（びっくりしたー…急に顔を上げないでよ…）」
「取材…してもいいですか？」
「取材？」
「ええ、貴方の事を新聞に載せたいので、お願いします！」
　文は頭を下げてお願いしてくる。
「う～ん…じゃあ何か面白い事とかがあったら私に知らせてくれる？それなら明日、取材受けるけど…」
「分かりました！ありがとうっございますっ！」
　文は手を握りとても嬉しそうな表情でお礼を言って来る。……取材を誰も受けてくれないのかな？
「あ、そうだ。新聞って取れる？」
「え？……取ってくれるんですか？」
「駄目かな？」
「い、いえいえ！喜んで届けさせて頂きます！」
「それでお金は…」
「勿論！初めてのお客なので無料で！」
　私が初めてってどういう事なの…他に文文。新聞取っている人はいないのかな？

「あ、それと事実を書いてくれると嬉しいな」
「う……努力します……」
文は顔をまた伏せて言う。
新聞が取られて無い理由って事実か本当かどうか怪しいからじゃ…
まぁ面白ければいいんだけど。（訳：面白く無ければ駄目）
「じゃあ、明日ね」
「はい！神社に行けばいいんですよね？」
「そうだよー、場所分かる？」
「はい、事前に調べて置きました！」
「え？……まぁ、いいか」
「それでは、明日！よろしくお願いします！」
その後、芽衣は宴会で歌を歌い最高潮までヒートアップさせたそうだ。
勿論、その光景を文屋が写真を撮っていたので新聞に載る事間違いなさそうだ。
芽衣の写真を撮っていた時、キシに見つかって理由を吐かせられた様だが新聞に偉大な人物として載せる事を条件としてキシは芽衣に話し大丈夫だと言う事で承諾したそうだ。

文々。新聞

「芽衣さん！約束通りに新聞の配達と取材をしに来ましたよ！」
「……ありがと、でも今はまだ眠いんだけど…」
　現在、朝の４時である。太陽もまだ出ていない時間だ。ちなみに今日は曇り。
　でもキシと詩音は起きていた。
　キシは文が神社に近づいた瞬間に目を覚まし、詩音は最初から起きていた。何故かは分からない。
　今、キシは朝ご飯を作り、詩音は神社の掃除をしている。
「あややや、すいません。いても経っても居られずに……来ちゃいました♪」
「……まぁ、いいや。上がっていいよ」
「それでは失礼します！」
　音妖神社の家の中は和風で統一されており、和室・寝室・調理場・実験部屋・儀式場などが一通り揃っている。普通の家と比べ物にならない程大きいのが特徴だ。
「しかし……博麗神社とは大違いですね、巫女は早起きだし掃除も行き届いている……素晴らしいですね！」
「いや……普通じゃない？」
「それを霊夢さんに言ってあげて下さいよ」
「あーそうだね……今度、掃除しに行ってあげよ……」
「それでは、早速！取材の方、いいですか？」
　文は使い慣れたメモ帳とペンを両手に構えている。
「まぁ、答えられる事なら」
「あ、取材と言っても簡単なものですから安心して下さい。ではまず、芽衣さんは能力などお持ちでしょうか？別に答えたくなければ無理しないで大丈夫ですよ」
「能力？あ、えーと……『真似する程度の能力』？」
「……具体的には？」

「何かを真似たり出来るよ、紫の能力とか、ほら」
　そう言って、私はスキマを開ける。
「それはまた、凄い能力ですね……妖怪の賢者の能力を真似する事が出来るとは……知り合いで？」
「そうだね、古い知り合いだよ」
「へぇ～……あ！そう言えばこの前会ったのは数百年前ぐらいですよね⁉人間辞めてるじゃないですか！」
「え？……そりゃ、別の能力を真似しているから……」
「便利ですね～例えば、いくつくらい真似出来るんですか？」
「……数十個？」
　と言っても私本当の能力から考えると数百、或いは数千程度の能力を扱えるだろう。
　だけど私はあまりそれを使わない。あくまで人間だから。
「それでは質問を変えますね、……実際、この神社にいる人で誰が一番強いんですか？」
「……キシか詩音かパウじゃない？皆、凄く強いよ」
「え？芽衣さんは？」
「私は敵わないよ」
「へぇ～、そんな便利な能力でも実践では使いにくいとかですか？」
「そうだね、扱いが難しいよ」
　実際、この神社にいる一人が幻想郷、全てを敵に回したとしても圧勝する確率がとてつもなく高い。
　強さで言うと、芽衣＝星月〉キシ〉詩音＝パウ〉プリニー〉幻想郷の方々、と言う風になる。
　そして幾つもの質問をして次の質問に入ろうとしていた。
「それでは次に……」
「芽衣お姉ちゃぁあああああああん!!!」
　文が次の質問をしようとした時、外から物凄い勢いで声をあげながら窓も障子も破り芽衣の腹に飛び込んで来た人物がいた。
「ごふっ……や、やぁ、フランちゃん……」
　飛び込んできた人物はフランドール・スカーレットだ。

フランちゃんは目に涙を溜めて私にしがみついている。
「うぅ……芽衣お姉ちゃん……」
私はそんなフランをそっと抱きしめる。
「ごめんね、この前は」
「……怖かった……芽衣お姉ちゃんが変わっちゃったと思って……」
「私は私だよ、それはずっと変わらない。だから安心して」
「ぐすっ……うん！」
「……えーと……確かこちらの吸血鬼は……」
「フランだよ！」
「それは分かっているのですが……何故、芽衣さんをお姉ちゃんと？」
「？、お姉ちゃんはお姉ちゃんだよ？」
「貴方にはレミリアさんと言う姉がいるではありませんか」
「アレはお姉様」
「……芽衣さ～ん」
文は私に説明を求め悲願する。
「あー……それはただ呼んでるだけだよ」
「あ、そういう事だったんですね」
「ねぇねぇ、芽衣お姉ちゃん！弾幕ごっこやろうよ！」
「え？でも、取材が……」
「あ、構わないですよ？それに芽衣さんの強さがどれくらいか見てみたいですし」
「じゃあ、久々に体を動かしますか」
「やったー！」

少女準備中……

勝負の内容は先に二回被弾した方が負けでスペルカードは無制限。
少し神社から離れた場所で私とフランは勝負する。
「いやぁ、芽衣さんはどれくらい強いんでしょうね？わくわくします

よ」
「あんま期待しないでよ……」
「私から行くよ！『禁忌「クランベリートラップ」』」
フランは魔法陣を展開して縦横に移動しつつ私を狙って弾を発射してくる。
そして難易度はちりばめられた弾幕の数を見れば分かる通りＬｕｎａｔｉｃ……いやそれ以上。
うん、見ていて綺麗な弾幕だ。そしてスペルは終わる。
「あ、あれ？簡単に突破されちゃった」
「じゃあ、次は私だね。『言符「飽きない言葉」』」
私の周りに幾多の文字、言葉が浮かび上がり不規則にそして幾つかはフランに向かって飛んでいく。
ふふ、これは私の知っている言語が飛び交うスペル。その量はとても多い。
「私の知っている言語は千を超えるからね」
「やっぱりお姉ちゃんは物知りだな～……っとと、危ない」
「あ、そうだ。フランに教えとくよ、まだ展開している言葉は２割を切っていないよ？」
「ええ!?」
それに対して驚いたフランちゃんは弾幕に当たってしまう。
「こんなもんかな。スペル解除」
「え？」
「ほら、次はフランちゃんの番だよ？」
「あ、う、うん」
フランは何故スペルを止めたのか分からないまま自分のスペルを唱える。
「『禁忌「フォーオブアカインド」』!!」
「「「手加減しないよ！」」」
「全員でかかって来なよ」
私は軽く体を動かし挑発する。フランちゃんもそれに乗り全員で襲いかかる。

一人は直接私を攻撃しに行く。二人目は遠くから弾幕を三人目は遠くからレーザーを最後の一人は攻撃と弾幕を使い分けて攻撃する。
だが私は接近戦を挑んできた一人目の攻撃を避けて逆に二人目、三人目の放った弾幕を利用して一人目に当てる
それを見て遠くから弾幕を放っていた二人は私に突っ込んでくる。
その判断は甘い。
私は四人目を掴むと突っ込んできた二人に向けて投げる。四人目は突っ込んできた二人をラリアットする様な形で巻き込み三人とも落ちていく。
地面に落ちたフランちゃんは気絶して伸びていた。
「あらら、これは私の勝ちでいいのかな？」
「それで良いと思いますよ。それにしても凄い動きでしたね、人間じゃない動きをしていましたよ」
遠くから見ていた文は勝負が付いたと同時に凄い速さで戻ってきた。
「そんなに……？」
「ええ、これで良い記事が書けそうです」
「これで取材はいいの？」
「はい、朝早く明日に新聞持ってくるので読んでくださいね！それでは編集があるので！」
文は手をかざして瞬く間に空を飛んで帰っていく。
（流石、幻想郷一早いだけあるね。おっと気絶しているフランちゃんを運ばないと…というかもうお昼かな？）
曇りなのであまりわからないが少し空腹を感じる。
（お腹空いたなー、早く帰ってキシのご飯食べよう。そうしよう）
私はフランを背負って神社へと戻る。
（それにしても大きくなったな～フラン）
その時の芽衣がフランを見つめる眼はまるで母親の様だった。

紫の頼み

清々しい朝がやってきた。天気も晴れており体が軽い。
私は新聞が届いていないかと玄関に向かう。と其処には律儀にドアの間に挟んで新聞があった。
「…えーと…見出しは……『物凄く強い歌姫？』」
新聞の内容は私が宴会の時に歌っていた時の事や昨日、フランちゃんと戦った事が写真付きで鮮明に綴られていた。最後等へんには「この歌姫と執事は本当はどんな関係なのか！」みたいな事も書かれていた。まぁ、面白そうだから別にいいけど。
「お嬢様、食事が出来ました……それは天狗の新聞ですか？」
「うん、そうだよ。キシも読む？」
「ええ、お言葉に甘えまして拝見……最後以外はちゃんとしていますね」
「まぁ、別にいいんじゃない？」
「それもそうですね、それとお嬢様。お客様がいらっしゃっています」
「お客？……う～ん、案内して」
「分かりました、こちらです」
キシが案内したのはいつものご飯を食べる場所、其処には詩音とパウの他にもう一人、紫が座っていた。詩音とパウは気にせず朝食を食べている。
「あ、紫。何でこの前宴会に来なかったの？」
「あ…あら、おはよう、芽衣。こ、この前は少し体調が悪かっただけよ」
「今も顔が赤いけど大丈夫？熱でもあるんじゃない？」
「そ、そそそんな事は無いわよ！」
「そう？ならいいんだけど…それで何か用事でもあるの？」
「あ、そうそう。その為に来たのよ（半分嘘だけど）」
私はご飯を食べながら聞こうと紫の横に座る。少し紫が驚いた様な気がしたけど気のせい。
「そ、それで芽衣に頼みがあるんだけど…霊夢の修行を手伝ってあげ

てくれないかしら？」
「どうして私が？それに霊夢ちゃんなら修行しなくても強いでしょ？」
「そうね、強いと言えば強いけれど此処にいる面子には勝てないわ」
……まぁ、否定はしないけど…あれ？詩音は確かこの前やられていた様な気がするんだけど…。
「ま、まぁ、とにかく、霊夢の修行を手伝って欲しいのよ」
「でも、それって紫がやればいいんじゃない？」
「私じゃもう手に負えないから頼んでるのよ…」
紫が手に負えないって…どんだけ霊夢ちゃん力付けたの…？
「…もぐもぐ…ご馳走様、じゃあ、行きますかな！」
「あ、それと芽衣。博霊神社に行く前に御阿礼の子の所に行ってくれないかしら？」
「え？阿礼ちゃんが？」
「いや、今は確か阿求と名乗ってた筈よ」
そう言えば転生してるんだっけ？なら別に変わってないと思うけど…。
「分かった、行ってくるよ」
「あ、母上～私も行きます～」
「人里行くなら団子屋で団子２００本ぐらい買ってきて！」
パウは少し桁が違う団子を買ってきてと言う。というか団子屋が過労死する。
「…食べ過ぎは良くないよ？」
「大丈夫！」
「お嬢様、お気をつけて」
「…はーい」
こうして私と詩音は団子を買いに…じゃなくて阿求の屋敷に向かう。
この神社と人里まで行くのに道はしっかりと整備されており参拝者も何人か見える。使い慣れた道の様なので新しく作られた道では無い。私が長い旅をしている間に作ったのだろう。そして無事人里

に到着する。
　勿論、団子屋に団子２００本注文した所、団子屋は目を白黒させて了承した。今日中には用意をするらしい。帰りにでも寄ろう。
「母上、此処ですよ阿求ちゃんのお家」
「へ～私の神社と同じぐらい大きいね～」
「そりゃそうでしょう、幻想郷の情報は全て此処に集まるとかなんとか言われているぐらいですから…」
「それで……どうやって入るの？」
　目の前には大きな木の門がそびえ建つ。門の前には二人の門番らしき人がいる。
「大丈夫ですよ。……あの～すいませ～ん」
「稗田の屋敷に何か用か？詩音殿」
「はい、ちょっと阿求ちゃんに用が有るので通して頂けますか？」
「ああ、入って良いぞ」
　門番が片手で大きな門を二人で開ける。…門番は少し人間離れしている様だ。
　なぜなら門の厚さは３０ｃｍ程、大人が数人でやっと開けられる程の物だからだ。
　それと私は何故、門に扉が付いているのにそれを使わないでわざわざ門を開けるんだろうと考えていた。
「母上、早く行きましょうよ～」
「え？ああ、ごめんごめん」
　屋敷に入ると案内の人が出迎えてくれて阿求の部屋に案内してくれた。
「失礼します、阿求様。お客様が来られました」
「ええ、分かっています。貴方は下がっていいですよ」
「はい」
　そう言われ案内人は退出する。
「さて……久しぶりですか？それとも初めましてですかね？」
「久しぶりでいいんじゃない？変わった所と言えば前髪が短くなった所ぐらいだし？」

「良く覚えていますね」
「阿求程じゃないと思うけどね」
「それもそうですね」
　阿求は苦笑する。
　阿求の一族……というか阿求は転生を繰り返している。
　なぜなら彼女は『一度見た物を忘れない程度の能力』を持っているからだ。
　だが転生する時に大半の記憶は消えてしまう為、前世などの記憶はあまり持っていない。
　けれど私と会った時の事が記録に残っていた為、阿求は私の事を忘れていない様だ。
「それでですね、今日呼んだのは芽衣さんの記録が無いので作る為に呼ばせて貰いました」
「え？母上の資料ってまだ無いんですか？」
「ええ、なので芽衣さんを記録に残したいのですが宜しいでしょうか？」
「私は全然、構わないけど？」
「ありがとうございます、それでは名前から一からお願いします」
「……長くなりそうだね」
　～数時間後～
「……これで大丈夫です。ご協力ありがとうございました。途中、色々と怪しい回答がありましたが良いでしょう。それと一つ良いですか？」
「ん？何？」
「あの…私がこの幻想郷縁起を転生してまで編纂を続ける意味は有るのでしょうか？」
　阿求から出た言葉は予想外のものだった。
「それって、『人間を守るための書物』として意味を成さなくなって来たからって事？」
「…はい」
「そうだね、最近では表でも妖怪と人間の距離が近くなっているしね、

そう思うのも無理は無いけどさ。でもそれでも人間に対して敵意を持っている妖怪だっているかもしれない。とても危険な妖怪が何処かにいるかもしれない。そういう事が確認出来るのはこの書物だけだよ。意味が無い事なんてこの世界に無いんだよ阿求」
「!……は、はい!ありがとうございます!」
「お礼は良いよ。もし阿求が転生をしたくなくて無理に地獄の閻魔様にやらされているとしたら、私は地獄全てを相手にするよ」
「えぇっ!?だ、大丈夫ですよ。これは私の意思でやってる事ですから」
「なら良かった。さて霊夢ちゃんに会いに行くとしますかな……どうしたの?詩音」
　詩音は立たずに座ったままプルプル震えている。
「……ずーっと座って聞いてるだけだったので足が痺れました。おんぶして下さい」
「仕方がないなぁ…よっと、じゃあ、またね阿求」
「今度は遊びにいらして下さい」
「そうだね、暇な時に来るよ」
　私は阿求に見送られて人里を後にして博麗神社に向かった。
　現在はお昼過ぎだ。お昼は阿求の所でご馳走になった。
　博麗神社にはいつも通り、霊夢ちゃんと魔理沙ちゃんがいた。
　魔理沙ちゃんの方は何故かボロボロというか満身創痍で霊夢ちゃんの方は物足りないという顔をしていた。
「…えーと…何でそんなボロボロなの?」
「あっ!聞いてくれよ芽衣さん!此処に来たらいきなり霊夢が弾幕ごっこやら天則やらで散々だぜ!」
「…それで霊夢ちゃんは?」
「強い相手が居なくて物足りないです」
　…別の意味での欲求不満?それともただ強くなりたいだけ?……
　まぁ、取り敢えず…
「なら詩音と本気で戦ってみたら?弾幕は苦手だけど普通に戦うのなら得意みたいだし」
「……分かりました。全力で行かせて貰います」

霊夢ちゃんは既に戦闘準備万端の状態だった。
何が霊夢ちゃんを此処まで動かすのか全然分かんないよ。
「詩音、足の痺れは治った？」
「はい、それで……母上…私も本気出していいですか？」
……此処で本気？…まぁ、いいか。
「いいけど…でも少しは手加減してあげてね」
「分かってますよ！」
あの目……絶対分かっていない目だ…。
「それじゃあ、行きますよっ！」
「来なさいっ！」
そして霊夢ちゃんと詩音のお互いガチ戦闘が始まった。

霊夢の在るべき姿

「さーて始まりましたー！幻想郷最強と言われる巫女と神様が最強と言われる巫女！どちらが勝つんでしょうかね!?実況はたまたま通りかかった私、射命丸文がお送りします！」
「何で天狗が…」
「まぁまぁ、気にしない気にしない」
　霊夢ちゃんと詩音が戦おうとした時に偶然に通りかかった文に私が実況を頼んだ。
　まぁ、頼まなくてもやろうとしてたけどね。
　それと霊夢ちゃんと詩音は現在、睨み合って硬直状態。
「二人共全然動きませんねーなら先に芽衣さんにこの結界の説明をして貰いますね。どうぞ芽衣さん！」
「え？ああ、この結界は私の『完全結界』だよ。多分博麗大結界より数段上の強度を誇るんじゃないかな？」
「さらっと凄い事言ってますねーいつも通りと言えばいつも通りですが」
「やっぱり芽衣さんは人間じゃないぜ……」
　今その結界は霊夢ちゃんと詩音を取り囲んで外に被害が出ない様にしている。
　色々と心配だからね、特に詩音が。
　それと魔理沙ちゃん、私は普通の人間だよ。
「……行くわよっ！」
「おおっと！霊夢さんが先に動きました！対する詩音さんは動きません！」
「……いやーこれもう決着したんじゃない？」
「どういう事ですか？」
「詩音は召喚が専門だから時間与えるとぽんぽん呼び出すんだよ」
　霊夢ちゃんが詩音に向かって走りながら札と針を投げる。
　対する詩音は……

「……準備万端です！さぁさぁさぁ!!出てきて下さい！皆さん！」
そう叫んだ瞬間に詩音の目の前に膨大な霊力が集中し始めた。
その一つ一つは人の形を形作ろうとしていた。
飛んでいた札と針は霊力に遮られ詩音に届かず全て地面に落ちた。
「なっ…なっ…何なんですかあれっ!?」
「だから言ったじゃん？詩音は召喚の専門だって……それにしてもあれは…」
そして霊力は人に変わる。其処にいたのは……
「これは……やばいわね。私の感が全力で逃げろと言っているわ……」
「良く来てくれました！陰陽師の皆さん達！」
其処には平安時代の有名な陰陽師を代表とした数十名の人間が立っていた。
私はこの中で会った事が在る人が多いから良く覚えている。紫や幽香でも一人を相手にして勝てるかどうか怪しい人達だ。
「す、凄い霊力ですね……一人一人が霊夢さんの比じゃありませんよ……それも数十人。それにあの四人なんて桁違いですし…あんな人がまだ外の世界にいたんですね……」
「末恐ろしいぜ」
「何言っているの二人共？あの人達はもう死んでるよ？昔の凄い人達なんだよ」
「えっ？死んでいるのに呼び出せるんですか？」
「そうだね、簡単に説明すると詩音が此処、現世にあの世から魂を召喚する。これだけでも数日かかる儀式とか生贄とか色々必要なんだけど詩音はそれを一瞬でそれも生贄無しで行っているね。でも魂だけを召喚しても意味は無い。器が必要なんだよ」
「器？器って何ですか？」
「人間の場合は生前生きていた程の霊力が必要だね」
「!?……ならあの人達全員が出している霊力は全部元々…」
「そう、全部詩音がこの現世に留まれる様に提供した霊力だね」
「貴方の所にいる人達はやっぱり色々とぶっ飛んでいますね」

本当につくづく凄いと思うよ。まぁ、詩音が世界を簡単に滅ぼせる様なのを出さなくて内心ホッとしてるけど。
「……けど私は…負けられないのよ！」
霊夢ちゃんはそう断言すると詩音が呼んだ陰陽師達に向かってスペルを幾つも発動しながら突撃した。
「う～ん……負けられない…ねぇ…魔理沙ちゃんは何か知ってる？」
「えーと……あ！確かあいつに負けた時だぜ！多分！」
「あいつって？」
「名前は知らないけど執事みたいだったぜ！」
（キシの事だろうな……）
てことは霊夢ちゃんはキシに負けたから負けられないって言ってるのかな？
なら理由は…博麗の巫女だから負けられない？それともただ単に負けず嫌い？
……負けず嫌いの方が可能性が高そうだな～。
だとすると霊夢ちゃんが力をつけたがっているのも納得がいくかな。

「このっ！…ああっ小賢しいっ!!」

霊夢ちゃんは四方八方に分かれた陰陽師達の攻撃を全て躱しながら詩音だけを重点的に攻撃している。
勿論、詩音の周りに居る陰陽師がその攻撃を許しはしない。
おそらく術者（詩音）を倒せば陰陽師達が消えると判断したんだろう。
だが、その時…
バチィ！
!?…何なのよっ！これっ！」
「あーっとぉ！霊夢さん、一枚の札に当たってしまったぁああ！」
「天狗が煩いぜ…」
今まで四方八方から飛んでくる札を全て避けてきた霊夢ちゃんが一枚の札に当たってしまった。

注意力が足りなかった？ただ単に見落としてた？
いや、違う。霊夢ちゃんに限ってそんな事は無い。
だとしたら残るは……
「「隠密系（ステルス）の札」」
私と霊夢ちゃんの声が重なる。霊夢ちゃんも気づいたのだろう。
「けど、こんな札効きもしない…わ…よ…？」
徐々に霊夢ちゃんの動きが遅くなっていく。
どうやらあの札は動きを封じる札の様だ。
刹那、散らばっていた陰陽師、全てが印を組み始めた。
霊夢ちゃんもそれを止めようと体を必死に動かし札と針を投げるが…
「…」
陰陽師に遮られる。
そして霊夢ちゃんの動きが止まったのを見届けると陰陽師達が印を組み始める。
印が組み終わると最後だと言わんばかりに霊夢ちゃんに幾つもの札を投げる。
「この……程度っ！……夢想…転生！」
霊夢ちゃんの『夢想転生』は魔理沙ちゃん曰く、霊夢ちゃんはありとあらゆるものから宙に浮き無敵となって触れなくなり、不透明な透明人間になるだそうだ。
だが見る限り霊夢ちゃんの夢想転生は発動しておらず飛んできた札も全て当たってしまう。
「なん…でっ……ぐっ！」
札に当たった霊夢ちゃんは重力が増したかの様に地面に突っ伏す。
キシの重力増加の時と類似している為、限りなく近いそんな札を貼られたのだろう。
「へぇ～これが『能力封印の札』なんですか～。え？妖怪退治の時に重宝する？あ～」
詩音は召喚した陰陽師と話していて、会話の内容が聞こえる。
なるほど、だから霊夢ちゃんの技が発動出来なかったんだ。

というかそんな札なんて有ったんだ。知らなかった。
「さてと、これで私の勝ちですよね」
「ま……だよっ……」
「そんな弱々しい声で言われても説得力無いですよ？なんなら私が再起不能まで叩き潰しても…」
詩音の目は本気で霊夢ちゃんを再起不能にすると語っている。
これは私が止めないと…
私は結界を解除して二人に近寄る。
「ちょっと詩音？もうそれぐらいで「まだ、私は負けていないっ！」！」
霊夢ちゃんは霊力を開放して知ってか知らずか札の効果を一時的に無効化して立っていた。
「まだよ、まだ終わっていないわ。来なさい！」
「分かりました、行きま「待ちなさい」…何ですか母上？」
二人がまた戦いそうだったので制止させる。
「芽衣さん。何で止めるんですか？私はまだ戦えます」
「何処が。霊夢ちゃん、立ってるだけでも精一杯なのに？更にそんな無理に霊力を開放して身体への負担が大きすぎる。今すぐやめた方が良いよ」
「で、でも……」
「それは本当か霊夢!?そんなの直ぐにやめるんだぜ!!」
魔理沙ちゃんの一言、ただそれだけで霊夢は霊力の開放を止める。
勿論、霊夢ちゃんは地面に倒れる。
「霊夢っ!?」
そう言って魔理沙ちゃんが霊夢ちゃんの傍に近寄る。
「詩音、札の効果を解いて」
「あ、はいっ！」
詩音が陰陽師達に話すと霊夢ちゃんに貼られていた札が解かれる。
そして詩音はそのまま陰陽師達を帰らせる。
私は霊夢ちゃんの身体への負担を完全に消す。それと目に見える傷も治す。
「芽衣さん……霊夢は…」

心配そうな眼で魔理沙ちゃんが私を見てくる。
「大丈夫だよ、直ぐにでも目を覚ます。ほら」
「う…う～ん…。あれ？私…」
「霊夢！良かった～」
「魔理沙…」
さて、霊夢ちゃんが目を覚ました所で……本題に入ろう。
「霊夢ちゃん、聞かせてくれる？何で其処まで負けられないのか」
「……はい」
霊夢ちゃんは言った。
博麗の巫女が異変首謀者に負けてはいけないとだから修行をしたと。
負けるのが嫌だという事も言っていた。やはり負けず嫌いな面もあるのだろう。
だから私は優しくこう言った。
「まぁ、修行する事は大事だね。負けず嫌いな所も悪くない。でも…」
「でも？」
「霊夢ちゃんらしくない、かな？」
「私…らしくない？」
「そう。霊夢ちゃんはいつも陽気に見えるけど直感や第六感が凄いじゃない？だけどさっきの戦いでは札を避けられなかったでしょ？」
「あ、あれは気配が感じなかったから…」
「でもいつもの霊夢ちゃんなら勘で避けられたんじゃない？」
「！」
「要するに思い詰めないで考え過ぎだって事。だから霊夢ちゃんらしくない」
「そうだぜ、考え過ぎだぜ！一度や二度負けたぐらいで！」
「……そうね、私らしく無かった。芽衣さん。ありがとうございました」
「お礼なんて……まぁ、自分の身体は大事にしなよ？」
「はい！」
私は霊夢ちゃんと魔理沙ちゃんに見送られて博麗神社を後にする。

何故か文が付いて来たが丁度良い。
「文、今日の事は秘密にしてくれる？」
「え？……芽衣さんがそう言うなら…分かりました」
少し残念そうな顔をするが今日の事は私達の秘密にしときたいからね。
でも、それじゃ文が可愛そうかな？それなら…
「ありがと、お礼に良いネタを教えてあげるね」
「本当ですか!?」
残念そうな顔は一瞬にして喜びの顔に変わる。
「それはね、太陽の畑に住んでいる妖怪の事。彼女の話は面白いと思うよ」
「太陽の畑……それってあの向日葵が多く咲いている所ですか？」
「そうそう」
「ありがとうございます！それじゃあ、早速行ってきますね！」
「あ、文！くれぐれも戦わない様にってもう行っちゃったか…」
「母上～早く団子買って家に帰りましょうよ～お腹空きました～」
「そうだね、早く買って帰ろうか」
私と詩音は人里に行って団子、２００本と2本を買って帰った。２本は私と詩音に。
そして後日、記者が怪我を負ったとか何とかで文々。新聞は配られ無かった。
幽香と戦ったのかな？今度、謝って置こう。